

ハリー・ポッターと半 純血の予見者

ななじい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ごく普通だったはずの女子高生は未来のために死に、そしてルーレットで転生先を決めちゃうような適当神の下、ハリー・ポッターの世界で原作改変しよっかなーと思っちゃうテキスト自己満足小説です。

何気に初投稿だったりするので温かい目をお願いします。

目次

| | |
|--------------------|-----|
| プロローグ | 1 |
| 始まり | |
| 第1話 半純血の予見者 | 15 |
| 第2話 出会いの日 | 24 |
| 第3話 ペティグリユール | 33 |
| 第4話 ホグワーツ魔法魔術学校 | 42 |
| 第5話 組み分け 前編 | 60 |
| 第6話 組み分け 後編 | 76 |
| 第7話 ダンブルドア | 90 |
| 第8話 魔法薬学 | 98 |
| 第9話 飛行訓練 | 110 |
| 第10話 シーカー、そしてチェイサー | 121 |
| 第11話 優しき | 132 |
| 第12話 真夜中の決闘 | 141 |
| 第13話 例のあの日 | 159 |
| 第14話 ハロウィーン | 174 |
| 第15話 クイディッチ | 194 |
| 第15.5話 大勝利のその後で | 212 |
| 第16話 ニコラス・フラメル | 217 |
| 第17話 クリスマス 前編 | 232 |

| | | | | |
|------|--------------|----|---|-----|
| 第18話 | クリスマス | 中編 | — | 245 |
| 第19話 | クリスマス | 後編 | — | 252 |
| 第20話 | みぞの鏡 | — | — | 260 |
| 第21話 | 大事件 | — | — | 265 |
| 第22話 | サブタイが迷子(思い浮か | — | — | 275 |
| | ばない) | — | — | |
| 第23話 | 事件解決 | — | — | 281 |

プロローグ

そこは家の前、この近所では比較的大きな交差点。車通りも多く、日頃から事故が多発する危険な場所だ。

今日もその交差点の電柱には白いユリが供えられ、事故に遭った人が好きだったのであろうオロナミンCドリンクが栓を外されたまま置かれていた。しかし既に蒸発したのか中身は殆ど残っていない。

憂鬱だ。

こんな日の照りつける真っ昼間に家から出たのが間違이었다。ぬるい汗が頬を伝い、首に落ちる。あまりの暑さにゆらゆらと揺れる地面と、萎びた白いユリ。信号の赤い光が余計に気を滅入らせる。

ああ、アイスが食べたいなんて、馬鹿馬鹿しい。

唐突にアイスを食べたい衝動に駆られなければ、私はまだエアコンの効いた涼しい我が家で母に勉強でもしろとどやされていただろうに、どうして何も考えずに出てきてしまったのだろうか。

「お母さんー」

唐突に少年の高い声によって現実引き戻された。

赤い光の灯る交差点に駆けてゆく小さな麦わら帽子。男の子らしい青いリボンが揺れる。横断歩道の先、母親らしき女性が振り返り悲鳴を上げた。全てがスローモーションのように見えた。道路に飛び出した麦わら帽子の少年と彼に迫る鉄塊。絶望的に叫ぶ母親は両手で顔を覆い崩折れる。

気が付けば足が動いていた。右足が地面を強く蹴り、左足を大きく踏み出した。少年に伸ばした右手が彼の細い肩を捉える。

自分の走る勢いに任せ彼の身体を歩道に突き飛ばした。

あ、死んだ——

彼を助けようとするあまり自分のことを考えていなかった。少年を放り出した勢いのまま、私の身体はトラックの前に躍り出る。

衝撃のその瞬間、私は笑った。いや正確には笑ってはいない。心の中で苦笑した。

死ぬ瞬間には走馬灯が走るだなんて、真っ赤な嘘じゃないか。

現に血濡れで灼熱のアスファルトに伏せる私の眼の前にあるのはトラックのタイヤと、衝撃で変な方向を向いてしまった痛々しい右手だけ。痛みはなかった。否、それで

は語弊がある。右腕の痛みを感じることでできないくらいに私は全身にダメージを負っていた。

視界が暗転する直前、母の声を聞いた気がした。

ああ、最後に、アイスが食べたかったなあ。

目覚めたのは、壁も天井もないただ真っ白な空間で。目の前に居る白い髪の小さな女の子は無表情なまま私を見つめていた。無表情でさえなければ、文句のつけようのない美少女なのに、と脳天気と思う。やがて彼女は口を開いた。

「ようこそ、赤坂里乃。早速だが君は死亡した」

「でしようね」

「おお、なんだ、驚かないのか」

冷静に返せば彼女は面白そうに微笑んだ。

「今更驚かないよ、あんな重傷で生きてるほうが変だし」

「まあ…そうだな。話のわかる奴で助かった。前のやつなんか大騒ぎして強制送還する

他なかったからな」

そう苦笑して彼女はどっこいしょ、と言って床に座り込み、私にも床に座るように勧めた。

「さて、本題だが君は自らの命と引き換えに人類の舵を大きく切った。良い方向にな。そこでだ。私は良いことをした人間には褒美をやるようにしているのだよ。だから君に2度目の人生をやろう、とね」

私が座ったのを確認して彼女は話し始めた。

「褒美は何となくわかったけど……私が舵を切った……？男の子を一人突き飛ばして、その子はバスにペしやんこにされずに済んだってだけでしょ？」

疑問に思い、深く考えずに質問をぶつければ彼女はやりと口角を釣り上げる。

「それこそがへ良いことなんだよ。彼は君に救われたことによりヒーローになりたいと考えた。君のような、ね。そうして彼はいつかヒーローになる。核完全廃絶の中心人物だよ」

彼女は両手を広げて見せ、その上に球体を創りだした。

「こつちが彼のいる世界。未来だ」

右手の球体を掲げた。今とさして変わらない町の様子が映っている。タイヤのない車らしき乗り物が少し浮いているくらいだ。

「こつちが彼の死んだ世界。もしもの世界だ」

今度は左手の球体を掲げた。鬱蒼と不気味な植物が生い茂り、少し向こうは黒い砂漠と化している。とても人類が生存しているとは思えない。

「君と、彼の命。たったそれだけでこれほどまでに未来は変わる。だからこそこの未来のために犠牲になった君には褒美をやりたいんだよ」

彼女は球体を握りつぶし、微笑んだ。

「次の人生さ。だが生憎、良いことをし過ぎた君は既に輪廻の輪を外れてしまっている。ヒンドゥー教徒が求めているものを君は得たわけだが……まあ、正直言って私は面倒くさい。何故なら君のために新しい世界を作らなきゃならんからな。そういうことで君の記憶によく残っている物語を元に創り上げた世界に生まれてもらおうと思う。それでいいな?」

一気に彼女は捲し立て、どうだ?と首を傾げた。

よく理解は追いつかなかったが、要するに私が見たことのある何かしらの2次元の世界に行けということだ。

「それは……どの世界で?」

よくぞ聞いた、と言わんばかりに彼女は口角を釣り上げて悪そうな笑顔を浮かべた。悪い予感しかないのは私だけだろうか。

「ハリー・ポッターだ。J・K・ローリングが執筆し、多くの人間の間で歴史的なヒットを呼んだ大人気小説。今では誰もがそれを知っていて、君に関してはユニバーサル・スタジオ・ジャパンでいくらかの杖とグリフィンドールのローブセット、タイムターナー時間時計のネットワークを揃えてしまうほどにファンだ。さあ、もう世界を創ってしまったからね、君に拒否権はないよ。君の来世を説明してもいいかな」

パン、と軽く両手を打ち合わせて彼女は微笑みを浮かべた。すると目の前にA4ほどの白い紙が現れた。いや、私の方が白いだけだ。彼女の方には何やら細かい字がびっしりと書き込まれていた。それはもう寒気がするほどにびっしりと。

「さて、君の来世の名前はレジーナ。レジーナ・アイリーン・ブラックだ。お察しの通り父親はシリウス・ブラック。彼には君を生まれさせるためにオリヴィア・ディアナ・ローレンスというマグル生まれの女性と結婚してもらった」

「君はまさしく眉目秀麗、魔法薬のセンスも飛行のセンスも一流。ずば抜けた魔法力もある。ああ、それから君をあの予言にでも登場させよう。面白そうだ」

「あの、それって死亡フラグじゃ…」
彼女はまた笑う。

「まあ、そうだな、予言には登場させるが死なない仕様にしてやろう。それなら問題ないだろう?」

そう言つて首を傾げて片眉を釣り上げた。

「そういうことではないんだけど……でも、ヴォルデモート卿の手にかかることはないならまだ許容範囲かな……？」

彼女は頷き、また手元の紙に視線を落とした。長く白い髪がさらりと垂れる。

「ふむ……そうだな、さらに君には未来を知つていても怪しまれないように多少の予言能力もやろう。的中率は……いや、面白くなるように少し変えてやろう。そうそう、君の母親はレギュラスとホークラックスの破壊に携わりあの薬を飲んだために君を生んだ後で死ぬことになっている。申し訳ないが仕方のないことだ。あまり関係のない人間を増やすのは今後問題が多く出てくるのでな。納得してくれとは言わんが、受け入れてくれるか」

「そつ……か。仕方がないなら……」

神でさえ仕方がないというのだ。私がどうと言つても何も変わらない。まだ見ぬ母に申し訳なく思いながら頷いた。

「話が早くて助かる。では最後にーつ」

そう言つて彼女は手元の紙を巻き、後ろにぽい、と放り投げた。丸められた書類は弧を描き、下降を始めるとともにどこかへ消えた。

彼女に視線を戻せば彼女の右手に握られていたはずのペンも消え、手を組んで彼女は

私を見つめていた。またその顔からは表情が消えていた。

「君が転生する世界だが、あくまでも【ハリー・ポッターを基盤とした世界】だ。【そのものの世界】ではない。だから転生してある程度の成長をしたあとなら、君の好きなように世界を動かしてもらって構わない。それだけの力が君にはあるからな」

まあ、そういうことだ、と彼女はひらひらと手を振った。

「ええ……」

「では早速、転生してもらっていいかな？ そのトンネルを通れば、すぐに第二の君の人生だ。誕生の瞬間なんて中々ないからな、よく記憶しておくといい。ああ、そうだ。生まれてしばらくは君の魂と呼ばれる部分と肉体の結びつきが弱い。よって肉体が勝手な行動を取るかもしれないが問題ないから安心しろ。では赤坂里乃よ、しばしの別れだ」

彼女は突然現れた巨大なトンネルをゆったりと手で示し、そして私の背中を押した。少し前のめりになりながらも彼女に言われるままトンネルの方に歩き出すが、やはり、と思いつくると彼女を振り返った。そして深々と頭を下げる。

「ありがとう、ごさいます」

顔を上げれば彼女は満足そうに微笑んだまま私に手を振った。私はまた軽く会釈をして、トンネルへと踵を返す。

変な気分だ。このトンネルを潜れば私は赤坂里乃を辞めて、レジーナ・ブラックにな

る。あのシリウス・ブラックの一人娘だ。あの麦わら帽子の少年の命を助けた、ただそれだけで私はこの状況に置かれている。

不思議だ。

誰も、あんな子どもが将来核完全廃絶に携わるなどと思わないだろう。あの母親でさえそうだ。自分の息子がそんな偉大な人間になるだなんて思ってもいないはずだ。こんな巡り合わせするのは本当にあるものなんだと一人苦笑した。

真つ暗なトンネルの中、遙か向こうには出口らしき眩しい点が見えた。あそこは、私の2度目の人生。自然と口元に笑みが綻んだ。

昔から、後ろは見えない主義で生きてきよかつたと心からそう思った。でないとなら私は今頃自分の死と家族との唐突の別れで悲しみに溺れていただろう。この性分とあのおかしな神様のおかげでブルーにならなくて済んだと言える。

もう、分岐点だ。

いつの間にか目の前に迫ったトンネルの出口。外はあまりに眩しくて、まだ目が慣れず写真の白飛びのように真つ白だった。

一度立ち止まってゆっくりと息を吐き出してからもう一度外を見つめ、慎重に足を踏み出した。

途端に真つ白な光に包まれて、暗れて私は転生者になった。

とは言ったものの……流石に自分の産声を聞くことになるとは思わなかったなあ……。いや、自分の生まれる瞬間を見ることにはなるだろうと思っただけで流石に……。喉はビリビリして痛いし、鼻は詰まってるんだかわからない上にずっと泣きっぱなしでもう怠い。耳もなんだが自分の声が反響してぼわんぼわんいつてるし。絶対水入ってるよ、これ。

ただ、私を抱いている誰かの手は温かく、限りなく優しい。きつとこの人が、私のお母さんなんだろう。

目は開いていないのか、光を透かして赤い瞼が見えるだけだ。ふと、キーキーとした甲高い声が耳を打ち、ぼわーんと反響した。

「奥様、奥様！出血がお止まりになれません！奥様！」

「オジー、私なら大丈夫よ……。それより静かにしてあげて……レジーナが落ち着けないわ……」

オジーと呼ばれた屋敷妖精を宥めるようにオリヴィアは囁いた。だがどうしても、大

丈夫なようには聞こえなかった。

そんな中、私の身体は私の思いとは裏腹に泣き止み始める。

「ですが奥様……」

「オジー？」

「はい……」

しゅん、と落ち込んだ声に続き、私を抱いている女性はくすくす笑った。次の瞬間、バアン！とすごい音を立てて扉が勢い良く開け放たれた（と思う）。そのせいで私はまた泣き出した。どうにも止められない。

「リヴィー！」

「シリウス！ダメよ、そんな大きな音つ……！ゲホツゲホツ」

入ってきたのはシリウスらしい。オリヴィアはシリウスを怒鳴り咳き込んだ。彼女の腕の中、私は彼女が咳をするたびに揺られ、がくんがくんと首が動いた。まだ座っていない首は必要以上に自由に動きまわったため、彼女よりも大きな手によつて抱き上げられた。太い、筋張った大きな手。きつとシリウスだ。

「すまない。だが無理はするなよ、レジーナだつて生まれたんだ……君がいなくなつたら私はどうすればいいかわからない」

私を宥めようと揺すりながらも、シリウスの低い、悲しそうな声が耳を打った。

「シリウス……もう言ったでしょう？ゲホツ……私は死ぬ予言がされたわ。長くない……」
時折咳をしながら、彼女は囁いた。その声は痰が絡んだように掠れていた。

「君の予言は……的中率が高くないと言ったのは君だろうか？やめてくれ、そんな冗談は……」

「冗談じゃないわよ。自分のことくらいわかるわ……それに血が、止まらないもの……あの呪いはオジーたちにもどうにもできないの。もちろん貴方にも、他のどの癒者にもね……。ねえシリウス……この子、どうやら私に似ちやっみたいね……」

その声とともに、私の頭を細い指が撫でた。驚くほどに冷たくて、思わず死の影を感じた。途端に泣き始める私の身体。この身体も、彼女の異変に気付いたのだろうか。

「何を急に……」

シリウスの声は震えていた。彼の腕を伝って動揺が私にまで伝わってくる。

「私の予言、もう一つ言っておくわね……。この子は、私より強い力を持った予見者になるわ……。きつと、歴史を変えるくらいに強く、例のあの人の脅威となる……予見者……警告者に……」

「何を言ってるんだ！リヴィー！この子がそんなつ……」

「シリウス……ごめんね……でも、これはたぶん……本当だわ……だから貴方が、この子を守って……わた、しの……かわり、に……」

彼女は一際大きく息を吸い、そして全てを吐き出すように深く息を吐いた。そしてもう二度と呼吸することはなかった。

母は死んだ。残された私はシリウスの腕の中で、彼の温かい涙を受けていた。屋敷妖精のオジーでさえ声を抑えて泣いていた。

「旦那様」

クリーチャーの唖れ声が下から響いた。

「お嬢様をお預かり致します」

シリウスは震えたまま私を彼に引き渡し、崩折れた。どきりと重い音と、それに続く嘆きの声がそれを示していた。

私はクリーチャーの骨ばったしわしわの腕に抱かれ、そしてすぐにふわふわのベッドの上以降ろされた。

ぺたぺたと歩き去る足音。そしてまた別の裸足の足音が近付いて来る。

「お嬢様……」

このキンキン声は確か、オジーだ。

「奥様は亡くなられましたがこのオジー、二度とこのような失態は犯しません……お嬢様には例のあの人の危険が及ばぬよう、尽力致します」

彼女は私にそう誓い、ぱちん、と指を鳴らせばその刹那、ひどい眠気に襲われた。

「今はお休み下さいませ、お嬢様……」

黒い、黒い穴に落ちていく。魔法の眠りは不自然なほどにひどくゆっくりと私を深いところに連れて行った。

オジーは、きっと私ではなくシリウスを気遣ったのだ。こんなときの夜泣きほど癪に障ることはないだろう。私は大人しくその魔法の導きに従い、眠りに落ちた。いや、抵抗する術など元々持ち合わせてはいなかった。

強制的な眠りは何も見せず、ただただ暗く温かかった。

始まり

第1話 半純血の予見者

生まれたあの日からずっと、私は寝ては起きて起きては空腹で泣いて、泣き終われば疲れて眠りについてを繰り返した。

そうして3ヶ月ほどが経過しようとしているとき、その報せは舞い込んで来た。

いつものように私は眠りから覚めてシリウスを見た。彼は疲れているのか私のベッドの脇で腕を組んだまま、目を瞑ってこくり、こくりと船を漕いでいる。その目の下には濃い隈。私の夜泣きのせいだ。

だがシリウスもシリウスだ。私のことなどオジーやクリーチャーに任せてしまえばそれで自分は休めるはずなのに、彼は片時も私のそばを離れなかった。まるで私が消えてしまうのを恐れるかのように、彼は時折苦しそうな顔をして私の顔に触れる。

私は母の顔も、自分の顔もまだ見たことがないのでわからないのだが、オジーが言うには私は母にそっくりなのだそうだ。だからシリウスは私から離れないのだろうと勝手に納得しているがやはり、彼の様子はなんだかおかしかった。

そんな時だ。

突然部屋の灯りが消え、青白い光に包まれた。大きな鳥の形をした守護霊が降りてくる。だが居眠りをするシリウスは気付かない。

守護霊はシリウスを見、そして私を見る。家のどこかの時計が午後7時を告げた。

恐らくこの鳥は不死鳥だ。何かの伝言を伝えに来たらしい不死鳥は寝ているシリウスに困惑していた。

起こさないよ。

どんな伝言であれ、ふくろうではなく守護霊を使うのだ。良い予感がしなかった。

私は出来る限りに暴れた。結果、暴れた拍子にベッドの柵に手をぶつけてあまりの痛みに泣くことになったのだが、おかげでシリウスの目が覚めたのでまあ結果オーライだろう。

「どうしたジュー……ダンブルドア先生？」

彼はまだ眠そうだったが、部屋に溢れる青白い光に気が付いた途端、勢い良く立ち上がった。

不死鳥は口を開く。そこから聞こえたのは、美しいその姿とは不釣り合いな真剣な老人の声だった。

『シリウス、誰かが裏切った。リリーとジェームズがあやつの手にかかってしもうた。』

今はハグリッドが生き残ったハリーの救出に向かつておる。詳細はわしから直接話す。そこを動くでないぞ」

その伝言のあと、不死鳥は白い霧となつて消えてしまった。呆然と立ち尽くすシリウス。その手は震えながらも、テーブルの上に置かれた杖に向かつて伸びていた。

復讐に行く気だ。

咄嗟にそう思った。私を置いて、彼はペティグリューに復讐に行つてしまう。そうすれば恐らくペティグリューが凶り彼はアズカバンに送られてしまふだろう。ダメだ、そんなの許さない。

でもたつた生後3ヶ月の私には何もできない。

シリウスは杖を手に、乱暴にドアノブに取つ付いた。だがその刹那、彼はドアごと部屋の中に吹き飛ばされた。

「ダンブルドア校長先生様！お止めくださいませ！」

オジーのキーキー声とともに白い髭を長く伸ばした彼がつかつかと部屋に踏み込んで来た。

その顔は怒りに歪んでいる。

「どこへ行くつもりじゃ、シリウス」

低く、冷え切つた声には静かな怒りが滲んでここにいるほとんど全員に恐怖を覚えさ

せたがシリウスはそれさえもわからないほどに怒り狂つてゐる。

自身に覆いかぶさつたドアの残骸を彼は乱暴に押し退け、ダンブルドアを睨みつけた。

「ペティグリューを殺してやる！秘密の守人はあいつだ！私があいつをつ……!!」
「レジーナを残してか」

怒り狂う彼の言葉を遮つてダンブルドアは静かに言った。その声には先程までの激しい怒りは見られなかったがやはり怒っている。

シリウスは息を詰まらせて狼狽え、そして力なく頭を垂れた。

「今日あやつは密告を受け、ポッター夫妻を襲つた。じゃがどうしてかハリーは生き残りあやつは力を失つた。シリウス、君はレジーナを守らねばならんのじゃ」
「どうしてです……やつが倒れたなら……!」

シリウスが怒鳴る。あまりの声の大きさに私はまた泣き出した。廊下からオジーが慌てて駆け寄ってくるがそれよりも先に、ダンブルドアは私に杖を向ける。ほわん、と白い光の玉が飛んできた。温かい優しい光を放つそれは私をあやすようにふわふわと飛んだ。

だんだん落ち着いて泣き止み、思わずそれに手を伸ばす。ダンブルドアは微笑み、そしてシリウスに視線を戻した。

「あやつは力を失っただけじゃ。死んではおらん……いつか必ず復活するじやろう。その時のためにもレジーナは必要なのじゃよ」

そう言つてダンブルドアは私を指した。

「あの予言にある半純血の予見者は恐らくこの子じゃ。オリヴィエの予言もある。例えそうでなかつたとしても君が今最優先にするべきはこの子であるはずじゃ」

半純血の予見者？

疑問に思つたが今の私ではその疑問をぶつけることもできずにただ、ダンブルドアが出してくれた光の玉に手を伸ばすだけだ。

シリウスはゆっくりと息を吐き出し、そしてふらふらと私のいるベッドに歩み寄つて、その脇のイスに座り込み彼は絶望的に両手で顔を覆う。その頬には涙が伝つていた。

「シリウス、ここに居てくれるか」

論すようにダンブルドアは静かに聞いた。その声にはもう怒りは感じられなかった。

シリウスはこくりと頷く。ダンブルドアはそれを見届け頷くと踵を返し、壊れたドアに杖を向けた。途端に蝶番の外れたそれはふわりと浮き上がり、元通りにあるべき場所に収まった。

「では、わしはハリーを彼の親戚の家に預けて来よう」

そう言った途端、シリウスは顔を上げた。

「ハリーをあの家には？まさか……私が預かることはできないのですか？」

ダンブルドアは首を横に振る。

「それではリリーの護りが受けられぬのじや。ハリーが成人するまで、彼は年に数日はあの家に戻らねばならん。それに今は……ハリーのためにも魔法に触れぬほうが良いじやろう」

そのまま彼は軽く会釈し、部屋から立ち去った。彼の姿が見えなくなると同時に私の指先からは白い光の玉が小さくなつて消えていく。ダンブルドアの細長い背中を見送り、シリウスはまた溜息混じりに顔を覆った。

「どうして……私ばかり……」

シリウスの声は疲れきり、掠れていた。

もっと私が大きければ、彼の支えになれたかも知れないのに……今の私では泣くことしかできない。

今まで部屋の隅にいたオジーがおどおどと進み出てきた。

「旦那様、少しお休みになられてはどうでしょうか……？」

彼女はシリウスを見上げていた。彼もオジーを見、そして目を瞑って息を吐き出した。少しの沈黙のあと、シリウスは口を開く。

「…わかった。ジーナを頼む」

その声のあと、シリウスは立ち上がり頼りない足取りのまま部屋を後にした。その背中
中はあまりにやつれて見えた。

「お休みなさいませ、旦那様」

オジーはシリウスに深々とお辞儀をし、そしてその背中が見えなくなると私に向き
直った。鳶色の大きな瞳は潤んでいた。

「旦那様はお疲れにございます。奥様に続きご親友様方もお亡くなりになられて……」
オジーはそれ以上を口にするのではなく俯いた。

彼女も辛いのだ。私の知る原作より、シリウスの屋敷妖精に対する姿勢は遥かに優し
い。きっとそれは母のおかげだと思ふけれど、その母を失い、親友を失い、シリウスが
神経を擦り減らし疲れきっているのを見るのは彼女にとっては身を削るように辛いだ
ろう。

「さあお嬢様、お食事にしましょうか」

無理に明るくそう言つて、オジーは目一杯に笑みを浮かべミルクの入った哺乳瓶を差
し出した。

正直、こんな重い話のあとにそんなものは飲みたくなかったが私の身体はもう限界
で、その瓶を掴もうとぶくぶくの真ん丸い手を伸ばした。

オジーに抱き上げられ、ミルクの瓶を持たされれば私はすぐにそれに口を付けた。前世、小学校の授業で粉ミルクを口にした時は不味いと感じたはずだったが今は、とても美味しく感じる。

あの神様の言う通り、まだ魂と身体の結びつきは弱いまま、私の身体は勝手な行動ばかり取る。それこそ赤ちゃんらしい、必要最低限だけな行動だ。泣いて寝て、お腹が空いて起きて食べたら寝て、また泣いて。もう少しどうにかしたかったが、まだどうにもならなかった。

オジーは一心不乱に哺乳瓶にむしゃぶりつく私を優しい目で見ていた。母親のような、優しい目だ。

これから、母のいない私にとって彼女は文字通り乳母になるのだろう。

私がミルクを飲み終わればオジーは瓶を取り上げ、ひっくり返して私の背中をトントンと叩いた。途端に私の口からゲップが飛び出し、オジーは微笑んだ。

いつも通りの一連の動作。彼女はいつも通りに私をベッドに戻した。

空腹を満たされた私の身体は重く腕すら上がらないほどに眠気に支配されていた。瞼も重くだんだんと閉まっていく。

「お休みなさいませ、お嬢様」

オジーの声に後押しされるように、私は自然と眠りに落ちていく。今の私に抗う術な

どない。暖かいベッドの上、せめて誰かの腕の中でありたいと願ったが、その願いは虚しく私はいつも通りの自然な眠りに落ちた。

第2話 出会いの日

あれから10年と11ヶ月。私は闇払いシリウス・ブラツクの一人娘として彼と屋敷妖精2人と、そしてたまに家を訪ねてくるハグリッドやリーマスに見守られながら成長した。

我ながら、私は美人の部類だろうと思う。母によく似たらしい顔立ちと茶髪の混ざったくすんだ金髪に、父譲りの薄い灰色の瞳とスツと通った鼻筋。母の生前の写真を見る限りは容姿に苦勞はなさそうだった。

シリウスもリーマスもハグリッドも、私を見てオリヴィアそっくりだと笑う。嬉しいことではあるけれど、見たことのない母に似ていると言われるのは存外こそばゆいものだ。

さて、閑話休題。もう皆さんもお気づきだろうと思う。魔法界に生まれた私にとって11歳の9月とは、特別な日を示す。

そう、入学だ。待ちに待ったホグワーツ魔法魔術学校への入学。既に学用品は全て揃えたし、杖も買った(ちなみに杖材はサクラとドラゴンの心臓の琴線だ)。あとはホグワーツに向かうだけとなったその日の朝。いつもなら7時には家を出ているはずのシ

リウスがまだ家にいた。

「パパ、仕事は？行かないの？」

「ん？ああ、休んだ」

当たり前だろう、という口調のシリウスは、まあ、言ってしまうえば親バカだ。思わず頭を抱えた。

「もう…そんなだとムーデイさんに迷惑が……」

隻眼のいかついおじさんが脳裏を過り、思わず顔をしかめた。あの人は、怒ると怖い。いつも怒っているような顔をしているけれど、さらに上があるのだ。

「いいんだよ。彼も私が休むことに同意してくれた」

クリーチャー特製のミンスパイを口に放り込みながらシリウスは言う。

「そういう問題じゃ……」

いいんだよ、とシリウスは笑ったが、どうも納得がいかなかった。否、来て欲しくないとというのが本音だろうか。

住み慣れた街、キングズ・クロス駅までは一人で行けるしホームへの入り方も知っている。だからシリウスがわざわざ見送りに来る必要性はないのだ。それに何とと言うか、シリウスがハリーを探しに行くことも目に見えているのだから。もし彼らが出会ってしまったら、きっとシリウスは止められなくなる。

かつての親友に瓜ふたつな少年を前に、彼は果たして後見人としての義務といふべきことを我慢できるだろうか。ダンブルドアからハリーとは一緒に住めないことは聞いている。理由にも納得している。ただし、ダンブルドアの前では、である。

我慢できなくなるんだらうなど、もうどこか他人事に、そう考えながらヨーグルトを口に放り込む。既に諦め半分だ。こういうシリウスはもう、止められないのは火を見るより明らかである。

シリウスは古い柱時計に目をやり、席を立った。

「ジーナ、そろそろ準備した方がいい。オジー、ジーナのトランクを持ってきてくれるか」

彼の皿を下げに来たオジーにそう言い、彼はバスルームの方に向かった。私自身もそれに倣い席を立つ。

もう、すぐそこにまで迫っていた。現在午前9時46分、ホグワーツ特急出発まで1時間14分だ。

「ジーナ、切符は持ったか？」

確認するシリウスの声。しかしマグルと魔法族でござった返しガラガラというカートを押す音や井戸端会議、泣き喚く子どもで騒がしいキングズ・クロス駅内ではほとんど聞こえない。

「持つてるよ!!」

シリウスに聞こえるような声を張り上げる。ふと、目の前の人混みが裂け、9番、10番ホームが見えた。

あれだ。

手前から3本目の柱の前には燃えるような赤毛の家族連れ。その母親らしきふくよかな女性に話しかける、見覚えのあるメガネの少年。ハリーだ。

「ハリー……」

シリウスの低く呟く声が、妙にはつきりと聞こえた。彼のその目には深い悲しみと喜びが混じりあった、不思議な色が浮かんでいる。

「パパ?」

「ああ……すまない。さあ、あの人たちに続こう」

シリウスは私を見て微笑んだ。無理に笑ったように影が差すその顔は、心の中で何かを殺していた。

ああ、私は間違っていたようだ。

シリウスは私の思っていた以上に大人だったのだ。原作で見慣れた、どこか子供のよ
うな彼とは違う。ちゃんと、自制していた。

シリウスに背を押されるまま、私はカートを押して彼らの後ろにつけた。赤い髪が壁
に消えるのを見、そしてシリウスを見上げる。彼は促すようにこくりと頷いた。

ゆっくりと足を踏み出した。隣のシリウスも同じようにゆっくりと歩き出す。ガラ
ガラとカートがうるさく鳴る。カートが壁にぶつかる瞬間、思わず目を閉じた。しかし
衝撃はなく代わりに私は歩き続け、そして冷たい水に浸かったような感覚のあと、9番
と4分の3番線ホームに足を踏み入れた。

少し先には、先程のウィーズリー家とハリー。シリウスはまだハリーを見ていたけれ
ど話しかけることはせず、私の背を押した。

「後ろの方のコンパートメントなら空いてるだろう」

「うん」

悲しげな雰囲気懸命に隠そうとしながら、彼は早足に歩き出した。足の長い彼の早
足について行くには子どもの私でも走らなければならなかったけど、それを
彼に言いはせず、黙って彼の隣を走った。

かなり後ろの車両に来た時、やっと空いているコンパートメントを見つけた。シリウ

スに手伝ってもらいながら荷物を積み込む。

「ねえ、パパ。パパはグリフィンドールだったんでしょ？」

櫛や鏡、羽ペンなどの小物を入れた小さい方のトランクを棚に上げながらシリウスに話しかける。

「ああ、そうだよ。ジーナはどこに入るんだろうなあ。君は母さんに似て賢いからレイブンクローかもな」

「そうかな？ 私はもし選べるならグリフィンドールがいいわ。良い予感がするもの」

予見者としての言葉でもあるし、転生者としての言葉でもあるそれを聞き、シリウスは微笑んだ。

「そうだな。まあ、どこに入ってもきつと後悔はないよ」

彼の言葉に、思わずくすりと笑った。

スリザリンならきつと、彼なら後悔したはずだと想像してしまったのだ。もしスリザリンでスネイプと仲良くしている彼を見てしまったなら私は、恐らく腹を抱えて笑い転げるだろうなと思う。

「ああジーナ、そろそろだな」

シリウスはホームの時計を見、そう言った。時計の針が示す時刻は10時57分。あと3分に迫っていた。彼は列車から飛び降り、私のいるコンパートメントの窓のところ

に来た。

「どの寮になつてもそこが1番だ、ジーナ」

諭すようにシリウスは言う。

「うん。手紙、書くね」

「ああ」

もつといっぱい、何かを言いたかつたはずだけど、いざこうなると言葉は出てこないものだった。

「暴れ柳とビーブスには気を付けろよ」

「うん。パパも、ちゃんと仕事行ってね？それに規則正しい生活も」

「ああ、気を付けるよ」

シリウスがそう言った途端、汽笛の音が鼓膜を震わせた。もう11時になっていた。彼は数歩身を引いた。

「いつてらっしゃい」

ゆつくりと走り出す紅色の汽車と、ずれていく地面。口元に笑みを浮かべ、シリウスは手を振った。私もそれに手を振り返せば、自然と笑みが溢れる

「行つてきますー！」

駅を出て数分、落ち着いてきた車内にはいくつかのコンパートメントから自己紹介の声や談笑する声が漏れている。

対して、私のいるコンパートメントには誰もいない。正確には私と、私のふくろうであるユーラシアワシミミズクの雌のコレット以外には、他の誰もいない。というかコレットすら寝ているため実質一人だ。

「ねーコレット…私友達でできなかったらどうしよう…」

言葉の通じるはずのない眠ったままの彼女に話しかける。正直とっても虚しい。うん。

とか思っていると突然コンパートメントのドアがノックされ引かれた。

「ねえ、ここ、座つてもいい？他に座れそうなところがなくて」

申し訳なさそうなメガネの少年と、その背後には燃えるような赤毛で鼻の横に泥汚れを付けたままの少年。

ハリーとロンだ。

「ええ、どうぞ。私はレジーナ・ブラック。ジーナって呼んで。よろしくね。あなたたちは？」

にっこりと微笑んで、彼らに右手を差し出せば、ハリーも同じように右手を差し出し握手を交わす。

「僕ハリー。ハリー・ポッター。よろしくね」

第3話 ペティグリユー

「僕ハリー、ハリー・ポッター。よろしくね」

ハリーと握手を交わし、次はロンに向き直る。

「僕はロン・ウィーズリー。よろしく」

彼とも同じように握手を交わした。それから、もつと突っ込んだ自己紹介をして、お互いのペットの話題へと移った。

「ロン、あなたのネズミ…結構高齢ね。今どれくらいなの？」

スキヤバーズ…もとい、ペティグリユーである。ロンの膝の上で寝てしまった彼を睨みつけてしまわないように、私は必死だ。

「11か12歳くらいかなあ？」

「え？」

わざとそれに驚いて見せる。ハリーが食いついた。

「どうしたの？」

「あ…いえ…ネズミの平均寿命って大体2年くらいなの。命の水でも与えない限り、

どんなに頑張っても4歳以上は生きないのよ。……ねえロン、ちよつとその子、触つてもいい？」

ロンは不安そうな面持ちのまま頷いた。それを確認し、私は彼に手を伸ばす。ペティグリューは気付かない。そのまま、彼の尻尾に触れた。

そつと目を閉じ、彼の未来の糸を探る。

すぐに見つけた。瞼の裏に映し出される、ヴォルデモートと謙り跪く人間の彼。目を開けた。

「やっぱり……」

彼は今ここで取り除くべきだろうか。だがこのままここで監視するという手もある。どちらにしろ、シリウスに引き渡すことはしない。折角罪人ではない状態でここまで来たのに、水の泡はごめんだ。

「どうしたの？何かしたの？」

魔法のことを何も知らないハリーが私を覗き込むが、ロンがそれを否定する。

「何もしてないだろう？第一杖も出してないのに……」

「でも僕は杖がなくても魔法を使えたよ？」

「それはまだ僕たちが子どもだから魔法の制御ができないだけだよ」

ロンが正論を言い、ハリーはそうか、と黙りこんだ。

「そうね、ある意味私のはそういう魔法ではないわね。杖を使わないもの
そう言いつつ、扉に杖を向けた。

「コロポータス、マフリアート」

「…何をしたの？」

ハリーは怪訝そうに私と扉を交互に見るが、どちらにも見た目には変化はない。当たり前前だ。私が使ったのは閉鎖呪文と耳塞ぎだ。

「邪魔が入らないように閉鎖呪文と、外に声が漏れないように耳塞ぎよ」

「へえ…魔法って本当に何でもできるんだね」

感心するハリーとは対照的にロンは不機嫌そうにしていた。

「ねえ、ところで君は僕のスキヤバーズに何をしたんだい？」

完全に不審者を見る目だ。心に痛いのは何故なんだ…。

「予見よ」

「予見って何？」

とりあえずハリーに予見者と予言の話をして聞かせ、理解を確認した。本当に何も知らないことに驚かされたが、まあ理解してくれたので良しとしよう。

「要するに君は未来が見えるんだね。で、何を見たの？」

ヴォルデモートの復活——とか言えるわけないよね…。とりあえず嘘をつくことに

した。

「彼が人間に戻るところよ」

「人間!？」

「スキヤバースが? そんな!」

ハリー、ロンの順番だ。ロンは信じられないと膝の彼を持ち上げた。ペティグリューはそれで起きてしまったらしい。鼻を上げくんと匂いを嗅いだ。

「あら起きちゃったわね。…マフリアート」

再び彼にだけ耳塞ぎをして、また話を続ける。

「……ロン、ハリー、あなたたちに言うのは、酷かもしれないわ。それでも、聞く?」

少し脅しをきかせたが、たぶん間違いはないだろう。何故ならこのネズミ…もとい、ペティグリューはハリーの両親の信頼を裏切りヴォルデモートが彼らを殺す手助けをしたのだ。いくら自分の命がかかっていようと、していいことと悪いことがある。

ハリーはすぐさま頷いた。ロンを見れば、彼もゆっくりと頷いた。

「…じゃあ、話すわ。スキヤバースは本当はペティグリューという魔法使いよ」

「ちよつと待って、ペティグリューって、あの?」

ロンが口を挟んだ。

「あのつてどの?」

「君、知らないの？ペティグリュウって君の両親の親友で、あの日君の両親と一緒に例のあの人に立ち向かって殺されたんだ。でも死体は残っていない。残ってたのは……」

途切れたロンの言葉は私が引き継いだ。

「焼け焦げた服の切れ端と手の薬指だけ。けど立ち向かったただなんて大嘘よ。ペティグリュウはあいつにハリーとハリーのご両親の居場所を教えたあと、すぐに行方をくらませた。それらと、巨大なクレーターをその家に残してね。粗方、そのあとで彼は魔法族であるあなたの家に潜り込みペットになったんでしょね」

「そんな……」

信じられないとロンは頭を振るが、これは事実だ。あの10月の夜のシリウスとダンブルドアとの会話とそれから私が1歳になるまでに枕元で交わされた会話や、それ以外のハリー関連の本や情報誌などからの情報を繋ぎ合わせた覆しようのない事実。

「こいつが……？」

ハリーは今や完全にペティグリュウを睨みつけていた。もし彼が3年生や4年生であつたなら即座に杖を向けていただろうが、今のハリーはマグル界抜けたての1年生。杖のことなど頭の片隅にもないようだった。

「ええ。でもハリー、復讐しようだなんて馬鹿なことはいしちやダメよ。今は……そうね、指を仰ぎましょう」

「誰の？」

2人は同時に疑問をぶつけてきたが、そんなのは簡単だ。前回ヴォルデモートと戦い、今向かっているホグワーツと関わりがあり尚且つより正しい判断が出来、この判断を仰ぐに相応しい人。

「ダンブルドア先生よ。彼ならきつと私たちより正しい判断ができるもの」

小さい方のトランクを開け、羽ペンとインク、羊皮紙を取り出し彼に短い手紙を書いた。

『はじめまして、突然で申し訳ありませんが大切なお話があります。ピーター・ペティグリュウについてです。1年生歓迎会のあとお時間よろしいでしょうか』

たったそれだけの文章に書名し、寝ているコレットの籠を開けた。

「ほらコレット起きて、お仕事よ。ホグワーツのダンブルドア校長先生に、お願いね」

鋭い橙色の目を瞬き彼女は束の間ほんやりしたあと、籠から出てきて私の持つ羊皮紙を嘴に咥えた。

彼女が飛び立てるよう、窓を開ける。途端に冷たい風が吹き込んでくるが彼女はそれをものともせず、窓から飛び出していった。

窓を閉め、席に戻ってひと息ついたとき、ハリーが我慢できなくなったように口を開いた。

「…なんて、書いたの？」

「ああ、あとでお話がありますって。詳しいことは書かなかったわ。コレットに何かあったとき、誰かに読まれたりしたら大変なことなるもの」

「どうして？」

「わからない？ ハリーと同じように英雄視されていた彼が実は殺人に加担していて、さらにそいつがホグワーツの生徒のペットだったなんて、予言者新聞の一面ものだわ。――

――誰も信じないでしょうけど、それでも今は表沙汰にするべきではないことよ」

トランクの中身を片し荷物棚に上げながらそう言った。ハリーは眉間にシワを寄せた。

「でも僕…僕、そいつは許せないよ」

「ええ、知ってるわ。けどね、ハリー。今私たちが独断で彼に手を出すわけにはいかないわ」

口を開きかけたハリーよりも先にロンが尋ねる。

「どうして？ ペティグリューはハリーの両親の仇だろう？」

ハリーとロンの向かい側に座り、私は首を横に振った。

「私たちだけでは彼を逃してしまう確率のほうが高いのよ。今はこんな姿と言えど、彼らはホグワーツを卒業した大人よ。まだ入学すらしていない私たちから杖を奪うことな

んで簡単にできるだろうし、そもそも、私たちがどうこうできる問題ではないのよ」

あ、そっか、と納得するハリーと、まだ腑に落ちない様子のロン。改めてロンに向き直る。

「それで…ロン、貴方にお願いがあるの」

この話の流れで良い話題になるわけもなく、ロンは肩に力が入ったまま私を見た。

「何？」

「ダンブルドア先生からの指示があるまでこのペティグリューを今まで通り、スキヤパーズとして可愛がっていてくれないかしら」

「え!？」

そんな、無理だよ、と首を振る。

当たり前だろう。ホグワーツでの友だち第一号であるハリーの両親の仇を知りながら可愛がることなど、普通のことではない。

「お願いよ、彼を逃さないためにも貴方の協力は必要なの」

そう押せば、しばらく彼の視点は定まらなかつたが、少しの沈黙のあと彼は決心したように頷いた。

「…わかつたよ。今まで通り、だよね」

「ええ。ありがとう、ロン」

そのあとドアに掛けた閉鎖呪文と耳塞ぎを解除し、ついでにペティグリユアの耳塞ぎも解除した直後、原作より少し早くネビルがコンパートメントの扉をノックした。

「どうやらウィーズリーの双子イベントはどこかで消えたようだ。」

「ごめんね。誰か僕のヒキガエルを見なかった？」

第4話 ホグワーツ魔法魔術学校

「ごめんね。僕のヒキガエルを見なかった?」

ネビルは泣きべそそのままそう尋ねたが、誰も首を縦に振る者はいなかった。

……というか、ネビル来るの早くない? 原作とはコンパートメントが違ったのかな。彼は私たちが首を横に振るのを見てめそめそと泣き出した。

「いなくなっちゃった。僕から逃げてばかりなんだ!」

その様子になんだかにいたたまれなくなり、思わず席を立った。ネビルは私より背が低いので少し見下ろす形になる。

「そうなの。貴方、名前は?」

「僕、ネビル・ロングボトム」

「ごしごしと彼は目をこすり、私を見上げた。

「私はレジーナ・ブラックよ。よろしくね、ネビル。貴方のヒキガエルの名前はなんて言うの? もしかしたら見つかるかも知れないわ」

そう言えば、ネビルは目を輝かせる。

「ほんと?」

「ええ。もちろんよ」

「トレバーだよ、僕のヒキガエルの名前」

トレバー。まあ知ってたけどね。でも一応、情報源は確保しとかないと怪しまれる。杖を挿せるようにカスタマイズした服の袖から仄かにピンクがかった杖を取り出した。

「アクシオ、トレバー」

ふい、と杖を振れば、コンパートメント内の6つの目はその動きを追うけれど、何かが起こることもなくしん、と静まり返った。

「……ねえジーナ、何をしたんだい？」

ロンが待ちきれなくなつて口を開いた。

「まあもう少し待つてみて、ロン」

そう言った瞬間、何か黒い物体が列車の前の方から飛んできた。それはコンパートメントの入り口を塞いでいたネビルの頭上を掠め、私の手の中に収まった。大きなヒキガエルだ。

「トレバー!!」

ネビルは嬉しそうに私の手に飛びつきトレバーを引き取った。

「すごいね、君！どうやったの？」

「呼び寄せ呪文よ。でも少し難しいから、あまり安易にはやらない方がいいかもね」

特にネビルは。私が必要を習得しようとしてオジーと共に練習していたとき、力加減を間違えて分厚い本が頭目掛けて凄いスピードで飛んできたことがあった。

本当に命の危険を感じたのはそれが初めてだった。ヴォルデモート云々の前に自分の呪文で事故死するところだったのだ。

ネビルは私の言葉を聞いてしゅんと項垂れた。

「僕、凄くド——」

「ねえ、今の魔法、誰が使ったの？」

ネビルが何かを言おうとした瞬間、栗色の髪がふさふさした少女がネビルの後ろからコンパートメントに入ってきた。彼女は既に新調のローブに着替えていた。少し威張ったような話し方だ。

「私よ」

そう進み出た途端、彼女は私の手を取ってぶんぶん振った。

「すごいわ！呼び寄せ呪文なんて高学年まで習わないのに!! 貴女名前はなんて言うの？」

「レジーナ・ブラックよ。貴女は？」

「私はハーマイオニー・グレンジャー。貴女とは仲良くなれそうだわ！よろしくね！」

ハーマイオニーがニコツと笑えば少し大きめの前歯が見えた。
「よろしく」

微笑んだが、正直、今の彼女はあまり好かないと思う。早くハリーたちと仲良くなつて丸くなればいいのにと余計な事を考えていると彼女はパツと私の手を離れた。

「私、そろそろ行くわね。ああ、そうだわ。レジーナ、早めに着替えておいた方がいいわ。5時過ぎには着くはずだから」

そう言つて彼女はハリーにもロンにも、ネビルにも触れることなく嵐のように去つて行つた。

振り返れば、皆啞然としていた。

「……嵐みたいな人だったね」

ハリーがそう称した。ロンも頷く。

「僕らには触れもしなかったぜ。僕、どの寮でもいいけどあの子がいなくていいな」
ハリーも頷く。ネビルはどうすればいいのかわからないまま挙動不審に陥っていた。

「ぼ、僕……そろそろ行くね、トレバーをちゃんとケージに入れないと……」

「そうね。じゃあネビル、あとでね」

おどおどとコンパートメントから出ていく彼を見送つてから私はそのまま2人に向き直つた。

「さあ、お2人も退室をお願いできるかしら？」

「え？どうしてさ」

ロンが聞くが、愚問だ。

「さつき、彼女の話聞いていなかったの？私も早めに着替えておくべきだと思うわ」
オーケー、と2人は肩を竦めてコンパートメントから出て行った。

扉が閉まるのを確認し鍵を掛け、カーテンを引いてから私は荷物棚から大きい方のトランクを引き出し、真つ黒のローブと指定の制服を取り出した。まだ寮のカラーには染まっていない。シリウス曰く、寮が決まるとその寮に合わせたカラーになるらしい。初めて聞いたことなのでびびくりしたのを覚えている。

さつきとマグルの服を脱ぎ去り新品のシャツの袖に腕を通せば、パリパリとした糊の臭いが鼻腔を満たす。

ふと、コンパートメントの外が少し騒がしくなっていることに気が付いた。

「——間違ったのとは付き合わないことだね。そのへんは僕が教えてあげよう」

ああ、ドラコ・マルフォイだ。

ハリーとロンが彼らに突つかからないうちにどうにかしないと。何もないだろうけど流石に入学前に同級生といざこざはマズい。

さつきと服を整えてトランクを片してからコンパートメントの扉を開けた。

「間違ったのかどうかは——ああ、ジーナ」

丁度ハリーが反論するところだったらしく、その場にいた全員の視線がハリーから私に移った。

「あら、お話の最中だったかしら」

ハリーとロン、そしてマルフォイとその後ろに立つガッチリとしたアホ面の2人を見比べるように交互に見た。

「ジーナだつて？それにその瞳——もしかして君、僕の親戚のレジナ・ブラックかい？」

ドラコの声にハリーとロンが目を見開いた。

「君が、親戚？こいつと？」

「ええ。でも…そうね、私はこんな風に友だちを家柄だけで判断するような人と関わりがあることがこの上なく恥ずかしいわね」

ハリーの質問に少し意地悪めにそう答えれば、ドラコの青白い顔に薄っすらと赤みが差した。どうやら怒らせたようだ。

「ポッター、ブラック。僕ならもう少し気をつけるがね」

噛み付くようにドラコは言うがどうも覇気がない。全くと言っていいほど怖くなくなった。

「あら、脅しのもりかしら。だったら私も言うことがあるわね。貴方のお名前…特にファミリーネームはどこかで聞き覚えがあるのよね。そうそう、例えば…闇の帝王の配下で働きながら、その敗北後には自身に服従の呪文が掛けられていたと言つて無実を主張したルシウス・マルフォイ氏とか？」

捲し立て、彼の顔色を伺えば彼は更に頬を紅潮させ、2人の腰巾着を引き連れて何か捨て台詞を吐きながら前のコンパートメントの方へと足早に去つて行つた。

「おつどろいたなあ…君、ほんとに彼の親戚なの？」

彼らが見えなくなつたあと、ロンが口を開いた。

「ええ。でも私の父が彼の母と従兄弟だけよ。全く…私は純血主義は嫌いだわ。純血でも貴方の家のように立派なところもあるのに、不思議なものよね」

そう言えばロンは頬を赤く染めた。その燃えるような赤毛に負けないほどだ。それがなんだか可笑しくて、思わず微笑んだ。

「ふふっ…顔が真っ赤よ、ロン」

「そ、そんなことないよ！」

「ほんとだよ、ロン。真っ赤だ」

その後ハリーとロンによる、真っ赤だよ、真っ赤じゃない、の押し問答が続いた。そのせいかな否か、3つほど向こうのコンパートメントからハーマイオニーが歩いてくるの

が見えた。

「貴方たち！もう少し静かにできないの？あんまり子どもっぽい振る舞いはよくないわよ」

彼女のあまりに小バカにしたような声音に、2人はムツとしたように眉間にシワを寄せた。

思わず彼らとハーマイオニーの間に割って入った。

「ああ、ハーマイオニー、良いのよ。私がけしかけちやつて。うるさくしてごめんなさいね。もうしないから、貴女はコンパートメントに戻っても大丈夫よ。気を付けるわ」
「そう？…わかったわ。じゃあ、また後でね」

くるりと踵を返し自分のコンパートメントに戻る彼女のふさふさの後ろ髪に、べつと舌を突き出す約2名……。仲良くなれるのか不安だ。

「監督生氣取りなのか？」

彼女の髪が完全に見えなくなったとき、ロンが言った。

端から見ればそうなんだけどね。でも彼女も彼女で、折角来れた魔法界の象徴とも言えるホグワーツから追い出されないように必死なわけだし。

でもまだ彼女と知りあつて間もない私がそんなことを言えるわけもなく、苦笑いで2人の愚痴を聞き流した。ちなみにまだコンパートメントの外の廊下だ。そろそろ着替

えて欲しいんだけど。

「——で、見たか？あの歯」

ついに愚痴が彼女の容姿にまで及び、もう悪口となったので口を挟むことにした。

「ロン、ハリー。言い過ぎよ」

「あ……ごめん」

「ごめん……」

2人は揃って縮こまった。

「謝るなら彼女に謝りなさい。それに……今のは聞かなかったことにしてあげるわ。だからこれからは悪口は慎んでね。2人とも、さっきのドラコ・マルフォイと同類は嫌でしょう？」

また2人は揃って頷く。流石に意気投合し過ぎやしてないか。

「じゃあ、それでよろしくね。さ、2人ともローブに着替えた方がいいわ」

そう言いつつ2人の背中を押してコンパートメントに突っ込んだ。問答無用だ。だつてさっさと座りたいし。

ガチャガチャとトランクを下ろしたり、さっきのことについて律儀に反省する2人の声を聞きながら私は壁にもたれて窓の外を眺めた。いつの間にかロンドンの街から離れたらしく牛や羊のいる牧場のそばを走っていた。一瞬だが草を食む子羊が見え、思わ

ず微笑んだ。

昔シリウスに近くの牧場に連れて行ってもらったことがあった。もしかしたらさっきのがあの牧場だったのかも知れない——と他愛もないことを考えるうち、コンパートメントの扉が開いた。

「ジーナ、終わったから入っておいでよ」

真つ黒なローブに見を包んだハリード。似合ってはいるが……さっきのよれよれの服ではないせいで余計にセロハンテープだらけのメガネが目立った。

「ありがとう、ハリード。とっても似合ってるわ。でもそのメガネじゃ格好がつかないわね——」

袖から杖を取り出し、彼の顔に向ける。

「レパロ。これで完璧ね」

途端に彼のメガネからセロハンテープが剥がれどこかへと消え、代わりに新品同様のそれが彼の鼻に乗っかっていた。

彼はすぐにメガネを外しブリッジが直っていることを触って確かめる。

「わお……すごいね、君。ありがとう」

「どういたしまして。これは簡単な魔法だから貴方もすぐ扱えるようになるわ」

そんな会話を交わしながらコンパートメントに入り、さっきと同じように座った。当

然のように、ロンが視界に入る。

「ロンも素敵ね、よく似合ってるわ。でも…貴方も少し綺麗にすべきね」

そうしてまたロンに杖を向け——けことはなく、ポケットからハンカチを取り出し、そちらに杖を向けた。

「アクアメンデー」

少量の水がその杖先から滴り、ハンカチを濡らした。この呪文は水量を操作するのが意外と難しいのだが、今回は上手くいったようだ。

「何してるの?」

ロンが口を開くが気にせず、彼にハンカチを押し付けた。

「汚れが付いてるわ。魔法で拭ってもよかつたんだけど、昔その呪文を試した時に力加減を間違えちゃって。床を全部剥いじやったのよね」

自分の鼻の横を指差しながら微笑んだが、ロンとハリーは固まってしまった。床を剥いだエピソードは蛇足だったらしい。

そんなときガチャガチャと大きな音がして扉の方を見れば、ふわふわの白髪のお婆さんが車内販売のカートを押していた。頬のえくぼが素敵だ。

「車内販売よ。何かいいませんか?」

ハリーがぱつと勢い良く立ち上がるのに対し、ロンは耳を赤らめて、サンドイッチを

持つてきたから、と縮こまった。

私もロンには申し訳なく思いながらもお腹がペコペコだったので立ち上がりお菓子をかうため廊下へ出た。

私は蛙チョコを3つと大鍋ケーキを1つだけ買った。

かぼちやジュースを買わずに戻つてきた私を見てロンは驚いたようだ。

「ジュースは買わないの？大鍋ケーキつて喉が乾くだろう？」

「そうね、でも私はかぼちやは苦手なのよ。だから自分でちやんとお茶を持つて来たの」
そう言つてトランクの横ポケットから小さなマグル製の水筒を取り出した。もちろん、検知不可能拡大呪文で少し内容を増やしている。

車内販売ではかぼちやジュースしかないことくらい、シリウスから情報入手済みだったのでこれくらいの準備は万端だ。

「そうなんだ、意外だね」

そう言いつつ帰つてきたハリーの腕にはお菓子の山。買い損ねたくなかつたんだろう。全部数個ずつ買ったらしい。

ハリーがその大きな買い物をロンと自分の間にドサリと置くのを、ロンは目を皿のようにして眺めていた。

「お腹空いてるの？」

「ペコペコだよ」

ハリーはかぼちゃパイに齧り付きながら答えた。

「それにしても、たくさん買ったわね。食べきれるの?」

「たぶん、無理だね。ねえロン、僕のと換えようよ」

ハリーは如何にも嫌そうにコンビーフのサンドイッチを見ていたロンに、まだ手を付けていないかぼちゃパイを差し出した。

「でも、これ、パサパサで美味しくないよ」

ロンは慌てて付け足した。

「ママは時間がないんだ。5人も子どもがいるから……」

「いいから、パイ食べてよ」

またロンは耳を赤らめながらハリーに礼を言い、パイに手を伸ばした。ハリーも嬉しそうにまたかぼちゃパイに齧り付いた。

とりあえず置きっぱなしだったサンドイッチには消失呪文を掛けておいた。たぶんあのままにしておいても誰も食べないだろうし。

しばらく談笑しながらパイを食べ、ハリーの大盤振る舞いのお菓子を少しもらいながら過ごした(ドルーブルの風船ガムは食べないようになちゃんと忠告した)。

蛙チヨコが何匹か開いている窓から自由の逃避行をってしまったがそれはそれで面

白く、3人の笑いを誘うには十分過ぎることだった（ちなみにロンが持っていないというカードを2つとも、私が引き当ててしまったので彼に贈呈した）。

百味ビーンズは———どうやらハリーは運が悪かつたらしい。食べ始めて5つめくらいでゲロ味に当たってしまった。案の定ハリーは吐瀉りそうになり、窓を開けての大騒ぎになった。

私は私で、隣からのクレームの怒鳴りこみも百味ビーンズだと言えば納得してもらえたので、これは案外すごいお菓子かも知れないと他人事だった。

窓の外はもう夕日に赤く染まり始め、畑や牧場はなくなつて荒涼とした風景が広がっていた。曲がりくねつた川や森、鬱蒼とした暗緑色の丘が通り過ぎていく。

「わあ、ダンブルドアだ。これで2枚目だよ」

ハリーの嬉しそうな声にロンが答える。

「ハリー、そう言つてられるのも今だけだよ。ダンブルドアつて凄く当たる確率が高いんだ。そのうちうんざりしちゃうから」

まあ、そうだろうなと心の中でロンに加勢する。私も彼のカードは10枚は持っているのだ。確率が高いとかそんなレベルじゃないほどに連続で当たつたこともあるのだから、ハリーもそのうちそうなるんだろうと苦笑した。

「ねえジーナ、君も蛙チョコ、食べる？」

残っていた最後の3つを平等に分けたいらしくハリーは私にその箱を差し出した。

「あら、いいの？ありがとう」

それを受け取り、早速パツケージを開け、まずはカードを確認した。パラセルサスだ。すでに7枚も持っている。

「ハリー、貴方まだパラセルサスは持ってないわよね？」

そう言つて五角形のカードを差し出せば、彼は嬉しそうに笑つた。

「うん、持つてないよ。くれるの？」

「ええ、私もう7枚も持つてるもの」

彼にパラセルサスを手渡し、残つたゴミを消失させた。

それからまたしばらく談笑が続く。ロンの兄であるフレッドとジョージの逸話であつたり、ハリーの義兄弟であるダドリーのことであつたり、私はシリウスとの生活の中のちよつとしたイタズラや学校でのハプニングを話して聞かせた。

しばらくして、ロンが窓の外に何かを見つけた。

「ねえ、あれ、君のふくろう？」

そう言われて窓の外を見ればそこには茶色のふくろうが並走していた。

「ほんとだわ。コレット！」

窓を開け、彼女を招き入れる。その嘴にはダンブルドアからの返事と思しき紙が啜え

られていた。

「ありがとうね」

コレットから手紙を受け取り、水とふくろうフーズを与え、ケージに入ってもらつてからそれを開いた。

そこには細長い流れるようなエメラルド色の文字で『OKじゃよ』とだけ書かれていた。

「なんだか…僕の思つてたような人じゃなさそうだね」

返事の紙を見て、ハリーが言った。

「全くその通りね。おかしな人よ、あの人は」

ハリーとロンに、シリウスから聞いたダンブルドアについてのおかしな逸話をいくつか聞かせれば、どつと笑い声が湧いた。

気が付けば窓の外は暗くなり、深い紫の空に浮かび上がるような闇色の山や森が見えた。汽車は確かに徐々に速度を落としている。

「ああ、もう到着みたいね」

そう言うが早い、車内にアナウンスが響き渡った。

「あと5分でホグワーツに到着します。荷物は別に学校に届けますので、車内に置いて

行ってください」

ハリーもロンも、緊張しているのか顔が真っ青だった。

「大丈夫？ 真っ青だけど……？」

「だ、大丈夫だよ。ちよつと緊張してるだけ……」

ちよつとにしては青すぎる気がしたが、本人がそういうのだからそうなのだろうと、2人を連れてごつた返す廊下の黒い集団に加わった。

気が付けばどうしてか私たち3人は1年生と思われる群衆の一番前の列に押し出されていた。暗い小さなプラットホーム。夜の冷たい空気に思わず身震いし、黒いロープを手で手繰る。

やがて重い足音が聞こえ、生徒たちの頭上にゆらゆらとランプが揺れながら近付いてくる。

「ハグリッド！ 久しぶりね、元気にしてた？」

久しぶりの彼の腹に抱きついた。最近ハリーのことには掛かりきりで家に来る頻度が減っていたのだ。

何故か周りの生徒たちは猛獣使いでも見るような目で私を見た。

「ジーナか！ 元気だったぞ！ また今度、俺の小屋に來いや、お前さんならいつでも歓迎するぞ——イツチ年生！ イツチ年生はこつち！ おおハリー、お前さんもここにおつたか。

元氣か？」

ハグリッドの声にハリーも笑みを溢す。

「元氣だよ、ありがとう」

たぶん、彼のありがとうは色んなありがとうなんだろうな—とか、余計なことを考えてみる。

「さあ、ついてこいよ——あとイツチ年生はいねえか？ 足元に気い付けろ。いいか！ イツチ年生、ついて来い！」

ハグリッド先導の元、滑ったり躓いたりしながら、険しくて細い小道をみんなで彼の背を指して下っていった。生い茂った木々のせいで月明かりさえ遮断され、右も左も真つ暗だ。黙々と歩き続け、ついにハグリッドが振り返る。

「もうすぐホグワーツが見えるぞ！この角を曲がったらだ！」

すぐに歓声があがる。狭い道が急に開け、大きな鏡のような黒い湖の畔に出た。向う岸には聞いた通りの山と城。

すっかり群青色に染まった空と大きな瑠璃色の月が、黒く塗りつぶしたようなその城のシルエットを浮かび上がらせていた。

城にはいくつかの白い灯りが灯っていた。

第5話 組み分け 前編

壮大な城。しかし圧巻のそれに目を奪われる生徒たちは気付いていない。彼らが歓声を上げた瞬間、その声に疎み上がって湖の中へと消えた巨大なイカの足。きつと黒い湖に住み着いている大イカだろうが、かなり不気味だった。

ハグリッドは感動もそこそこに、1年生たちを誘導していった。

「4人ずつボートに乗れ！」

ハグリッドが指したのは、丁度子どもなら4人ほど乗れるであろう小さな船。まず私にそれに足をかけ、次にハリーとロンが続いた。

あと1人。そう思ったときに乗ってきたのは、ハリーとロンが期待していたネビルではなく、ふさふさの髪をさらにふわふわさせたハーマイオニーだった。

明らかに眉をひそめる2人。

「みんな乗ったか？」

2人に注意しようとした途端にハグリッドが大声を上げたのでそちらを見れば、彼は小舟に1人で乗っていた。それでも小さな船は沈みかけだ。

「よーし、進めえ！」

ハグリッドの声と共に生徒を乗せた船団は湖面を滑るように動き出した。

誰も一言も言葉を発することなく、そびえる巨大なホグワーツ城を見上げていた。城に近づくにつれ、そのあまりの大きさに、まるで城がこちらにのしかかってくるように見える。

「頭を下げるー！」

ハグリッドに続いていた先頭の私達が乗るボートが城の真下に到着したとき、ハグリッドが声を上げた。ボートは減速する素振りも見せず、蔦のカーテンへと突っ込んでいく。

それを潜り（ネビルはそれに思いつきり顔をぶつけていた）、その後ろに空いた城の入り口へと進み、暗いトンネルを抜ける。

遙か後方で男の子の悲鳴が上がったが、ハグリッドは気付く様子もなく鼻歌まじりに前を見つめていた。

しばらくトンネルは続き、生徒たちがそろそろ不安になってきた頃、ボートは船着場に到着し、またも滑らかに着岸した。

ハグリッドの手を借りながら、全員が岩の上に降り立った。

生徒全員が到着したのを確認してからハグリッドはまた私たちに背を向け、ゴツゴツした岩の道を登る。進むに連れ、次第に足元は滑りやすい湿気た岩から、露に湿った滑

らかな芝へと変わっていく。ちらりと横を見ると遠くに不気味にそり立つゴツゴツとした木が見えた。暴れ柳だ。

歩きやすい綺麗な石段を登り、ハグリッドは巨大な木の扉の前に立ち止まった。ぞろぞろと長く尾を引いていた生徒が小さく集まるのを確かめ、ハグリッドはその大きな拳を握り、城の扉を3回ノックした。

ふと思いい出して、ハリーとロンの顔色を伺えばハリーは興奮に目をキラキラさせ、その扉を見上げていた。本番には強いタイプのような。対してロンの方はまだ青ざめ、絶望的に扉を見上げている。対照的過ぎて笑ってしまいそうだ。

ガゴン、と重い音がして私は扉の方に視線を戻せば、エメラルド色のローブに身を包んだマクゴナガルがハグリッドを見上げていた。見上げてはいるが、どこかハグリッドよりも大きく見えるような、厳格な雰囲気だ。

「マクゴナガル教授、イッチ年生を連れて来ました」

「ご苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

彼女はそう言い、私たちを招き入れるように優雅に手を動かし城の中へといざなつた。

広い玄関ホールは松明の炎に照らされ、天井はどこまでも高い。ハリーもロンもネビルも、皆上を見上げていた。

目の前には壮大な大理石の階段が上の階へと続いている。

マクゴナガルに導かれ、生徒たちは石畳のホールを横切った。玄関の右手側から何百人という単位のざわめきが聞こえた。たぶん、あそこが大広間だ。

しかし彼女は私たちをそちらに案内することはなくホールの脇の小さな空き部屋に案内した。小さな、と言つてもつゝ一年生50人程度がギリギリとは言え収容できているようなのでそこまで小さくはないはずだ。

生徒たちは突然こんな部屋に押し込まれ、不安そうにキョロキョロと辺りを見回していた。

「ホグワーツ入学おめでとうございます」

マクゴナガルが胸を張り、威厳たっぷりに挨拶をした。

「新入生歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席に着く前に、みなさんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組み分けはとても大切な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生がみなさんの家族のようなものです。教室でも寮生と一緒に勉強し、寝るのも寮、自由時間は寮の談話室で過ごすことになりました」

彼女はそこで一旦言葉を切り、生徒たちを見回した。誰もが彼女の話の話を傾け、一言も聞き漏らすまいとしていた。

その様子に彼女も満足気に微笑み、続けた。

「寮は4つあります。グリフィンホール、ハツフルパフ、レイブンクロー、スリザリんです。それぞれの寮には輝かしい歴史があり、偉大な魔女や魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、みなさんの良い行いは自分の属する寮の得点になりますし、反対に規則に違反した場合は寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮に大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るにしても、みなさん一人ひとりが寮にとって誇りとなるよう望みます」

挨拶が終わったあとも、静けさは続き、まるで沈黙呪文でもかけられたかのように誰も口を開かなかつた。

マクゴナガルは一瞬、ネビルの上着の結び目が左耳の下の方にズレているのに目をやった。

「まもなく全校列席の前で組み分けの儀式が始まります。待っている間、できるだけ身なりを整えておきなさい」

思わずネビルに、あなたのことよ、と囁いた。

彼はぼつと耳元を赤らめ、ぼそぼそと礼を言いながら結び目を直した。

「では、学校側の準備ができ次第戻って来ますから、静かに待っていてください」

彼女は私と目が合うとにつこりと微笑み、そしてくるりと踵を返して部屋を出て行った。どつとみんなの緊張感が溶けるのを感じた。

「一体どうやって寮を決めるんだろう」

ハリーが尋ねた。

「試験みたいなものじゃないかな……すごく痛いってフレッドが言ってたけど、きつと冗談だよ」

そう答えるロンの声音には、そうであってほしいという希望の色も滲んでいた。ハリーが不安そうに俯いた。

「大丈夫よ、試験ではないわ」

そう言うハリーだけでなく、周りの数人も「ほんと？」と救われたような顔をした。「ええ。私も詳しいことは知らないけど、生徒自身の性格や杖から、それぞれの寮の特性に合ったところに組み分けされるんだと思うわ。いきなり魔法のテストなんて、ひどすぎるもの」

「あ、そっか。そうだよね」

ハリーが納得したように息を吐いた瞬間、また後方から悲鳴が上がった。今度は男子だけじゃない。複数の声だ。

思わず杖に手を伸ばした。いつでも反応できるように構えながら後ろを振り向くが、そこにいたのは真珠のように白く半透明なゴーストたちだった。何やら話し込んでいるらしく、1年生には目もくれず、スルスルと部屋の天井近くを横切っていた。

「もう許して忘れなされ。彼にもう一度だけチャンスを与えましょうぞ」

ピーブズのことだ。

太った修道士の意見に首を横に振るのは——えーっと……名前が出てこない。誰だっけ。

優しげなゴーストだった。ひだのある襟の服を着て、タイツを履いていた。

「修道士さん、ピーブズには、彼にとつて十分過ぎるくらいのチャンスを与えたではありませんか。我々の面汚しですぞ。しかもご存知のようにやつは、本当のゴーストじゃない——おや、君たち、ここで何をしているんです？」

タイツのゴーストは急に1年生に気が付いて声をかけたが、怖気付いて誰も答えなかつたので私が進んで答える。

「私たち1年生で、組み分けの儀式を待っているところなんです」

修道士は微笑んだ。優しげな人（ゴースト）だ。

「ほう！なら、ハツフルパフで会えるとよいな。わしはその卒業生じゃからの」

「さあ、行きますよ」

鋭い声が飛んだ。いつの間にかマクゴナガルがドアのところ立っていた。

「組み分けの儀式が始まります」

彼女の声に、ゴーストたちは一礼し、1人ずつスルスルと壁を抜けて部屋から出て

行つた。

「さ、一列になつて。ついてきてください」

マクゴナガルに言われた通り、1年生の集団は列になり始めるが、案の定私が一番前に押し出された。その後ろにハリー、ロン、ネビル、ハーマイオニーと続く。

マクゴナガルの背中にくつついたまま、生徒たちは蟻のようにぞろぞろとまた玄関ホールへと戻り、そこから二重扉を潜つて大広間に入った。

何百何千という蠟燭が宙に浮かび、4つの長テーブルを照らしている。テーブルには既にセツトされた金色の、お皿とゴブレットが輝いていた。背後のハリーが興奮気味だ。

広間の上座には既に先生方がテーブルにつき、新入生に優しい笑みを向けていた。その中でただ一人、ハリーを睨みつけるスネイプだけを除いては、どの先生も優しくそうだ。マクゴナガルは上座の近くまで1年生を誘導し、上級生たちに顔を向けて先生方に背を向ける形で一列に並ばせた。

私たちを見つめる何百の顔という顔が、蠟燭のちらちらする不安定な光に照らされてランタンのように見えた。さつきは真珠色に見えたゴーストたちは今は、蠟燭の灯りに負けて銀色の霞のように見える。

隣でハリーが天井を見上げ始めたので肘で小突いた。

「不格好よ、ハリー」

「じめん」

確かにこの天井が物珍しいのはわからなくもないが、今は前を見ているべきだろう。マクゴナガルがどこからか取り出した四本脚のストールを1年生の列の前に置き、その上には薄汚れ継ぎ接ぎだらけのトンがり帽が置かれた。

1年生も、上級生も全員がその帽子を見ていた。一瞬、広間は水を打ったように静かになる。すると帽子がピクピクと動き、そのつばの縁の破れ目がまるで口のように開いて歌い出した。

——私はきれいじゃないけれど

人は見かけによらぬもの

私をしのぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう

山高帽は真つ黒だ

シルクハットはすらりと高い

私はホグワーツ組み分け帽子

私は彼らの上をいく

君の頭に隠れたものを

組み分け帽子はお見通し

かぶれば君に教えよう

君が行くべき寮の名を

グリフィンドールに行くならば

勇気ある者が住まう寮

勇猛果敢な騎士道で

他とは違うグリフィンドール

ハツフルパフに行くならば

君は正しく忠実で

忍耐強く真実で

苦勞を苦勞と思わない

古き賢きレイブンクロー

君に意欲があるならば

機知と学びの友人を

ここで必ず得るだろう

スリザリンはもしかして

君はまことの友を得る

どんな手段を使つても

目的遂げる狡猾さ

かぶつてごらん！恐れずに！

興奮せずに、お任せを！

君を私の手にゆだね（私は手なんかないけれど）

だつて私は考える帽子！——

歌が終わると各テーブルから割れんばかりの拍手が鳴り響き、帽子はそれに応えるようにそれぞれのテーブルにお辞儀をして、また静かになった。

「ジーナの言う通りだ！僕たちはただ帽子を被れば良かったんだよ！フレッドのやつ、僕にトロールと取っ組み合いをさせられるつて言つたんだ」

ロンが囁き、ハリーは笑つたが、その笑みは弱々しかった。自信がないのだろう。今のところ、見る限りではハリーはどの寮にも合う特徴は見せていない。少し気分が悪そうなくらいだ。

それに対して私はさして緊張もなければ不安もないあたり、どうかしてしまつたのかと思つたが、昔から人前は得意だつたなと思ひ直した。

そんな中、マクゴナガルが長い羊皮紙の巻紙を手の前に進み出た。

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子を被つて椅子に座り、組み分けを受けてください」
ハリーとロンがまた少し縮こまるのを、視界の端で捉えたが気にせず、マクゴナガル
を見つめた。

「アボット・ハンナ！」

ピンクの上気した頬に金髪のおさげが可愛らしい少女が転がるようにして前に出た。
恐る恐るといった風に彼女は帽子を被るが、あまりに大き過ぎて目まで隠れてしまつて
いた。

一瞬の沈黙。次の瞬間、帽子が叫ぶ。

「ハッフルパフ！」

右端のテーブルから歓迎の声と拍手が上がる。

「ボーンズ・スーザン！」

彼女もハッフルパフ。

「ブート・テリー！」

彼はレイブンクローだった。

次はたぶん、私の番だ。すつと息を吸い込んだ。

「ブラック・レジーナ！」

列から一歩、前に踏み出す。スリザリンのテーブルがざわめくのを感じた。

ゆっくりと胸を張って組み分け帽子の前まで歩き、その帽子を取って座り、そして被った。それと同時に心の奥の扉を閉ざし、予見や転生、それに関する記憶と感情を遮断した。

この帽子はあまりに大きい。そして埃臭い。帽子はズルズルと落ちてきて私の視界を覆った。

「ふむ……」

低い声が耳朶を打った。

「難しい子が来たものだ。勇気に溢れ…友を大切に、勉学にも優れ……ああ、しかし平等性には欠けるようだ。ふむ、これだけは言っておこうか…君はハツフルパフ向きではない。して……どうしたものか」

ねえ。

頭の中で帽子に話しかけた。

「なんだね」

私、グリフィンドールがいいわ。

「どうしてだね」

グリフィンドールがいいのよ。組み分け帽子は私の気持ちは酌んでくれないの？

「ふむ、そうか。それでいいのかね？」

もちろんよ。

「なら……君は——」

ぎゅつと椅子の縁を握り締めた。

「グリフィンドール！」

帽子がそう叫ぶのを聞くなり、私は帽子を脱いで椅子に置いた。忘れずに彼に、ありがとうと囁き、そして大歓声を上げる左端のテーブルに向かう。

自然と笑顔が零れた。フレッドとジョージの近くに座り、彼らと握手を交わす。

「やあ、レジーナ。僕はフレッド」

「俺はジョージ。よろしく！」

2人は代わる代わるそう言ったが、どうもすつきりしない。

「こちらこそよろしくね。でも、初対面の人に自己紹介するのなら、自分の名前を名乗った方がいいかも知れないわね」

そう言えば、ジョージと名乗った方の双子の片割れが感心したように声を上げた。

「おつどろきー！君、僕らの見分けが付くのかい？……あれ？いや、そもそもどうして僕らが入れ替わってるって気付いたんだい？僕らとは初対面だろう？」

「ロンから少し聞いてたの。よろしくね、フレッド」

くすくすと笑い、彼らから目を離してまた組み分けに注意を向けた。

「フィンチャー・フレッチリー・ジャスティン！」

この間に何人かの組み分けは進んでいたらしい。彼もハツフルパフに決まった。

背後では双子による、見分けが付くか付かないかの言い争いがされていたが、パーシーによって鎮められた。

「フイネガン・シエーマス！」

黄土色の髪をした少年は決定に丸々分かったがやっと、帽子はグリフィンドールと宣言した。

「グレンジャー・ハーマイオニー！」

グリフィンドールだ。ロンがうめくのが見えた。

「ハーマイオニー！これからは同じ寮生ね」

「ええ！そうね、仲良くしましょう。ああ私、とつても緊張したわ…レジーナは凄いわね、緊張していないみたいだったわ」

ハーマイオニーは興奮したように言った。

「私は昔から人前は得意なのよ。それにハーマイオニー、私のことはジーナって呼んで友だちでしよう？」

「ええ！そうね、そうするわ。ありがとう」

「それ、俺たちも呼んでいいかい？」

後ろからジョージが身を乗り出してきた。その拍子にゴブレットが食器にぶつかり、かちやん、と耳障りな金属音を立てた。パーシーが睨むが彼は気にしなかった。

「いいわよ、改めてよろしくね。実は貴方たちのイタズラの興味があるのよ。今度話を聞かせてくれない？」

「もちろんさ！とっておきのを用意しとくよ！」

二人は双子らしく、見事にシンクロしてみせた。

ハーマイオニーとパーシーが『イタズラ』という単語に眉をひそめたが特に気にすることもなく、双子と再び握手を交わした。

これで、もう共犯者になることを宣言したのも同然だ。寮に行ったらシリウスに手紙を書こうと決めた。

組み分けはまだ続く。

「ムーン」：「ノット」：「パーキンソン」：「パチル」：「パークス」……。

そしてついに、ハリーの名前が呼ばれた。

「ポッター・ハリー！」

第6話 組み分け 後編

「ポッター・ハリー！」

ついにハリーの名前が呼ばれ、広間にはざわめきが広がっていく。帽子へと向かう彼の足取りは重く、顔は真っ青だった。

「ああ、すごく気分が悪そうだわ」

思わずそう言ったが、誰も私の呟きを聞く人はおらず、みんなハリーをよく見ようと首を伸ばしていた。

ハリーも他の1年生同様、帽子によって目をすっぽりと覆われた。

中々寮名は叫ばれない。どんだんざわめきは大きくなっていく。そして、ついに——
「グリフィンボール！」

その叫びが終わるのを待たずに、グリフィンボールのテーブルが爆発した。どかんと湧き上がる爆発的な歓喜の声、すぐ近くで双子が「ポッターを取った！」と連呼していた。

当のハリーは呆然としたままふらふらとテーブルまで歩いてきて、心ここにあらずのまま、パーシーときつく握手を交わしてからストーン、と落ちるように私の隣に座った。

「僕……僕、グリフィンドールだ」

「ええ、そうね」

信じられない、とでも言うようにハリーは呆然としたまま言った。今だにハリーが戻って来ないので、戻ってくるまで放つて置くことにしたのだが、彼の向かいに座っていたゴースト（さっきのタイツマンだ）が嬉しそうにハリーの手を軽く叩いたので、彼はあまりの冷たさに目が覚めたようだった。

「落ち着いた？」

「え……？あ、うん。なんだかすつきりしたよ」

「それはよかったわ」

そう言ってまた前を見た。視界の端でハグリッドが大きな親指を立ててグッドサインを送っていたが、たぶん、ハリーに対してだろう。

組み分けが済んでいないのはあと3人だった。

「ターピン・リサ」のあと、ロンの名前が呼ばれた。

ロンは今にも吐きそうなほどに青ざめていた。ハリーよりもひどい。しかし彼の組み分けは一瞬にして終わった。

「グリフィンドール！」

ハリーや他の寮生と共にロンに拍手を送り、彼を迎え入れた。パーシーが彼に勿体

ぶって声をかけていた。

残る一人もすぐに組み分けられ、マクゴナガルはくるくると巻紙をしまい、帽子と椅子を片した。

隣でハリーが空っぽの金の皿を眺めていたが、まだその皿が食べ物によって満たされることはない。ダンブルドアが立ち上がった。上座のテーブルの真ん中に座っていたということも相まって、なんだか大きく見える。

彼はニツコリと満面の笑みを浮かべた。

「おめでどう！ホグワーツの新生、おめでどう！歓迎会を始める前に、二言三言、言わせていただきたい。では、いきますぞ。それ！わっしょい！こらしょい！どっこらしょい！以上！」

ダンブルドアはそのまま席につき、広間から拍手喝采が湧き起こった。ハリーは笑っているのか悪いのか微妙な顔をしていたが、ロンはすっかり緊張も解けて大爆笑だった。

「君の言った通りの人だったね、ジーナ！」

「とても——素晴らしい魔法使いで、天才のはずなんだけど……不思議な人よね。それより2人とも、ポテトは食べる？」

いつの間にか沢山の料理で満たされていた目の前の大皿に手を伸ばしながら聞いた。

ハリーはそこでやつとその料理たちに気が付いたようだ。

「うわあ……僕の好きなものばかりだ——貰うよ、ありがとう」

ホグワーツ特急内の車内販売のように、今度もハリーは、ハッカ入りキャンディ以外の沢山の料理たちを全部少しずつ取って食べ始めた。彼は案外欲張りなのかも、と思つたがやはり、彼は今までひどい場所に身を置いてきたのだからこういう反応は当たり前か、と思ひ直し、私も同じようにいくつかの料理を少しづつ皿に盛りつけた。

ハッカキャンディ？もちろん、食べる。ハッカは好きだ。前世ではよく食べていた。

ハリーは次々と料理を口にしては、美味しいねと微笑んだ。ロンもそれに同意して、リスのように口いっぱいにしてステーキを頬張りながら頷いた。彼の口の周りは残念ながら、ステーキのソースと肉汁に塗れていた。

「ロン、ソースが付いてるわ」

手元でステーキを細かく一口ほどに切り分けながら、そう指摘すれば、ロンは恥ずかしそうに手で口を拭いた。手で拭く辺り、彼らしい。

その時、ハリーの向かいに座っていたゴースト（さつきやつと名前を思い出した。確か、ほとんど首なしニツクだ）がハリーのステーキを見て悲しそうに「美味しそうですね」と呟いた。

「食べられないの？」

「ハリー、ダメよ。ゴーストはこの世のものには干渉できないの。この世とあの世の狭間にいるから——」

ハリーを窘め、私自身も失言だったかもと口を閉ざしたが、彼は私がゴーストについてよく知っていたことが嬉しかったらしく、満足気に頷いている。

「その通りです、ミス・ブラック。私はかれこれ400年、何も食べておりません。…ああ、自己紹介がまだでしたね。ニコラス・ド・ミムジー——ポーピントン卿といます。以後、お見知りおきを。グリフィンドールのゴーストです」

「僕、君のこと知ってるよ！」

ロンが口を挟んだ。突然声を発したのでちょうど口に含んでいたポテトのカスが飛んだ。

「ロン」

窘めるように言えば、彼は口を閉じ、口内に残ったそれらを飲み下した。

「——君、ほとんど首なしニックだよね？」

ロンの様子に、ニックは不服そうにした。

「むしろ、呼んでいただくのであれば、ニコラス・ド・ミムジー——」

と、呼び名について改まって彼は言いかけたが、シエーマスが割り込んできた。

ああ、もう知らない。私は知らないよ。

ニコラスから目をそらし、またステーキの切り分けに取り掛かった。

「ほとんど首なし？どうしてほとんど首なしになれるの？」

「ちよつと、やめなさいよ。死因を聞くのは良くないわよ」

シエーマスにハーマイオニーが注意したが、ニツクは少し怒ったようだ

「ほら、この通り」

腹立たしげなその声の後、ニチャつと嫌な音がした。続いて、彼を見ていた数人から「うわあ…」という声が聞こえた。どうやら彼は頭を取り外したらしい。

だから見たくなかったのだ。首の切り口というのはきつと気持ち悪いだろうから、料理が美味しくなくなるだろうと思つて顔をそらしたのに、音まではつきり聞こえてしまった。こうなるのなら耳も塞いでいた方がよかつたかも知れない。さっきの音ももう耳にこびり付いていた。

「さて、グリフィンドール新入生諸君、今年こそ寮対抗優勝杯を獲得できるよう頑張つてくださいるでしょうな？」

首を戻したらしい彼の言葉に顔を上げ、もちろんよ、と笑つて見せれば彼は満足気に頷いた。

「グリフィンドールがこんなに長い間負け続けたことはない。スリザリンが6年連続で優勝杯を取っているのですぞ！『血みどろ男爵』はもう鼻持ちならない状態です……ス

リザリンのゴーストですがね」

私以外の誰もピンと来ていないようだったので彼はそう付け足した。

血みどろ男爵の横で居心地悪そうにしているマルフォイを見てハリーは嬉しそうに一人で微笑んでいた。

「どうして血みどろになったの？」

空気が読めないのか、シエーマスは興味津々に聞いたがニツクは言葉を濁し、その質問には答えなかった。

それからすぐに、全員のお腹がいつぱいになる頃、目の前の大皿から料理が消え、皿がピカピカになったと思えば代わりに沢山のデザートが現れた。

料理にしてもデザートにしても、屋敷妖精は大変だろうなと思いつつ、今度おやつをもらいに行こうと心に決めた。

綺麗にヘタの取られたいちごをいくつか食べるうち、話題はニコラスから家族へと変わっていった。

シエーマスのことからネビルのこと、それからハリーも聞かれていたけど、わからないと答えていた。

ハーマイオニーはパーシーと授業について話していたが、ロンにすごい顔をされていた。

みんなが一通り食べ終わる頃、私は最後まで取っておいたハツカキャンディを舌の上で転がしていた。脂っこい料理が続いたあとの、こういうスツキリするものは格別だ。隣のハリーは少し眠そうにしてぼんやりと教員席を見つめている。

「痛っ！」

突然彼は顔をしかめ自らの額をパシッと叩いた。ちようど傷痕のところだ。

「ハリー？」

彼の顔を覗き込めば、ハリーは慌てて手を下ろした。

「な、なんでもないよ、痒かっただけ……」

クイレルか。教員席の彼を見れば、ちようどスネイプと話をしている後頭部がこちらに向いていた。恐らくハリーは彼のターバン越しにヴォルデモートと目が合ったのだろう。

「そう……」

たぶんアイツは原作とは変わらないだろう。靈魂にも満たないその存在のままクイレルに取り憑いて、一時的な復活を実現させるために賢者の石を狙っている……。

少し考え込んでいる間にハリーはパーシーにスネイプについて尋ねたらしく、彼らの声が耳に入ってくる。

「——クイレルの席を狙ってるって、みんな知ってるよ。闇の魔術にすごく詳しい

んだ、スネイプって」

その声のしばらくあと、気が付けば広間は再び、しんと静まり返っていた。

いつの間にかダンブルドアが席を立っていた。

「オホン——全員がよく食べ、よく飲んだことじゃろうから、また、二言三言。新学期に入るに辺り、いくつかお知らせをしておこうかの。1年生に注意しておくが、校内にある森に入ってはならぬ。これは上級生にも、何人かの生徒たちに特に注意しておきたいことじゃ」

ダンブルドアの青い目が私の背後で背筋を伸ばして話を聞いている双子を捉え、イタズラっぽくキラリと光る。

「管理人のフィルチさんから、授業の合間に廊下で魔法を使わないように。それから、今学期は2週目にクイディッチの予選があるので寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡するように」

「…最後に、とても痛い死に方をしたくない人は、今年いっぱい4階の右側の廊下に入らぬことじゃ」

ハリーを含め、数人の生徒が笑い声を漏らしたが、ダンブルドアの目が生徒たちを見回すと、それも消えた。

1年。その区切りがあるということはダンブルドアは1年後にはなんらかの理由で

クイレルがここにいないということを確信しているということだ。それほどまでにヴォルデモート——もとい、就職に来た当時のトム・リドルの呪いは強力なのだろう。

ハリーとパーシーが立入禁止の理由や監督生たちへの処遇について意見を交わしているが気にせず、ダンブルドアを見つめた。彼はすつと杖を上げた。

「では、寝る前に校歌を歌おうかの」

彼が声を張り上げると同時に、周りの先生方の顔が強張った。

ダンブルドアは長い杖をひよい、とひと振り、長い金色のリボンを出現させて空中に文字を書いた。

「自分の好きなメロディで。では、さん、し、はい！」

歌詞はひとまず置いておくとして、メロディは統一しないとダメでしょ……。

そう思いつつ、適当に歌った。というか、歌詞を読んだ。

学校中が大声で、しかも低音で唸った。

訳のわからない歌詞をなぞり終われば、背後ではまだ双子が歌っている。とびきり遅い葬送行進曲だ。ダンブルドアもそれを楽しんでいるようで、最後の数小節分は彼らにあわせて杖を指揮棒のように振っていた。

やっと2人歌い終わったあと、彼は双子に向けて誰にも負けない拍手を送った。彼ら

は案外仲がいいのかも知れない。

「ああ、音楽とは何にも勝る魔法じゃ」

歌詞とメロディがきちんとしていれば、激しく同意するんですが。

ダンブルドアは何故か感激の涙を拭いながらそう言った。

「さあ、諸君、就寝時間じゃ。駆け足！」

その声を合図に、全校生が一斉に立ち上がった。私もすぐさま立ち上がる。

「ハリー、後で行くわ。パーシーか誰かに、ダンブルドア先生と話があるって、言っておいてくれない？」

「うん、いいよ。あとでね」

まだ立ち上がってすらいないハリーに伝言を託し、出口へと殺到する流れを掻き分けながらみんなとは逆向きに、教員席を目指した。

他の先生方も退散し始める中、ダンブルドアだけがそこにいるのが人混みの向こうに見えた。半月眼鏡の奥の青い目が私を捉えている。

やっと人混みを突破すれば、教員席には最早ダンブルドアしかいなかった。

「——初めまして、ダンブルドア先生。レジーナ・ブラックです。お手紙で突然お時間を取らせてしまつてすみません」

一応、そう謝つたが、彼は嫌な顔ひとつせず柔らかく微笑んだままだ。

「構わんよ。…して、お話とは何かな？」

「はい。実はペティグリーユについてなのですが——」

転生についての記憶を閉ざしたまま、彼の目を見つめた。聡い彼のことだ。私の言葉の裏に、予見以上のものを見つけることなど容易いだろう。だがそれはまだ気付かれてはいけない。彼ほどの影響力ならば私の予見や予備知識など、風前の灯火に等しいのだ。

私はただ、ロンのネズミ…もとい、ペティグリーユを彼と判断した材料とヴォルデモートの復活のことをダンブルドアに話して聞かせた。

「——このまま何もせず未来を迎えれば必ずペティグリーユはここから逃げ出し、いずれヴォルデモートと合流して彼自身の復活にも繋がります。…先生なら、どうされますか」

私が言葉を切れば、彼は少し考えるように間を取ったがすぐに口を開いた。まだその視線と、私の視線は互いに交差したままだ。

「ふむ。そうじゃな…：わしなら、一度彼の様子を見るじやろう」

「…そうですね。ロンには、既にこのことは伝えてあります。その上で元のように接する約束もしました。それでいいでしょうか？」

「もちろんじゃ。…ところで、このことは君のお父上には…：？」

彼の言葉に、思わずシリウスを思い浮かべた。無邪気で穏やか、それでいて優雅な立ち振る舞いの彼が親友の仇であるペティグリュウの存在を知ったら、どうするだろうか。

今思い浮かべたその全てを、彼は捨ててしまいたいそうだ。意地でもペティグリュウを殺しに来るだろう。今の彼には私という足枷がない。もうそうなったときはきつと止められないだろう。

「話していませんし、これからも話すつもりもありません。父の性格上、ハリーの両親の仇を野放しにできるとは思えませんから……それに彼が犯罪者の道に踏み込むのは、娘として心苦しいですし」

ダンブルドアはゆっくりと頷いた。

「よい判断じゃ。ではレジーナ。君の話を踏まえて、わしから少し頼みがあるのじゃが」彼の目がきらりと光る。

「これから先、ペティグリュウが何か不穏な行動を起こした場合、逐一わしに報告してくれるかの」

「はい、わかりました」

こくりと頷いて見せれば、彼は柔らかな微笑んだ。

「では、わしの部屋は職員室の近くのガーゴイル像の奥じゃ。わしは大抵そこにおる。」

合言葉は——君専用のもを用意しよう——そうじゃな、『ハツカ入りキャンデー』はどうかの」

やっぱり合言葉はお菓子縛り…。

こんなときでも茶目つ気を忘れない彼に少し尊敬の念を送りながらまた頷いた。

『ハツカ入りキャンデー』ですね、わかりました」

「ふむ、決定じゃな」

そう言って彼は杖を取り出し、ふい、と軽く振った。合言葉を追加したのだろう。

「合言葉は決して忘れるでないぞ。——では、君のことはグリフィンドール塔までわし
が送ろうかの」

第7話 ダンブルドア

「合言葉は決して忘れるでないぞ。——では、君のことはグリフィンボール塔までわし
が送ろうかの」

ダンブルドアは朗らかにそう言い、そして私の先を歩き始めた。すっかり静かになっ
た広間を出て、大理石の階段を登り動く階段に乗り、またいくつか階を上がる。

背の高い彼の後ろを歩くうちにふと、彼が私の歩幅に合わせてゆっくり歩いているこ
とに気が付いた。

「——君の予見のことについて、聞いてもいいかな？」

ダンブルドアは突然口を開いた。しかしその足は止まることなくグリフィンボール
塔へと向かっている。

「はい」

相手はダンブルドアだ。先程の私の話で何かおかしな点を見つけたのだろうかと内
心ドギマギしながら応えた。

「君の話を聞く限り、その予言は君の母上と同じものと思うが、間違いないかね？」

「はい。ですが私の予言——未来視と言うべきでしょうか？これは少しでも可能性のあ

るものをいくつか示していた母のものとは違い、現時点でこの先起こる可能性の最も高い未来だけを見るものだと思います」

ダンブルドアは足を止め、振り返った。

「ほとんど必ず起こり、ほんの少しのことで未来の変わることが可能な君の予言を、わたしに伝えてしまうてよかつたのかね？」

我ながら言うのも何だが、わしの影響力は絶大じゃぞ、と彼は言う。気が付けば、彼の向こう側、階段の上にはあの肖像画が見えた。彼女は椅子に座ったままやすやすと眠っている。

半月メガネの奥の彼の目を見つめ、頷いた。厳しい目つきだ。

「先生なら、ペティグリユーの様子を見られると信じていたので」

「予見ではなく？」

「私は自分の未来はもちろん見れませんし、その未来に関わりのある人物に触れなければ未来を探ることはできません。先生には先程お会いしたばかりなので、今のはあくまで父から聞いた限りの先生の様子からの予想です」

ダンブルドアは頷いた。

「ふむ……ならばわしは君の予想通りの人間だったというわけじゃな」

少しいたずらっぽく微笑んだ彼に釣られ、私も思わず微笑んだ。そして彼は「さあ、寝

る時間じゃ」と階段の残り一段を登った。目の前には巨大な絵画。太った婦人^{レディ}だ。

「あらダンブルドア先生。こんな夜更けにどうされましたの？」

ダンブルドアが肖像画の前に立ったことで婦人は目を覚ましたらしい。眠そうな声で尋ねる彼女は、彼の背後にいる私には気が付いていないようだ。

「生徒を送り届けに来たのじゃよ。わしとの長話に付き合ってもろうたのじゃが、1年生じゃから寮の場所も合言葉も知らぬからの」

そつと私の背を押して見えるように前に引き出しながらダンブルドアは言った。婦人も納得したようだ。

「そうでしたの。では、合言葉は？」

「カプート ドラコニス」

ダンブルドアがそう唱えると肖像画がぱつと開き、その後ろの壁の少し高い位置に穴があるのが見えた。

ダンブルドアはくるりと私を振り返り、優雅に寮の入り口を示す。

「合言葉はしばらくこのままじゃ。忘れるでないぞ」

「はい。ありがとうございます」

彼は満足気にゆつたりと頷いた。

早速、その穴へと向かう。他学年と比べて小柄な一年生が登るにしては位置が高い

が、頑張れば登れなくもない高さだ。

穴の縁に手を掛け、勢いを付けてジャンプしようとしたとき、ふと地面が競り上がり、楽に上がれる高さになった。後ろを振り返れば、ダンブルドアが杖を袖にしまうところだった。

「ありがとうございます」

会釈をして穴に登れば、大体彼と視線の高さが同じになった。私が登り切ったのを感じたのか、外に開いていた肖像画がゆっくりと滑るように閉まりはじめる。

「おやすみなさい、先生」

「おやすみ、レジーナ。いい夢を」

挨拶を交わしてすぐに肖像画の向こうに先生が見えなくなった。

珍しく緊張していたのか、その扉が完全に閉まった途端溜息が漏れた。誰もいない談話室に、暖炉で残り火がパチパチと爆ぜる音だけが響く。まだふわりと温かい。

静かな部屋。落ち着いた、少し抑えたような金の色と深い紅で統一されたその部屋には確かに、先程まで何人かの生徒たちが騒いでいた痕跡が残っている。

ホグワーツ特急で購入したのだろうお菓子の包みや、先程のハツカ入りキャンデイの包み、何かのイタズラグッズの副産物と思われる紙くずの山が部屋の所々に落ちていた。

それらを避けながら談話室を横切り、女子塔の方へと向かう。もう臉は重く、足も鉛のようだ。すぐにベッドに飛び込みたいところだがまだだめだ。自分を叱咤しながら重い足取りのまま階段を登り、自分の部屋を探す。寮の部屋は廊下いっぱい、1m毎に扉があった。空間拡張呪文でも掛かっているのだろう。

私の部屋はすぐに見つかった。手前から3つめの扉だ。ドアノックカーの上にはルームメートの名前。

『レジーナ・ブラック、ラベンダー・ブラウン、

ハーマイオニー・グレンジャー、パーバティ・パチル』

ブラウンの文字に溜息混じりにドアノブを掴み、音を立てないようにゆっくりと回した。そっとその部屋に足を踏み入れる。

まず、談話室と同じように紅と金をベースにした装飾が施されたベッドが目に入った。その中には静かに寝息を立てるルームメートが——？

「おかえり、ジーナ」

眠っていたはずのハーマイオニーが起き上がった。

「…ただいま。もしかして待っていてくれたの？」

「ええ、荷物の確認とかしないといけないから……。ラベンダーとパーバティも待ってるって言ってたんだけど、寝ちゃったわ」

彼女はちらりと隣のベッドを見やった。こんもりと小さな山を築く布団は寝息に合わせてゆつくりと上下していた。

「そうなの。ありがとう。でも色々と疲れてるでしよう？先に寝てていいわよ。私はこれから父さんに手紙を書くから、少し遅くなるわ」

唯一空いているベッドの脇に積まれたトランクの上に置かれたケージの中でコレットが寂しそうに静かに鳴く。

ハーマイオニーは目を擦りながら頷いた。

「そうするわ…私、少し——張り切り過ぎちゃったみたい」

欠伸を噛み殺しながらハーマイオニーは伸びをし、そしてそのままベッドに倒れ込んだ。驚いたコレットが羽を逆立ててギャツと短く鳴いたがハーマイオニーは既に小さな寝息を立てていた。

丸く見開かれた彼女の目が光る。

「大丈夫よ、コレット」

なんだか可笑しくてクスクスと笑いながらケージの扉を開ければ、彼女は不満そうながらものそのそと出てきて私を見上げた。月明かりに照らされて彼女の橙色の目が、少し赤く見える。

「これから手紙を書くから、またお仕事お願いね」

そつと頭を撫でる。そうすると彼女はいつものように気持ちよさそうに目を瞑った。小さい方のトランクから羊皮紙と羽ペン、インクを取り出しベッド脇の小さなテーブルに置いた。コレットは少し首を傾げながらその様子をじつと見ている。

だが少し手元が暗い。袖から杖を取り出した。

「ルーモス 光よ」

ぼわん、と青白い光が杖先から溢れた。コレットは眩しそうに目を細める。

「ごめんね。これ、持ってきてくれる？」

夜行性である彼女には少し可哀想ではあるが、光の点つた杖を彼女の口に啜えさせ明るさを確保してインクにペンの先を浸した。

どう書こう？ ハリーやロン、ハーマイオニーのこと、組み分けのこと、フレッドとジヨージのこと。

いくつか書き出していくうちにいつの間にか羊皮紙は字で埋まっていく。

「少し書きすぎたかしら？」

最後に名前を書いてインクの瓶に蓋をしながらコレットに尋ねるが、彼女は完全に目を瞑ってしまった。

「ああ……ごめんね、眩しかったわね。——ノックス 闇よ」

彼女から杖を取り上げ、光を消した。その瞬間、一瞬何も見えなくなるがまた次第に

月明かりが見え始める。

「さあコレット、お仕事よ」

書き終わった羊皮紙をクルクルと巻き、紐を結んでコレットに啜えさせた。彼女はぱちくりと一度だけ瞬きして見せる。

それが了解の意であると勝手に解釈して、窓を開けた。

「じゃあ父さんによろしくね、行ってらっしゃい」

バサツと羽音を響かせてコレットは外に飛び出した。男子塔の方から白フクロウが飛び立ったのとはほぼ同時だった。白い月と雪のように白いフクロウ、ここからは真っ黒に見えるコレットの飛ぶ姿が幻想的だ。

しかしすぐに白フクロウは軌道を逸れ、禁じられた森の中へと消えていった。今のハリーにはフクロウ便を出すような人はいないのだ。

またいつか、ハリーにシリウスのことを知らせる日が来たらその時は、私やシリウスがその人になるんだろうな、なんて言ったらシリウスは泣いて喜ぶのに、と一人苦笑した。

インクとペンをある程度片してトランクからネグリジエを取り出し着替えて、するりとベッドの中に潜り込んだ。ふかふかと包み込むような温かい布団。それはすぐに私を、夢さえ見ることのない深い眠りに引き込んでいった。

第8話 魔法薬学

ホグワーツという場所は、何かの特殊な魔法でも掛かっているのかと錯覚するくらいに時間が経つのが早い。それほどまでに充実し、退屈など微塵も感じさせない素晴らしい場所だ。

授業のほとんどの内容は予習で知っていることばかりではあったが、家族以外の誰かと一緒に何かをするというのは楽しい。ハリーもロンも、勉強には少し苦労していたので談話室でその日の範囲を復習したり、2人の可笑しな間違いに一緒になって笑ったり、これまでにないくらいに毎日がキラキラと輝いて見えた。

そうしてあれよこれよと言ううちに、気が付けば入学から2週間が経とうとしていた。最近、クイディッチの予選が近付くにつれ頻繁にオリバー・ウッドがチェイサーとシーカーがいないと喚いているのを聞いてやっと日にちの感覚を思い出したのだ。

そして今日は金曜日。記念すべき、初魔法薬学の授業である。正直憂鬱でしかない。セブルス・スネイプがハリーをジェームズに重ねているのは知っている。だとすれば私はどうだろう？母によく似たこの顔と、シリウスから受け継いだこの瞳。彼は私もシリウスに重ねて拒絶するのだろうか。

原作を知り、彼の一途な想いと悲運を知る私には彼を嫌う理由などあるはずもなく、むしろ好きな部類なのだ。けれど私はこの目と名前で、何の釈明もなく彼から嫌われてしまふのだろうか。

人知れず、不安な思いが胸を締め付ける。

「——ねえ、本当にここであつてるの？」

ロンが隣で囁いた。ここは地下、魔法薬学の授業が行われる牢屋のような部屋の前に来ていた。確かに教室とは思えない趣味の悪さだが、魔法薬を多少なり知っていればこの立地は納得できる。その完成品そのものや使われる材料には乾燥や熱、極稀に光に弱いものがあるのだ。その点、地下牢というのはそのどれもカバーできるので魔法薬学の授業をするに持つて来いというわけなのだ。

「あつてるわ。アンジェリーナが教えてくれたから大丈夫よ」

そう言いながら牢の鉄扉に手を掛ければ、それはすぐに私たちに道をあけた。暗く、ホグワーツのどこよりも寒い教室には、壁際にびつしりと並べられたホルマリン漬けの動物たち以外誰もいない。

そつと恐る恐る教室に足を踏み入れる。コツコツという足音が、不気味なほど大きく反響した。

「…不気味だね」

ハリリーが言う。その通りだ。この教室は良くないものでも出てきそうな、そんな想像を掻き立てる。

「そうね……悪霊でも出てきそうだね」

ロンが冗談は止めてくれよ、と抗議をしたので謝り、席に座った。ところが座ってから、この席はまずかったと後悔した。

一番前だったのだ。こんなところ、嫌でも目立つ。ましてや隣にはハリリー・ポッターだ。セブルスが嫌なことを思い出さないことだけを祈り、席については諦めた。

しばらくすると、やっと教室に辿り着けた他の生徒たちがぞろぞろと教室に入ってきた。私、ハリリー、ロンと並んで座っていた四人掛けの長机の私の隣に、ハーマイオニーが腰掛けた。

「ハイ、ハーマイオニー」

「ハイ、ジーナ。初めての魔法薬学ね。私、とっても楽しみだわ！」

彼女は興奮気味に言った。確かに今の彼女はとても楽しそうだが、もうすぐそれも踏み躪られるんだろうなと思うと、なんだか微妙な気分になった。

「そうね」

徐々に教室を埋める生徒の数は増え、陰気な教室は活気付いて心なしかほんの少し温かくなった気がした。

しかし唐突に、またこの教室を冷たい空気が走り、ねっとりとした、決して明瞭とは言えない声が地下室に響く。

「——静かに」

その瞬間、この部屋全体が水を打ったように静まり返った。

地下牢の後ろの入口から黒いマントを翻しながら彼はつかつかと前の教卓へと早足で歩き去っていく。風に乗って僅かに、特殊な薬品の匂いがした。

「出席を取る」

自分の名前を名乗りもせず、彼はまずスリザリンから名前を読み上げ（はつきりと良い返事をしてみせたドラコ・マルフォイにきっちり一点与えていた）、次にグリフィン・ドールの生徒の名前を読み上げる。

「——レジーナ・ブラック」

「はっ」

憎々しげなその声ははつきりと、シリウスと、それから私の姓への嫌悪を表していた。胃が、居心地悪く少し下がるのを感じた。

しかしすぐに彼は何もなかったかのように続きの名前を読み上げていく。

「——ああ、さよう」

ハリーの名前のところで止まった。変わらずねっとりとした猫撫で声だ。

「ハリー・ポッター。我らが新しい——スターだ」

ドラコとその取り巻きたちがクスクスと冷かし笑いをした。思わずそちらを睨みつけ、黙らせる。

たかだか私の睨みだけで萎縮するとは、彼らはまるで女子のようだと顔をしかめた。本人を前にはつきりとは悪口を言わず、影で嗤う。一番嫌いなタイプだ。

「ロナルド・ウィーズリー」

ロンの名前が呼ばれやつと出席を取り終わると、彼は教室を見渡した。暗く冷たい、虚ろな目だ。

「このクラスでは、魔法薬調剤の微妙な科学と、厳密な芸術を学ぶ」

魔法と科学。本来ならば相容れないその単語を使うあたりに、彼の魔法薬に対する愛情が見て取れた。

生徒たちは（ネビルやシエーマスさえも）スネイプの土気色の、決して顔色がいいとは言えないその顔を凝視していた。

「この教室の中では呪文を唱え、杖を振り回すような馬鹿げたことはやらん。そこで、これでも魔法かと思う諸君が多いかも知れん。沸々と沸く大釜、ゆらゆらと立ち昇る湯気、人の血管の中を這い巡る液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……：諸君がこの見事さを真に理解るとは期待しておらん。私が教えるのは、名声を瓶に詰

め、栄光を醸造し、死にさえ蓋をする方法である——ただし、私がこれまでに教えてきたウスノロたちより諸君がまだマシであればの話だが」

呟くような演説の後は、その余韻だけを残して教室は静まり返った。ぶーん、と静けさに耳が鳴った。

スネイプは教室の前を1往復し、戻ってきた途端に「ポッター！」と呼んだ。

隣でハリーが身構えるのを感じた。

「アスデフォルの球根の粉末にニガヨモギを煎じたものを加えると何になるか？」

ハリーはロンと顔を合わせるが、残念ながら2人とも答えを持ちあわせてはいなかった。ハリーの反対隣でハーマイオニーの手が高々と天を突いた。

「わかりません」

スネイプはせせら笑った。

「——有名なかただけではどうにもならんらしいな」

彼はハーマイオニーを無視した。思わず彼女の太ももを叩き、手を下ろすようアイコンタクトを取ろうとしたが彼女は石像のようにスネイプを見つめたままだった。

彼は続ける。

「ポッター、もう一つ聞こう。ベゾアール石を見つけて来いと言われたら、どこを探すかね？」

彼はまた意地悪く口角を吊り上げた。ハーマイオニーの手が更に伸びた。

「わかりません」

視界の端でドラコたちが腹を振って笑っている。

「クラスに来る前に教科書を開いてみようとは思わなかったわけだな？ポッター」

ハリーはひたすらに彼の冷たい目を見つめていた。最早睨みつけていると言っても過言ではないほどに強い視線だった。

この問答は酷いものだ。ハリーでなくても、この教室の中で正確に質問に答えられる人間は少ないだろう。

「ポッター。モンクスフードとウルフスベーンとの違いはなんだね？」

ついにハーマイオニーが立ち上がった。私ももう我慢はできずそのロープを引っ張って座らせようと試みたが、彼女は決して座らなかつた。

「座りなさい、ハーマイオニー！」

そう囁いても彼女はスネイプを見つめたままだった。

「わかりません」

ハリーは落ち着いた口調でそう言ったが、その言葉の裏にははつきりとした苛立ちが見え隠れしていた。ハーマイオニーはまだ無言でスネイプを睨みつけるように見つめ、手を突き上げていた。

そこでついに、私は「ああ、もう！」と口を開いてしまった。

「先生、ハリーにだけその質問をするのは不公平です！」

スネイプは片眉を吊り上げ、ハーマイオニーは驚いてこちらを見た。もう手を上げることすら忘れていた。

「私は他の生徒にも同様の質問をするべきだと思いますが。それとも、先生はハリー以外の全員がこの質問に満点の答えを返すことができるか？それとも彼に個人的な恨みでもあるのでしょうか？」

彼の眉間に深いシワが刻まれるのを見た。当然のように、気分を害したようだった。

「———なら、ブラック。君は、今までの質問に1つでも答えられるのかね？」

「もちろんです」

ドラコはついに笑うのを止め、ひーひー言いながらも私とスネイプを見つめた。クラス中が見守っていた。

「アステフォルとニガヨモギは合わせるととても強力な眠り薬となり、あまりに強力過ぎるため服用を間違えれば死んだように一生眠り続けてしまうことから『生ける屍の水薬』と呼ばれています。

次にベゾール石とはヤギの胃に出来る結石のことで、大抵の毒に対する解毒剤になります。更に服用方法は喉から押し込むだけとかなり簡単です。探す場所は、普遍的に

答えるならヤギの胃と言うべきでしょうが、私ならホグワーツの魔法薬学の教室の戸棚を探してみます。

最後にモンクスフードとウルフスベーンは同じ植物で、別名をアコナイトとも言いますが、一般的な認識としては『トリカブト』のことです。……如何でしょうか？」

一気に捲くし立て、スネイプの黒い目を見つめて首を傾げて見せた。彼もまさか私が全てを答えられるとは思わなかったらしく、一瞬フリーズしていた。

「——ブラックの言う通りだ。諸君、何故今のを全てノートに書取らんのだ？」

教室は一斉にごそごそと羽ペンと羊皮紙を取り出す音に包まれた。いつの間にか席についていたハーマイオニーは私に賞賛の眼差しを送っていた。

「すごいわ、ジーナ。私、たぶんあんなに完璧には答えられないわ」

「そうかしら？あなたならきつと、私より完璧にできるわよ」

生憎ながら、私はテストで良い点は取つても授業態度は気にしないつもりだ。最低限、席に座つて黒板を（ぼんやりと）見て話を聞く（フリ）という動作はするだろうが、手を挙げて発表したり先生にアピールしたりなんてことはしない。

将来的にハーマイオニーの方が確実に、そういう部分を伸ばしていくだろう。

「そんなことないわよ」

ハーマイオニーは私と小声で会話を進めつつ、綺麗にノートにさっきのことを書き込

んでいた。反対隣でハリーとロンが必死で私の言った内容を思い出そうとしていたが思い出せていなかったたので助け舟を出した。

「——ブラック。君はノートは取らないのかね？」

スネイプは蔑むような目で私を見ていた。私もその目を見つめ返せば、彼の目が忌々しげに細められた。

「必要ありません」

教室がざわめいた。

「どうしてそう言える」

彼の黒い目はまだ私を映し、眉間には深くシワが刻まれていた。

「先程先生もご覧になったように、全て理解しているからに他なりません、何か問題はありませんか？」

シエーマスが小声で感心したように声を上げた。スネイプの眉間のシワが更に深くなり、ぴくりと動いた。

「——その生意気な態度に、グリフィンドール1点減点」

「どうしてですか？」

ハリーが立ち上がった。

「ジーナは『何か問題がありますか』って尋ねただけでしょう？どこが生意気なんですか

？」

2人の間には既に完全な敵対関係が結ばれていた。

「――全てだ。グリフィンドール2点減点」

その顔も、名前も、その全てが。

スネイプのその答えにクラスの半分、つまりグリフィンドール生から批判が飛んだ。

不公平だとか、最低だとか、依怙鼻頂だとか。

そんなことを口々に喚けば当然得点は引かれるばかりなわけで。さらにはこんな状態でもともに授業ができるわけもなく、ようやく授業が終わる頃にはグリフィンドールは合計27点もの点を失っていた。

その後、ハリーは憤慨しながらもハグリッドの元へと行った。ただ、私も誘われたのだが気分が乗らず、柔らかに断った。

寮へと帰る道を1人歩きながらスネイプの黒い瞳を思い返した。暗い、闇色のインクをぶちまけたようなはつきりとした嫌悪。例えばそれがまだ子どもだった頃のシリウスとジエームズによることだったとしても、一人の『ハリー・ポッター』に登場しているキャラクター』として彼を好いていた私自身に向けられるその視線はあまりにも重すぎた。

翌日からもう、授業のことは学校中に広まっていた。しかし大切な部分だけが伝わらず、ハリーが詰問されていたことも私がそれに抗議したこともなかったことのように扱

われ、ただ、私が授業中唐突にスネイプを批判し、生意気な態度を取ったように広まっていたのだ。

元々、スネイプが嫌われていたのでグリフィンホール内では『勇気ある1年生』として扱われたが、スリザリンは違った。全容を知ってか知らずか、完全に私を敵と見なしていた。当然良い事があるはずもなく、スリザリン生と廊下ですれ違えば後指を指され時には実際に手を出されたりもした。

「気にすることはない。今度何かされたらすぐに僕に言いたまえ。それ相応の対応をするよ」

朝一番、時間が早すぎて誰もいない談話室の暖炉の前で、暖かく揺れるその火を眺めていると、パーシーが声を掛けてきた。胸には監督生のバッジが光っていた。

「……ええ、ありがとう、パーシー。でもいいの、ああいうのは構えば構うだけ面白がるんだもの。放っておけばいつかきつと飽きて次のターゲットを探すでしょうし」

「ああ…そうだね。あの連中は確かにそうだ。でもまあ、もし堪えきれなかったりしたらいつでも相談に乗るよ」

彼は優しく言う。ロンとよく似た赤い髪が暖炉を透かして揺らめいた。

「ありがとう」

第9話 飛行訓練

その日、ハリーと私は朝からひどく落胆することになった。次の木曜日——つまり3日後からスリザリンと合同の飛行訓練が始まるのだ。

掲示板に貼り出されたその知らせを見た瞬間、思わずハリーと顔を見合わせたほどだ。ハリーの顔にはひどい失望の色が浮かんでいた。

「そらきた。お望み通りさ。マルフォイの目の前で箒に乗って、きつと物笑いの種になるんだ」

ハリーは魔法使いが本当に箒で飛ぶということを知って楽しみにしていたせいもあり、あまりの処遇に吐き捨てるように言った。

「そんなに気を落とさないで、ハリー。彼だってそんなに上手くないわよ」

慰め程度だが、そんなことを言う。

「どうしてそんなことが言えるの？」

「だって、私たち魔法族はマグルの前で、魔法の存在が気付かれるようなことをしちゃいけないもの。マグルの乗ったヘリコプターなんてもつての外よ」

しかしそう言ってしまったから、ロンやシエーマスもドラコと同じように法螺を吹い

ていたことを思い出し、やってしまったとハリーを見たが、なんとも都合よく彼はそれには気付いていないようだった。

「そうなの？」

それから2日間、皆はひっきりなしにクイディッチや家で箒に乗った時の話をした。ハリーはそんな皆の法螺と思われる話を聞きたびに口を閉ざし、私を見るようになった。

正直蛇足だったかとも思ったが、ハリーは皆の嘘を咎めたい気持ちからそんな行動を取っていたわけではないということに、2日目にしてやっと気が付いた。

「皆、ほんとにそんなことやつてたら捕まっちゃうよね？」

そんな中、純血家系であるはずのネビルが箒に乗ったことがないと知り、驚かされた。しかしそれは彼の祖母が彼を箒に近づけさせなかったためということを聞き、不覚にも納得してしまった自分に嫌気が差した。

一方でハーマイオニーは図書室の「クイディッチ今昔」で仕入れたクイディッチについての情報や箒に乗るときのコツ、飛行のコツなどありとあらゆる情報をインプットし

てはアウトプットする、という作業を繰り返していた。

はじめは彼女の周りには飛行に不安のある1年生がわらわらと集まっていたのだが2日目にもなれば、彼女の話にしがみついているのはネビルだけだった。彼も彼女も必死だった。

そうしてすぐに、悪夢の木曜日はやってきた。私もハリーも、出るのは溜息ばかりだった。

朝食のテーブルが一段落付き始めた頃、頭上でふくろうが高く鳴く。ふくろう便の時間知らせる声だ。

ハリーには何も無い。ヘドウィグがすいーつとやって来て、彼の指を甘噛みしてから彼の飲みかけのコップに嘴を突っ込み、また何処かへと飛び去っていく。ハグリッドからの手紙のあと、ずっと繰り返されている光景。しかし私も、ハリーのことは言えない身だ。

入学したあの夜にシリウスに宛てて手紙を出してから2週間が経とうとしているのにまだコレットは帰っていない。

ふと、近くの席から嬉しそうな声が聞こえた。ネビルだ。

「ばあちゃんからだ！なんだろう——」

バリバリと包を破く音。ネビルの方を見てみれば彼の手の中には拳大の箱があった。

「…『思い出し玉』？もう…ばあちゃん、僕が忘れっぽいこと知ってるから…。何か忘れてると、この玉が教えてくれるんだ。見てて…こういうふうにはぎゅつと握るんだ。もし赤くなったら——あれれ…？」

彼が取り出した、白い煙のようなものが詰まった、大きなビー玉程度の大きさのガラス玉を握ると、それは真つ赤に光り始めた。何かを忘れていたので。

「…何かを忘れてるってことなだけど…」

ネビルは愕然として、何を忘れてるのがさえ忘れてしまったようで必死になってそれを思い出そうとしたが、『偶然』通りかかったドラコが、ネビルの手からそれを引った。くった。

ハリーとロンが弾けるように立ち上がる。

ロンはともかくハリーは、どこかドラコと喧嘩する口実を待っていたような節があったので今回は好都合というわけだった。しかしそう上手くは行かないもので、突然、マクゴナガル先生がサツと現れた。

いつもこういういざこざを見つけるのは彼女だ。

「どうしたんです？」

「先生、マルフォイが僕の『思い出し玉』を取ったんです」

ネビルが言い、マクゴナガル先生は片眉を吊り上げた。流石に先生には何もできない

らしく、ドラコは眉間にシワを寄せ素早くガラス玉をテーブルに置いた。

「見ていただけですよ」

そのままドラコは後ろに従えていたクラブとゴイルを引き連れて蛇のようになりと逃げて行った。

ハリーは彼らの背中を憎々しげに一瞥し、マクゴナガル先生に会釈してからまた席に着いた。その時だった。

甲高い、ふくろう独特の鳴き声が頭上に響き渡った。とうにふくろう便の時間は終わったはずだが、残っていたのがいたのだらうか、と上を見上げれば天井近くの窓から比較的大きなふくろうがこちらに向か々と飛んでくるのが見えた。

ハリーはもしかしたらあのふくろうの啞える手紙は自分宛かも知れないとそわそわしたが、残念ながらそのふくろうが手紙を届けたのは、その隣に座っていた私だった。

「コレット！おかえりなさい、お疲れ様」

そつと彼女の頭を撫で、水を飲めるように手元にあつたゴブレットを差し出しつつ、受け取った手紙を裏返し差し出し人を確認した。シリウスだ。迷わずその場で封を切った。

隣でハリーが羨ましげにそれを見ていたが、私は彼のその様子には気づかなかつた。

白い封筒から取り出した紙は几帳面に折りたたまれ、シリウスの整った文字が並んで

いた。

『親愛なる娘、レジーナ』

まずは、改めて入学おめでとう。そして私と同じグリフィンドールに入ったことを誇りに思う。私は駅のホームで君に「どの寮に入ってもそこが1番だ」というようなことを言つたはずだがやはり、その卒業生としては我が寮が1番だと言いたい。

さて、突然だが、君がきちんとした友だちを作つてくれたとを喜ばねばなるまい。名指しで悪いが、クラップ、ゴイル、マルフォイという生徒がいるはずだが、彼らには関わらないでくれ。闇払いとして、彼らの親が危険であることを警告しておこう。父親としても、危険なこととはして欲しくない。一度話して聞かせたような、私の学生時代のよいうなことはあまりしないでくれよ。もちろん、君の母さんのように当代のイタズラ仕掛人たちを手伝うことも、だよ。

最後に、君の7年間で素晴らしいものになるよう、幸運を祈る。

愛を込めて、シリウス』

さらにその下の余白に続いていた。

『追伸 ハリーとは仲が良いのかい?』

うん、彼らしい。上の文はなんだが『父親』って感じが強くてあまりシリウスっぽくなかったけど、追伸になった途端、彼らしさが滲み出たようだ。

思わず口元が緩んでしまうのを必死に隠し、誤魔化しながらその紙をもう一度丁寧にたたみ直し、ローブに仕舞った。

コレットは手紙を読んでいる間にふくろう小屋に帰ったらしく、私の空の皿に彼女の茶色い羽が一枚落ちていただけだ。

「誰からの?」

ハリーは興味津々、といったようで好奇心を隠し切れずそう尋ねた。

「父よ。少しだけ、心配な気があるのよね」

くすりと笑い、心の中で彼の願いには沿えられないだろうなと苦笑した。

何せ私はこれから、恐らくは学生時代の彼がしたことよりずっと危険なことに首を突っ込もうとしているんだから。

それはお辞儀さんであったり、巨大な蛇の王であったりドラゴンであったり、できるだけは私は全部関わる気である。犠牲者も、ハリーへの負担も、全部減らす為だ。そんな風に危険の骨頂であるような目標を密かにではあるが掲げているのに、シリウスの願いに応えるなんてことは残念ながら、できそうにない。

心の中で少しだけ、彼に謝りながらハリー、ロンと共に朝食の席を立った。

今日のメインとも言える飛行訓練が始まったのは午後三時半だった。

よく晴れ、少し風はあるが絶好の飛行日和だ。青々とした芝生が風を受け、さわさわと波打っていた。飛行訓練の会場となる校庭にはスリザリン生が既に到着し、ずらりと並んだ箒の前に整列していた。

目立つシルバードロンドの髪を靡かせ、ドラコが自慢気に箒を品評しているのが見えた。多少なりとも学はあるらしい。

グリフィンードル生が到着するとすぐに、コーチであるマダム・フーチが現れた。白い髪を短く切り込み、まるで鷹のような鋭い眼光の黄色い目をしている。

「何をボヤボヤとしているんですか」

はきはきと彼女は私たちを叱咤し、箒の隣に立つように言った。

みんなは先生に言われたようにぞろぞろと並んでいく。私は比較的安全そうな箒を選び、隣に立った。ハリーは私の隣の箒を選んだが、それはひどく古い箒で、小枝が何本かとんでもない方向に飛び出していた。

あれで上手く飛ぶのはハリーのような天才でもない限り無理だろう。

「右手を箒の前に突き出して」

スリザリンもグリフィンドールも、互いに何かを言い合うひまもなくいつの間にか訓練は始まっていた。全員がその声に従い右手を箒にかざした。

「そして、『上げれ』と命令しなさい」

途端に校庭はみんなの『上げれ』と言う声で溢れた。

ハリーと私、先生は一発で箒を手にすることができたが他の生徒たちは苦戦していた。特にネビルは、箒が眠っているのではないかと思うほどに微動だにせず、途方に暮れていた。

少し向こうのハーマイオニーの箒はコロコロと地面を転がるだけで一向に上がっては来ないし、ハリーの向こうのロンの箒は3度目くらいの呼び掛けに反応したは良いのだが、元気が良すぎてロンに頭突きをかましていた。

数分後、やつと全員が箒を手にしたことを確認してから（私とハリーはネビルを含め、数人が先生の目を盗み手で箒を持ち上げるのを目撃してしまった）、箒から滑り落ちない乗り方を説明し、次に生徒の周りを歩き回ってそれぞれに箒の正しい持ち方を教えていった。

当然のようにハリーと私、そして事前勉強に命をかけていたハーマイオニーは持ち方をこれでもかというほどに褒めに褒められ、反対にドラコは間違った持ち方を矯正され顔を真っ赤にしていた。これにはハリーもロンも大喜びだった。

直後、同じように間違いを指摘されたロンも赤くなつたがドラコは自分のことに精一杯で気付いていないようだった。

「さあ、私が笛を吹いたら地面を強く蹴ってください。箒がぐらつかないように押さえ、2 mほど浮上して、それから少し前屈みになつてすぐに降りてきなさい。笛を吹いたらですよ——1、2の——」

ところがネビルは極度の緊張や、みんなに後れを取りたくない気持ちから焦り、マダム・フーチの唇が笛に触れる前に思いつきり地面を蹴つてしまった。

「ミスター・ロングボトム！戻つて来なさい！」

どんどん上昇していく彼と彼を乗せた箒は減速する気配はない。

戻つて来いと言つても無理な話だ。彼は今、完全に怖気づいてしまつてゐる。そんな状態の彼の命令を聞くような箒ではないことくらい、誰にでもわかる。ネビルの顔は真つ青だ。

彼はぐんぐんと離れていく地面を見下ろし、声にならない悲鳴を上げた。

原作通りなら彼はこのまま地面に真つ逆さまだ。ここから見る限り、高さは7 mほどあるだろう。落ちれば骨折は免れない。

ローブに仕舞つていた杖に手を伸ばす。それとほぼ同時にネビルはついにバランスを崩し、ぐらりと揺らいだ。数人の女子が甲高い悲鳴を上げ、目を覆う。

「アレスト・モメンタム！」

ネビルに杖を向け、叫んだ。薄い白の閃光が飛び、ネビルに当たったその瞬間、彼の身体はその場で静止した。地上僅か30cmだった。刹那、ネビルに掛かっていた魔法が解け、彼の身体はまた重力に従い地面に落ちたが、ドツという鈍い音と彼の呻き声が聞こえただけだった。彼は動かない。

すぐさまマダム・フーチが彼に駆け寄り、彼の身体を調べた。

「なんとまあ……気絶しているだけのようね……。今の呪文は誰が放つたものですか？」

周りの目が一斉に私へと向く。ハーマイオニーが口を開いた。

「レジーナです」

第10話 シーカー、そしてチエイサー

みんなの視線が私に集まる中、ハーマイオニーが口を開いた。

「レジーナです」

マダム・フーチは目を見開いた。

「信じられない……とても高度な呪文ですよ。それを咄嗟に、しかも正確にこの子に当てるとは……素晴らしい魔法のセンスと運動神経です！グリフィンドールに10点を差し上げます！」

途端にグリフィンドール生が歓喜の声を上げた。10点なんて初めてのことだ。今までは多くても3点だったし、そもそも例の魔法薬学で少なくとも27点も失っていたのだから、尚更だ。

ハリーとロンが顔を見合わせ、そして私を見て満面の笑みを浮かべた。

「すごいね、ジーナ！」

「どうやったんだい!? ネビル、空中で止まったよね!？」

2人が代わる代わるそう言うのと、周りのグリフィンドール生もそうだそうだと激しく

頷いた。

「ありがとう。どうもこうも、その通りよ。空中で停止させただけ。でもほんとはクツシヨン呪文とか簡単なのがあつたんだけど、呪文を思い出せなくて。ネビルには申し訳ないことをしたわ」

うん。30cmとはいえ落ちちゃつたんだから厳密には成功とは言えない。ネビル呻いてたし……骨折はなくても気絶してるしね。

みんながわいわいしているうちに先生はネビルの前に屈みこみ、杖から簡易的な担架を出現させ、彼をその上に乗せた。

「さあ、皆さん。私はこれから大事をとつてこの子を医務室に運びますが、私がいけない間誰も動いてはいけません。箒もそのままにしておくように。さもないと、クイディッチの『ク』の字を言う前にホグワーツから出て行つてもらいます。いいですね？」

皆が返事をするのを見届け、マダム・フーチは担架を携えて城の方に足早に歩いて行つた。担架に乗せられたネビルの顔は血の気がなく、涙でぐちゃぐちゃだった。

2人がもう声の届かないところまで行つた途端、ドラコが大声で笑い始めた。グリフィンドール生が一斉に彼を睨みつける。

「あいつの顔を見たか？あの大間拔けの！」

それでも笑い続ける彼の神経の凶太さと、彼をはやし立てるスリザリン生に、数人の

グリフィン・ドール生がかちんと来ていた。

「やめてよ、マルフォイ」

パーバティが咎めた。しかしそれを見てスリザリンのパンジー・パーキンソンがにやにやと冷やかしを入れる。

「へえ、ロングボトムの肩を持つのか？パーバティ、まさかあなたが、チビデブの泣き虫小僧に気があるだなんて知らなかったわ」

他のスリザリン生が冷やかし、笑い声をあげる。

「あら？あなたこそ人のことを言えるのかしら？パーキンソン。ねえ？その将来有望なM字ハゲの性悪を好いているのは誰かしら？」

見下すようにそう言つてやればパンジーとドラコは揃つて顔を赤らめた。

「ごらんよー！」

苦し紛れにドラコがパツと飛び出して、ネビルが落ちた辺りの草むらから何かを拾い上げた。

「ロングボトムのばあさんが送ってきたバカ玉だ」

ドラコがそれを高々と掲げると、『思い出し玉』は陽を受けてキラキラと輝いた。

ハリーが一步前に進み出た。

「マルフォイ、それをこっちに渡してもらおう」

きつぱりと言ひ切り、ハリーは右手を差し出すがドラコはにやりと意地悪く笑つただけだ。

「それじゃあ、ロングボトムが後で取りに来られるところに置いておくよ。そうだな—

—木の上なんてどうだい？」

「こつちに渡せつたら—！」

ハリーが語尾を強めてもドラコは譲らない。それどころかひらりと箒に乗つて、彼は櫂の梢まで飛び上がり、にやにやと笑つている。

「ここまで取りに来いよ、ポッター—」

事を見守つていたロンとハーマイオニーがほぼ同時に私に助けを求めるような視線を投げかけた。しかし私は肩を竦めるだけで何も言わなかつた。

—そんな私に、ハーマイオニーはいち早く見切りをつけた。

「ダメー・フーチ先生がおっしゃったでしょう、動いちゃいけないって。それにあなた、飛んだことがないはずでしょう！」

確かにその通りだが、そんなことは今のハリーには通用しない。彼はハーマイオニーの声を無視した。

ハリーは強く地面を蹴り、ふわりと飛び上がった。その顔は歓喜に溢れ、きらきらと輝いて見えるほどだ。周りの女子がきゃーきゃーと騒ぎ立て、ロンは感心して歓声を上

げている。

ハリーは天性のクイディッチ選手なんだ。心からそう思う。

彼は誰が教えたということもなく、箒を乗りこなしていた。すぐにドラコと同じ高さ
に辿り着き、向き直る。ドラコはまさかハリーが飛べるとは思っていなかったのか呆然
とその様子を見ていた。

「こつちへ渡せよ。でないど箒から突き落としてやる」

ハリーがそう言うのが微かに聞こえた。それと同時にスリザリン生の群衆の中から
クラップが箒に跨り飛び上がった。ドラコの援護に行くつもりらしい。

私もそれに続いた。クラップは重く、箒はそんなに速くは飛べない。すぐに追いつ
き、そして追い越した。

「あら、どうも。どこへ行くおつもり？」

彼の前に立ちただかり、にっこりと笑って見せる。クラップの顔が強張った。

「退け」

低く唸るように彼は言う。だが退くつもりは微塵もない。

「退かないわ。あなたのご主人のところへ行きたいなら、私を躲して行けばいいじゃな
い」

躲して行かせる気もないのだが。

ふと、下から拍手が湧き上がった。どうやらハリーとドラコの方も盛り上がっているらしい。

クラップは大人しく私の言う通り、私の左側に避けて行こうとしたが私もそちらに逸れ、行く手を阻んだ。

次は右、その次は左、下、上、右……：……一步も通さない。

それを繰り返すうち、また下から悲鳴が上がる。ハリーが急降下しているのが視界の端に映った。

「あら、もう決着が付きそうね。私たちももう終わりにする？」

息が上がり、肩を激しく上下させながら私を睨み付けるクラップに微笑みかけた。

私？私はそのようなことはない。至って普通だ。クラップって体力なさ過ぎない？

クラップも、もうかちんと来たようで、ハリーのように体勢を低くして前屈みになり、まるで矢のように私目掛けて突っ込んで来た。私は箒を掴む手を中心にぐるりと一回転をして見せた。所謂ナマケモノ型グリップロールというやつだ。

下にいる観衆から悲鳴が上がると同時にそれとは違う、鋭い声が飛んだ。

「ハリー・ポッター……！！レジーナ・ブラック！！」

城の方からマクゴナガル先生が走ってくるどころだった。

いつの間にかドラコは地上に足を着け、何もなかったかのように澄ましていた。クラッ

プは急ブレーキに失敗し、前転していた。

先生が走ってくるのを見るなり、ハリーの顔から笑顔と血の気が失せた。

「まさか——こんなことはホグワーツで一度も……」

あまりのショックに言葉も満足に出ない彼女は私とハリーを交互に見ていた。

「……よくもまあ、そんな大それたことを……首の骨を折ったかも知れないのに——」

パーバティが進み出た。

「先生、ハリーとジーナが悪いんじゃないんです」

「お黙りなさい、ミス・パチル」

「でも、マルフォイが……」

「くだいですよ。ミスター・ウィーズリー。ポッター、ブラック、さあ、一緒にいらつしやい」

彼女は大股で城に向かって歩き出し、ハリーは意気消沈してトポトボと彼女のあとに続いた。私もハリーのあとに続いたが、ハリーと私の名前を呼ぶ彼女の横顔が、心なしか少し嬉しそうに見えた。

一方でハリーはこの世の終わりのような顔をしていた。きつと、退学になると思っているのだろう。だがそれはあまりに可哀想なので彼の背に軽く手を添え、元氣付けるよ

うに微笑みかけたが何故か、ハリーはもつと顔色を悪くして俯いた。

どうやら私の思っているようなことは伝わらなかつたらしい。

その間にも先生は大股で廊下を突き進んでいく。私たちは彼女のスピードに遅れずついていくために少し小走りになる必要があつた。

マクゴナガル先生は唐突に教室の前で立ち止まり、ドアを開けてその中に首を突っ込んだ。妖精の呪文の授業で使用している教室だ。

「フリットウィック先生、申し訳ありませんが、少しウッドをお借りできませんか」

ウッドと聞いてハリーは、更に顔色を悪くした。しかし教室から出て来たのはハリーが思っていたような木(ウッド)ではなく、人間の、さらには逞しい男子生徒だった。最近、彼がクイディッチの選手の事で悩んでいたのを知っている私は、彼の目の下にある限の原因が消えることを心の中で喜んだ。

「3人とも、私についていらつしやい」

そう言うなりマクゴナガル先生はまたどンドン廊下を突き進んでいった。ハリーの隣でウッドが珍しいものでも見るようにハリーと私を見ていた。

「お入りなさい」

先生はついに立ち止まり、人気のない教室に私たちを招き入れた。しかしその教室にはすでに先客がいた。ピーブズだ。彼は一人で楽しそうに黒板に下品な言葉を書き

殴っていた。

「出て行きなさい、ピーブズ！」

一喝されたピーブズは悪態をつきながらチョークを投げ、ポンツと消え去った。彼の投げたチョークがゴミ箱に当たった大きな音だけが後に残った。

先生はピーブズの文字を黒板から消し去り、教室のドアを閉めると私たち3人の方に向き直った。

「ポッター、ブラック、こちら、オリバー・ウッドです。ウッド、素晴らしいシーカーとチェイサーを見つけましたよ」

ウッドの口がぼかんと間抜けに開いた。

「ほ、本当ですか？」

「間違いありません」

先生はきつぱりと言い切った。

「この子たちは生まれ付きそうなんです。あんなものを私は初めて見ました。ポッター、初めてなんでしょう？ 箒に乗ったのは」

ハリーは黙って頷いた。彼の顔には血の気が戻りつつある。先生は今度は私に向き直った。

「あなたも、そんなに経験はないはずですね？ ブラック」

「はい。幼い頃おもちゃの箒に乗ったことがあるくらいです」

先生は嬉しそうに頷き、そしてウツドに事を説明し始めた。

「ポッターは今手に持っている玉を、16mもダイビングして掴みました。かすり傷一つ負わずに。チャーリー・ウィーズリーだってそんなことはできませんでしたよ」

ウツドの顔があまりの興奮に上気した。

「ブラックは自身の2倍もあるスリザリンの生徒を空中で完璧に足止めし、さらに彼が突進してくるとナマケモノ型グリップロールを決めて見せました。恐らくは即戦力になりますよ」

「すごい！ポッター、ブラック、君らはクイディッチの試合は見たことあるかい？」

私とハリーは揃って首を横に振った。

「ウツドはクイディッチのグリフィンドル・チームのキャプテンです」

先生が説明してくれ、ハリーはより一層血の気を取り戻した。

「体格もシーカーにびつたりだ。身軽だし……すばしっこいし……チェイサーは体格はあまり関係ないから問題ないし……2人にふさわしい箒を持たせないといけませんね、先生——ニンバス2000とか、クリーンスイープ7号なんかがいいですね」

「私からダンブルドア先生に話してみましよう。一年生の規則を曲げられるかどうか。是が非でも去年より強いチームにしなくては。あの最終試合でスリザリンに

ペしゃんこにされて、私はそれから何週間もセブルス・スネイプの顔をまともに見れませんでしたよ」

マクゴナガル先生は私と、話がとんとん拍子に進み、啞然としているハリーを見た。「ポッター、ブラック、あなた方が厳しい練習を積んでいるという報告を、早く聞きたいものです。さもないと、処罰について考え直すかも知れませんよ」

またハリーの顔から血の気が失せたが、先生はにっこりと微笑んだ。

「ポッター、あなたのお父様がどんなにお喜びになったことか。ブラック、あなたもですよ。あなた方のお父様も素晴らしい選手でした」

第11話 優しさ

「——まさか」

夕食時、私とハリーはロンに、マクゴナガル先生に連れられてグラウンドを離れたあとのことを話した。ロンはてっきり私たちが退学になるものと思っていたようで、口に運びかけたステーキ・キドニーパイを取り落としながら大声を上げた。

「しつ…ダメよ、まだ他の寮のひとには知られちゃいけないだから」

人差し指を立てて静かに、というポーズを取るが、ロンは驚きすぎてそれどころではない。

「シーカーと、チェイサーだって？」

一応声のトーンは落としてくれたがそれでも中々大きな声だ。大広間が騒がしくて助かったと心から思った。

「だけど、一年生は絶対ダメだと……なら、君たちは最年少の寮代表選手だよ。ここ何年以來かな……」

「100年ぶりだって。でも2人も同時に選ばれたのは500年ぶりだってウッドと先生が言ってたよ」

ハリーはいつもの倍速でパイを頬張りながら言った。

「二年生が選ばれるのもそうだけど、同じように2人も選ばれたことがあることも驚きよね——あ、ジョージ！フレッド！」

肩を竦めながらそう言い、ふと大扉の方に目をやると、目立つ赤毛を見つけた。彼らは私たちに気が付くと早速早足にやって来た。

「すごいな」

ジョージが低い声で言った。

「ウッドから聞いたよ。俺たちも選手なんだ——ピーターさ」

「今年のクイディッチ優勝杯は戴きだぜ」

フレッドがジョージの後ろからひょっこり顔を出し、笑って言った。いつもにも増して自信満々だ。

「チャリーがいなくなつてから一度も取つてないんだ。だけど今年からは抜群のチームになりそうだな。ハリー、ジーナ、君らはよっほどすごいんだな。ウッドのやつ、小躍りしてたぜ」

小躍りするウッドについては、何も言うまい。何せ私もその現場を目撃してしまったのだから。

私たちとの話が終わり、フリットウィック先生の授業へと戻っていく彼の足取りは軽

く、というか半分踊り出す寸前のような雰囲気だったのだ。そのあと廊下で見かけた彼は最早完全に踊っていた。

フレッドとジョージもそれを見たのだろう。思わず苦笑いになった。

「じゃあな、俺たちもう行かなきゃならないんだ。リーが学校を抜け出す秘密の抜け道を見つけたって言うんだ」

ジョージはひよい、とロンの皿からパイを一切れつまむ食いしひらひらと手を振った。ロンはそのことに対し文句を垂れたが誰も気に留める者はおらず、私自身もロンには心の中で謝りながらスルーした。

「そうなの、行つてらっしゃい。また私にもその抜け道、教えてね」

「もちろんさ、お姫様」

そう言つてジョージは片膝を着き、まるで騎士が姫にするようなお辞儀をして見せた。

「あら、何？その『お姫様』って」

「ん？そりやもちろん」

フレッドが言葉を継いだ。

「イタズラ界のニューヒロインのことさ。成績優秀、有能で意欲のある君に是非、僕らの後を継いで欲しいからね」

「じゃ、俺たちほんどに行かなきゃ。リーに怒られそうだ」

ジョージはにやりと笑いながら大扉を見やった。そこにはリーが腕組みをして双子を待っているようで、何だか本当に怒られてしまいそうだ。

2人がリーに連れられ消えるやいなや、タイミングを見計らったかのように、見たくもない顔が3つも現れた。

「ああポッター、ブラック、最後の食事かい？ マグルのところへ帰る汽車にはいつ乗るんだい？」

番犬のようにクラップとゴイルを従えたドラコだ。あまりの体格差から、これでは番犬ではなくむしろ、野生のマウンテンゴリラ2頭と捕らえられた宇宙人の方がしっくり来る気がした。

「地上ではやけに元気だね。助けに来てくれる小さなお友達もいるしね」

ハリーが冷ややかに言った。クラップもゴリ……もとい、ゴイルもどう見たって小さくはないが、上座に座る先生方のおかげで彼らは関節をボキボキと鳴らし、ハリーを睨み付けることしかできなかつた。

ゴリラでもちゃんとそういうことの違いはつけられるらしいことに驚いた。

「そんなに言うなら僕一人でいっただって相手になろうじゃないか」

どうしてかドラコはハリーの言葉に少しカチンと来たらしい。何故こうも私の周り

には気の短い人しかいないのか、疑問でしかない。

「ご所望なら今夜だつていい。魔法使いの決闘だ。お互い杖しか使わない——相手に一切触れないんだ。どうしたんだい？魔法使いの決闘なんて聞いたこともないのかい？」

小馬鹿にしたようにドラコは言う。今回は残念ながらドラコの言う通りだ。ハリーがぐつと黙り込み、代わりにロンが口を挟む。

「もちろんあるさ。僕が介添人をする。お前のは誰だい？」

ドラコは何故かちらりと私を見、そしてクラップとゴイルの大きさを比較するように2人を交互に見た。

「クラップだ」

どうやらクラップの方が大きかったらしい。

「時間は真夜中、場所はトロフィー室だ。あそこはいつも鍵が開いてるんでね」

それだけ言うのと彼はふん、と鼻を鳴らし尚も見下した態度のままゴリラを引き連れて去って行った。何か簡単な呪いでも掛けてやりたい気分だったが上座には先生方が勢揃いされているのでどうしようもできず（ゴリラと同類は嫌だが流石に悪い意味で目をつけられるのもつと嫌だ）、半分睨みながらその背中を見送った。

テーブルでは2人が魔法使いの決闘について話し合っていた。

「——死ぬのは、本当の魔法使い同士の決闘の場合だけだよ。僕らはまだ一年生だし、きつと、精々火花をぶつけ合う程度だ。ジーナはたぶん例外だけ——」

聞き捨てならない言葉が聞こえた。例外つて何だ例外つて。それ寂しいよ、結構。

「ちよつと、ロン止めてよ、例外なんて」

「だって本当だろう？君はネビルを空中で止めたじゃないか」

ロンはやはりパイを口に運びながら言った。

「そうだけど……」

「ハリーだってそう思うだろう？」

突然話題を振られたハリーは素できよんとした。

「え？あ、うん。そうだね、ジーナならマルフォイなんて敵じゃないね。それに、もしこの決闘に出るのが僕じゃなくてジーナだったら簡単に終わりそうなのに」

悲壮感漂う彼は既に尻込みしていた。決闘なんて今の今まで存在すら知らなかった上に一番初めに聞いたのが『死人が出ることもある』という話なのだから、当然と言えば当然だ。

「ちよつと、失礼」

私の後ろから偉そうな声が飛んだ。ハーマイオニーだ。

「全く、（（（（））））じゃ落ち着いて食べることもできないんですかね？」

ロンが嫌味つたらしく言った。ハーマイオニーはロンを完全に無視し、ハリーに話しかけた。

「ごめんなさい、話を聞くつもりはなかったんだけど、さっきの話が聞こえちゃったの」「聞くつもりがあつたんじゃないの?——アイタツ」

ロンがそう呟くので取り敢えずテーブルの下で彼の足を踏んづけた。

「夜、校内をうろろろするのは絶対にダメ。もし捕まったらグリフィンドールが何点減点されるか考えてよ。それに、捕まるに決まつてるわ。なんて自分勝手なの?」

腕を組み、立ったままハリー（とロン）を見下ろし彼女は言ったがその言葉は全くと言つていい程2人には響いていなかった。

「大きなお世話だよ」

ハリーが言った。

「バイバイ」

ロンが更にトドメを刺した。



いずれにしても、ハリーの一日は「終わり良ければ全てよし」の一日になるわけもなく。

現在夜中の11時半、私は何故かハーマイオニーと共に灯りの消えた談話室の僅かに火の残った暖炉の前でハリーとロンの見張りをしていた。

正直に言おう。

……どうしてこうなったの……？

確かに私はあの時ハリーにもハーマイオニーにも口を出さなかった。何かしたといえど小言を言うロンをたしなめたくらいだ。もしかしたらその行為が、ハーマイオニーに私は味方であると思わせたのかも知れない。

断じて違う。私は真ん中だ。グレーだ、グレー。ブラックだけど↑

「ねえ、ジーナ。あなたはと思う？」

「2人が本当に起きて来るかどうか？ そうね、私は起きてくると思うわ。と言ってもほぼ確信に近いけど……でもハーマイオニー、こんなことしても意味はあるの？」

ハーマイオニーはぼんやりと幽かな暖炉の火を見つめている。その温かい光に浮かび上がる彼女の横顔はとても悲しそうだ。

「意味があるかなんて、私は知らないわ。止めて欲しいだけよ」

「本当に止めて欲しいなら私は、2人が捕まるなりなんなりして一度痛い目に遭って懲

りるのを待った方が早いと思うけど？」

彼女から目を逸らし、私も火を見つめた。火のちらつく動きというのは、どうしてか目が離せなくなる何かがある。やはり私もそれをぼんやりと眺め、もうすぐ聞こえてくるであろうハリーたちの足音に耳を澄ませた。

「それじゃ遅いわよ。ここは私が知ってる世界じゃないもの。私の世界……マグルの世界よりずっと危険だわ」

不安が滲む。今にも掠れて消えてしまいそうな弱い声だ。

「でも私たちはマグルの持たない力を持つてるわ。その分だけ、なんじゃないの？」

「それでもっ………私たちはまだ一年生で、マグルとそう大して変わらないじゃないかい」

「……そうね」

なんの脈絡もなく、気が付けば目を閉じていた。しかし目を閉じたことによりさらに聴覚が研ぎ澄まされることになり、幽かな物音が耳朵を打った。階段を降りてくる足音だ。

「……ハーマイオニー、来たわ」

私の声と共にハーマイオニーは立ち上がり、ほぼ同時に男子寮へと続く階段の暗闇からハリーとロンが現れた。

第12話 真夜中の決闘

11時半、ほぼ時間通りだった。

燃え残った暖炉の炭が僅かに赤く、談話室で対峙する4人を照らしている。否、正確には3人か。私は別にハリーたちを止めはしない。

「ハリー、まさか本当にあなたがこんなことをするとは思わなかったわ」

ハーマイオニーは今の今まで消していたランプに灯りを付け掲げた。その明りに、先よりもずっと明瞭にしかめっ面の3人が照らし出される。

「また君か！ ベッドに戻れよ！」

ロンはカンカンだ。彼の隣で完全に呆れているハリーと目が合った。

「本当はあなたのお兄さんに言おうと思つたのよ。パーシーに。監督生だから絶対に止めさせるわ」

ハーマイオニーは容赦なく言い放つが、私からすれば、どうしてパーシーに言わなかったのか疑問だ。私なんかよりきつと彼の方がハーマイオニーの意見に賛同してくれるはずなのに彼女はそうしなかった。

本来ならそこに彼女の優しさと言える部分を見出しでもいいはずなのに、完全に頭に

来ているロンと呆れているハリーはそんなことに気付く余地もなく。

「行くう」

ハリーはカンカンのロンを引っ張り、私とハーマイオニーを避けて肖像画の穴に入っていく。

私ならそこで諦めてしまうのに、ハーマイオニーは諦めない。2人の後を追った。

「ねえ！もしあなたたちが捕まったら、グリフィンドールがどうなるか気にならないの？」

点数のことなんて、彼女がハリーたちを心配する口実でしかないのに、どうして彼女はそれを言わないのだろうか。

ハーマイオニーは続けた。しかし彼女の後ろ——つまり私の後ろでもあるのだが——では主のいない肖像画の隠し扉がゆっくりと閉まりつつあった。閉め出し確定だ。

「自分のことばかり気にして！スリザリンが寮杯を獲るなんて私は嫌よ！私とジーナで稼いだ点数を、あなたたちがご破算にするんだわ！」

「ハーマイオニー、私は今のところそんなに点は稼いでないわ。むしろマイナスよ」

思わず口を挟んだがヒートアップしたハーマイオニーは私に聞く耳を持たなかった。

一方でハリーとロンは、ハーマイオニーがあれだけ言ってもまだ、決闘へ向かおうとしている。というか、彼女が止めさせようとすればするほど、彼らは彼女から離れよう

と更に躍起になる気がした。

ついにハーマイオニーが折れた。

「もういいわよ！ちゃんと忠告はしましたからね！明日の家に帰る汽車の中で私が言ったことを思い出すでしょう！あなたたちは本当に——」

本当に、何なのか。

談話室に戻ろうとした彼女が見たのは、空っぽの肖像画。つまりは鍵穴のない鍵のかかった扉。いくら鍵があっても開けられない。

ハーマイオニーはぐるりとハリーたちを振り返り、腰に手を当て2人を睨み付けた。

「さあ、どうしてくれるの？」

とんだ責任転嫁だ。

「ハーマイオニー、こればかりは2人のせいにできないわ。流石に個人の責任よ。それに、もう少し声を抑えないとフィルチに見つかるわ」

「ジーナの言う通りだ、ハーマイオニー。僕たちのせいじゃない。それに、もう行かないよ。遅れちゃうよ」

ハリーが言い、ハーマイオニーに言いがかりをつけられ怒り心頭のロンを引っ張り先を歩き始めた。

「一緒に行くわ」

そう言うハーマイオニーの神経に驚かされた。

「ダメ！来るなよ、僕らの決闘だ」

「ここに突つ立ってフィルチに捕まるのを待つてろって言うの？4人とも見つかったら私、フィルチに本当のことを言うわ。私とジーナはあなたたちを止めようとしたって。あなたたちは私たちの証人になるのよ」

巻き添え。私は別にハリーたちを止めないのに、ハーマイオニーは完全に私を味方に仕立てあげた。ハリーとロンの目が、裏切り者を見る目になった気がした。

「君、相当の神経の持ち主だよ！」

ロンが大声を出した。

全くその通りだと賛同したいところだが声が大きすぎる。

「ロン、声を抑えて。見つかったらやうわ」

「しつ…2人とも静かに。何か聞こえるよ」

ハリーが闇に目を凝らしながら短く言った。確かに、何か音が聞こえる。呼吸音だ。ゆったりとした、まるで眠っているようなそれを聞き、ロンも暗がりを透かし見ながら音の根源を探した。

「ミセス・ノリスか？」

「違うわ、もっと大きい…ルーモス——ああ、ネビル」

杖を取り出し灯りを付けて見れば、そこにはミセス・ノリスではなく、ネビルが床に丸まってぐっすりと眠っていた。

私たちが近付くと彼はビクツと身体を震わせ、目を覚ました。

「ああよかった！見つけてくれて。もう何時間もここにいるんだよ。ベッドに行こうとしたら新しい合言葉を忘れちゃって」

ネビルは消灯時間を過ぎていることを知らないのか普通に喋り始めた。

「もつと小さい声で話せよ、ネビル。合言葉は『豚の鼻』だけど、今は役になんて立たない。太った婦人が消えたんだ」

ロンは苛立ちを隠そうともせずそう言った。慌ててハリーが話題を逸した。

「具合はどう？ネビル」

「大丈夫。レジーナが助けてくれたんだよね、マダム・ポンプリーが教えてくれたよ。ありがとう」

ネビルはふにやりと微笑んだ。なにこの可愛い子。

「どういたしました。大事に至らなくてよかったですわ」

「本当、ジーナがいてよかったね——悪いけどネビル、僕らはこれから行くところがあるんだ。また後でね」

「そんな！置いて行かないで！」

ネビルは慌てて立ち上がった。一瞬、彼が捨てられそうな子犬に見えた。

「ここでもまた一人になるのは嫌だよ、『血みどろ男爵』がもう2度もここを通つたんだよ」
確かにそれは嫌だ。いくらゴーストになって色彩は失われていてもあの銀色の血がベツトリこびりついたゴーストを夜中に見るのは、やはり心臓に悪いだろう。

ロンは腕時計に目をやり、それから物凄い顔でネビルとハーマイオニー、そして私を睨み付けた。

「もし君たちのせいで僕たちが捕まるようなことになったら、クイレルが言つてた『悪霊の呪い』を覚えて君たちにかけるまでは、僕、絶対に君たちを許さない」

今日のロンはいつもより数段物騒だ。でも悪霊の呪いはお勧めしない。あれは結構技量がいる。下手に使つた術者が呑み込まれるなんてよくあることだ。

ハーマイオニーは口を開きかけたがハリーがジェスチャーで黙らせた。

恐らくハーマイオニーも私と同じことを思つてロンに教えようとしたのだろう。優しいんだけどね……うん。

そんなこんなで険悪な雰囲気のまま、ネビルを含めた5人はハリーの目配せによりトロフィー室へと足を向けた。その道中でさえロンとハーマイオニーは口喧嘩を勃発させそうだったので私かハリーが間に入ることでなんとか、ギリギリ水面下に収めていた。

こんな状況で言うべきでないかも知れないが、夜の城は幻想的だった。

高窓から差し込む月の光が、しんと冷たく静まり返る廊下に瑠璃色の縞模様を写し出している。立ち止まれば何の音も聞こえない、完璧な無音が眠る城を満たしていた。

そんな中を5人は素早く移動して、曲がり角が近付くたび、フィルチかミセス・ノリスに鉢合わせはしないかと緊張し、顔を強張らせた。しかし結局、そのどちらに出会うこともなく無事4階の廊下に辿り着き、抜き足差し足でトロフィー室へと足を踏み入れた。

ドラコもクラップも来ていない。当たり前だ。これは罠なのだから。

しかし何も知らないハリーたちはいつ何時ドラコがドアから飛び込んで来て不意打ちを食らわせかねないと、杖を片手に部屋を壁伝いに歩き、最大限の警戒を払っていた。一方で私は呑気に月明かりを受けてきらきらと輝くガラスのショーケースの向こうのたくさんのカツプや盾、像を見ていた。それらは時折私の動きに合わせて、月の光に瞬くように金銀に煌めいた。

探していた。

ジェームズやシリウス、そしてオリヴィエの名前が、必ずどこかにある。それを見たかった。

一際大きな盾に書かれたトム・リドルの名は見つけた。しかし今は関係ない。その場

を離れ、次の棚を見た途端、それは目に飛び込んで来た。

〈寮對抗クイディッチ優勝チーム グリフィン・ドール〉

そこに飾られた写真にジェームズとシリウスを見つけた。仲良く肩を組み、誇らしげに優勝カップを掲げている。

その隣に、もう一つあった。その翌年の物だ。

〈寮對抗クイディッチ優勝チーム レイブンクロー〉

チエイサー オリヴィエ・ローレンス

キャプテンだったのか。私と瓜二つな顔で、7番を背負う彼女はやはり誇らしげにカップを掲げている。そして時折、違う方向を向きあつかんべーをして笑っている。きつとその方向にシリウスたちがいたのだろう。

思わず微笑んだ途端、私の幸せな気分は吹き飛んだ。隣の部屋で物音がしたのだ。あまりの出来事に心臓が飛び上がり、咄嗟にハリーを振り返った。彼は杖を振り上げかけていたが、違う。音を立てたのはドラコではなかった。

「いい子だ。すっかり嗅ぐんだぞ、隅の方に潜んでいるかも知れないからな——」

フィルチだ。ハリーが顔を強張らせ、私たちに向かつてめちやくちやに手招きした。

4人はハリーのジェスチャーに従い彼について部屋を後にした。本当に間一髪だった。

「どこかこの辺にいろぞ——隠れているに違いない」

フィルチのくぐもった嗄れ声が廊下に響いた。

「こつちだよー！」

ハリーが囁いて、鎧がたくさんある長い廊下に私たちを導いた。フィルチがどんどん近付いてくる。ネビルは恐怖のあまり混乱し、ついに突然悲鳴を上げ、闇雲に走り出した。

「ネビルー！」

しかし彼は持ち前のドジで蹴つまずき、前にいたロンの腰に抱きついたせいで二人揃ってまともに鎧に突っ込んだ。

ガツシャーン！

凄まじい音が廊下に響き渡り木霊した。城中の人という人を全て叩き起こしてまいそんな音だった。心臓が、誰かに握られたようにギュツと縮こまった。

「逃げろー！！」

ハリーが叫ぶ。ロンもネビルを怒鳴ることも忘れて疾走した。もう誰も、振り向きさえしなかった。

フィルチがリウマチで助かったと、心からそう思った。もしそうでなければひとり残らず捕まっていただろう。

ハリーに続き、4人は走り続けた。

全速力でドアを引つpegし次から次へと矢継ぎ早に廊下を駆け抜け、今ここがどこなのか、どこへ向かっているのかさえ誰もわからないまま、タペストリー裏の抜け道を抜けて『妖精の魔法』教室の前の廊下に辿り着いた。

心臓は飛び跳ね、耳元でばくばくと鳴り響いていた。もう冬だというのに額に浮く汗を拭った。

「ファイ——フィルチは撒いたと——思うよ」

冷たい壁に寄りかかり、ハリーは汗を拭いながら息を弾ませて言った。ネビルは身体を2つ折にして咳き込んでいた。

ロンも同じようなものだ。

「あの人は——リウマチよ、上手く、走れないわ」

喉が灼けつくように痛かった。突然全速力で走ったせいで全身が悲鳴を上げている。

「だから——言ったじゃない！」

ハーマイオニーは喘ぎ喘ぎ言った。

「塔に戻らなくちゃ——できるだけ早く」

ロンはいつになく冷静だった。

「マルフォイに嵌められたのよ！」

息を整えてからハーマイオニーが言った。

「ハリー、あなたもわかっているんでしよう？はじめから来る気なんてなかったんだわ——あいつが告げ口したのよ。だからフィルチは誰かがトロフィー室に来ることを知ってたのよ」

ハリーの顔が悔しげに歪められた。認めたくなかったのだろう。

「行こう」

ハーマイオニーには何も言わず、ハリーはそう言つて塔に戻ろうと廊下を進み始めたが、運が悪かった。ほんの10歩も歩かないうちに、教室のドアがガチャガチャと鳴り、中から誰かが飛び出して来た。ピーブズだ。教室でイタズラをした帰りらしかった。

彼は私たちを見るなり歓声を上げた。咄嗟に彼に杖を向けた。

「リングロック！お願いだから止めて！フィルチが——」

フィルチが来る、そう言おうとしたのに、もう遅かった。廊下の向こうで大きな音がした。

落ち武者のようなフィルチが髪を振り乱し痛む身体に鞭打ち全力で走ってくる。

「逃げろ！」

またハリーが叫ぶ。

2度目の全力疾走で、5人はまた命からがら逃げ出した。

ここは4階右側の廊下。突き当りで鍵のかかった部屋にぶち当たった。勢いの付き過ぎたハリーが思いつき額をぶつけた。

「いッ…!?!」

「もうダメだ!!」

絶望的にロンが呻いた。

「おしまいだ!一環の終わりだ!」

バタバタと足音が近づいて来る。ハーマイオニーとネビルの顔がどんどん青ざめていった。

「ハリー、ロン、ちょっと退いて!」

本来ならここはハーマイオニーの出番のはずだがどうしてか彼女は思考停止状態に陥っていた。仕方なく杖を取り出し鍵のかかったドアに向ける。

「アロホモラ!」

カチツと軽い音と共に鍵が開き、ハリーたちの重みでドアがパツと開いた。そのまま5人は折り重なって中に雪崩れ込み、急いでドアを閉めた。

私以外の皆はドアにぴったりと耳を付けて、神経を研ぎ澄ました。

「どつちに行つた?早く言え、ピーブズ」

フィルチの声だ。

その後にはピーブズのもごもごと言う声が聞こえるが、舌縛りがまだ効いているのではつきりとした言葉にはならない。

「はつきり言え！連中はどっちに行つた?！」

イライラした声が廊下に響いた。

あの呪文はどうしてか私を使うと効力が暫く続く。もう大丈夫だろう。

何も言わない（言えない）ピーブズについて我慢できなくなつたフィルチは怒り狂い大声で悪態をつき、ピーブズは解けない舌と格闘しながらポンツと消えた。

その間私はずっと、その声を聞きながら杖を手にしたまま背後に意識を向けていた。

そしてフィルチが私たちを探してどこかに消えると、4人は安堵からずると座り込んだ。

「フィルチはこのドアには鍵がかかつてると思つてる。もう大丈夫——」

何が大丈夫なものか。

私に大丈夫と言おうとして振り返つたハリーが見たのは巨大な3頭犬。しかも敵意を剥き出しにして唸り、その口からは大量の涎が網のようにだらりと垂れている。大丈夫なわけがない。

まだ私たちの命があつたのは、あまりに唐突過ぎて3頭犬たちが不意を突かれて戸惑つたからだ。

しかしもうその戸惑いもない。轟く雷のような唸り声がそれを証明していた。咄嗟に私が『キラキラ星』を口ずさみ、ハリーはドアノブを弄った。歌を聞いた途端、3頭犬の臉がとろんと下がり始めたことに気付いたのはハーマイオニーだけだった。

ドアが開いたその瞬間、また5人は雪崩るように飛び出して走り出した。ハリーが犬から離れたい一心でドアを、乱暴にはあるが閉めてくれたのは有り難かった。

走って、走って、走り続けてやつと8階の太った婦人の肖像画の前に辿り着いた時にはもう、5人は息も絶え絶えだった。

「まあ、一体どこに行つてたの？」

「何でもないよ——豚の鼻」

上着は肩からずり落ちそうだし、顔は真っ赤で汗だく、息もまともにできていなかったがそう言うほかないだろう。

婦人は合言葉を聞くと言及することなく扉を開け、通してくれた。

やつと思いで入り口の穴を這い上がり、談話室のソファに沈み込む頃には全身が細かく震え、皆生まれたてのシカのようなだった。あまりの疲労と緊張から、口が聞けるようになるのに暫くかかった。

ネビルに関してはまだ二度と口が利けないのではとさえ思えた。

「あ——あんな怪物を城の中に閉じ込めておくなんて、先生は何を考えてるんだ!? それ

にジーナ、なんで君はあんな状況で歌なんか歌おうと思つたんだい?! 気でも狂つたかと思つたよ!

やつとロンが口を開くと、ハーマイオニーは不機嫌さを取り戻しロンに突つかつた。

「あなた、どこに目をつけてるの? あの犬が何の上に乗つてたか、見なかつた? それにジーナが歌を歌つたのはちゃんと理由があるわ」

「床の上じゃない?」

ハリーが一応意見を述べたが、あまりにも馬鹿馬鹿しかつた。

「僕、足なんか見てなかつた。頭が3つもあるんだ、それだけで精一杯だよ」

正論だが、ハーマイオニーはカチンと来たようだ。

「違う。床じゃない。仕掛け扉の上に立つてたのよ。何かを守つてるに違いないわ。歌も、見なかつたの? ジーナが歌つた途端、犬は眠り始めたの」

「へえ、そりやすごいね」

ロンはぐるりと目を回しながら癩に障る言い方をした。

「あなたたち、さぞご満足でしょうね。もしかしたらみんな殺されてたかも知れないのよ——もつと悪いことに退学になつたかも知れないのよ」

その瞬間、今のハーマイオニーの価値観にはついて行けないと確信した。

「では、みなさん、お差し支えなければ、私たちは休ませていただくわ」

そう言つてハーマイオニーは私の腕をむんずと掴んで引つ張り起こし、半分引き摺るように女子寮に続く階段に引つ張つて行つた。その手には力が籠もり、指が食い込んでいる。刺すような痛みが走つた。

「は、離して、ハーマイオニー！痛い！」

ハーマイオニーは離してはくれなかつた。泣いていた。

階段を上る足取りはしつかりしているけれど、その頬には涙が伝つている。思わず口を閉じた。

誰も、何も言わなかつた。

階段上りきると沈黙を守つたまま、ハーマイオニーは部屋のドアを開け、中に入つてからそつと手を離し、そこでやつと小さく「ごめんなさい」と呟くように言つた。

「わ、悪気はなかつたの。ごめんなさい」

「いいのよ、ハーマイオニー。気にしないわ——さあ、さつさと寝ましょう」

まだ掴まれていた部分は痛むけれどそれは表に出さず微笑んだ。ハーマイオニーも悲しげに微笑み、頷いた。

「ええ、そうね…おやすみなさい」

ハーマイオニーはベッドに潜り込むと、相当疲れたのだろう、すぐに深い寝息を立て

始めた。

しかし私はすぐには眠ることはできずにぼんやりと、フラッフィーの『癖』を知っていた言い訳を考えていた。そんな時だ。

私のベッドに一番近い窓に大きな影がうつった。長い包みを持ったワシミミズク——コレットだ。

ベッドから飛び起き、窓を開け放した。

「こんな時間に誰から……？」

コレットはスィーっと滑るように部屋に入り、私のベッドにそれを落とす。やはり私宛てだ。

茶色の包みはやけに大きく、ただの届け物ではないことだけは確かだった。外側に貼り付けられたメモに書かれた文字は、よく見覚えのある文字だった。

『レジーナへ』

素晴らしい報せを受けて私は感動している。君なら選ばれると思っていたが、まさか一年生で選ばれるとは。でも、こうなった経緯もちゃんと聞いたよ。そういうところが私に似てしまったのは少し不安だが、嬉しいことに変わりはないだろう。

これは君へのプレゼントだ。大切にしなさい。皆の前では開けないように。

『シリウス』

——まさか。

慌てて包みを解いて見れば、それは新品のニンバス20000だった。スラリとしたマホガニーの柄には艶があり、先端近くには細く流れるような金の飾り文字で『ニンバス20000』と書かれている。穂には長く真っ直ぐな小枝がすつきりと纏められ、美しい流線型を描いていた。

思わず溜息を吐いた。

まさかシリウスがこんなにもいい箸を買ってくれるとは、思いもしなかった。そもそも、クイデイツチの選手に選ばれたことも、一連の決闘騒ぎで綺麗さっぱり吹き飛んでしまっていたのに。

箸を仕舞うため、もう一度綺麗に包み直す間もずっと、柄の金文字が頭から離れなかった。

そつとその包みをベッドの下に隠し、代わりに文机に向かってシリウス宛ての手紙を書いたために羽ペンの先をインクに浸けた。

第13話 例のあの日

翌日、案の定私は完全な寝不足だった。

頭はすつきりしないし、身体は重い。だから夜更しは嫌いなのだ。

寝不足であることは他の4人も同じだったが、ハリーとロンはなんだか、とても上機嫌であつた！目がキラキラしていた。きつと冒険に目覚めてしまったのだろう。

そんな様子を見たハーマイオニーは只でさえ寝不足で不機嫌だったのに更に不機嫌になり、私とさえ口を利かなくなつた。折角、シリウスからの贈り物であるニンバス2000で気分がよかつたのに、ハーマイオニーに無視されることで少し悲しくなつた。

「——ジーナはグリーンゴッツの包みのこと、どう思う？」

朝食の席で、ハリーとロンはハーマイオニーがいないことをいい事に昨晚の事から色々想像を膨らませていた。

2人の予想が惜しいところまで来ているということが少し歯痒いが、真相を教えるわけにも行かず、ただ黙つてその会話を聞いていたので、2人は私の意見が欲しくなつたらしい。

「どう……ね。それが何であれ、ホグワーツに移されたのなら恐らくは何かから守るため

ね。きっと、危険なものではないわ。生徒が居るもの。とても大切な、誰の手に渡つてもいけないようなものかもね」

私の推測（笑）を聞き、2人はますます興奮し、予想に花を咲かせた。

それから特に何事もなく、包みに関しての進展もなまま1週間が経過したある朝、いつものふくろう便の時間に、とんでもないものが運ばれてきた。

ハリーの箒だ。

3羽のコノハズクが掴んでいる細長い茶色の包みはすぐに広間の生徒の気を引いた。ハリー自身も例外ではなかったが、その包みが自分の目の前にそつと落とされると、目を見開いて私とロンを見た。

そしてさらにその包みの上に、もう1羽が手紙を落とした。

ハリーはまずその手紙を開けた。そのまま手紙を読み進めるうち、彼の顔は歓喜に溢れていった。喜びを隠し切れないまま、ハリーはロンに手紙を渡した。

「ニンバス2000だつて!?!僕、触ったことさえないよ!」

ロンは羨ましそうに小声で呻った。

「僕もだよ、ダイアゴン横丁でちよつと見たくらいだ——————そういえばジーナはもう箒はあるの?」

ハリーは私も同じように選ばれていたことを思い出したらしく、残りの朝食を掻き込みながら言った。

「もう1週間前に届いたのよ。言おうかと思つたけど、包みの推理があんまり楽しそうだったから、水をさすのも、ね」

「そんな！言つてくれればよかつたのに！君のは何型なの？」

「同じよ、ニンバス20000」

2人はまた目を見開いた。

「本当?!」

ロンの素つ頓狂な声に思わずくすくすと笑つた。

「本当よ、素晴らしい筈だわ」

「うわー、益々今すぐ開けたくなつてきちゃつた。早く寮に戻つて1時間目が始まる前に一度見てみようよ」

ハリーは微笑み、大きな包みを抱えて立ち上がつて急いで大広間を出たが玄関ホールの中で、ドラコたちが寮に上がる階段の前に立ち塞がっているが見え、立ち止まつた。

ドラコはつかつかとハリーに歩み寄りその包みを引つたくり中身を確かめるように触つた。あまりに乱暴な触り方だ。

「今すぐ、それをハリーに返しなさい。じゃないと呪いをかけるわよ」

杖を取り出しながらそう脅すがドラコはにやりと意地悪く笑い、包みを乱暴にハリーに投げ返した。

「箒だ」

勝ち誇った顔でそう言った。

「今度こそおしまいだな、ポッター。1年生は箒を持ってない」

「先生が規則を曲げたかも知れないわよ。ドラコ、余計なこととはしないことね。いつか痛い目を見るわよ」

階段の上から小さなフリットウィック先生が下りてくるのが見え、杖をしまいながらそう言った。

ドラコが腰巾着と共に応戦しようとしたとき、彼の肘あたりにフリットウィック先生がひよっこりと顔を出した。

「君たち、喧嘩じゃないだろうね？」

「先生、ポッターのところに箒が送られて来たんですよ」

ドラコは早速言いつけ、にやりと嗤ったが先生は怒ることも驚くこともなく、ハリーに笑いかけた

「いやー、そうらしいね。マクゴナガル先生が特別措置について話してくれたよ。ところでポッター、箒は何型かね？」

「最新型のニンバス2000です、先生」

ドラコの引き攣つた顔を尻目に、ハリーは笑顔で答えた。

「実は、マルフォイのおかげで買っていたきました」

そんな彼の晴々とした様子に、ドラコは怒りを剥き出しにしてドカドカと立ち去っていった。

ハリーと共に私も先生に、おめでとうと祝いの言葉を貰い、階段を上りきる頃には口ンもハリーも、笑いを堪えるのに必死だった。目には涙さえ浮かんでいる。

玄関ホールから見えないところに来た途端、2人は思う存分笑った。

「だって本当だもの。もしマルフォイがネビルの『思い出し玉』を盗っていなかったら、僕はチームに入れなかったし——」

「それじゃ、校則を破つてご褒美を貰ったと思ってるのね」

後ろから、ハーマイオニーの怒った声が飛んだ。

ハリーが抱えている包みを睨みつけながら、彼女は階段を一段一段踏み鳴らし上ってくる。

そんな彼女を見てハリーは意地悪く言った。

「あれっ？僕たちとは口を利かないんじゃないやなかつたの？」

ロンもそれに続く。

「そうだよ、今更変えないでよ。僕らにとつちやありがたいことなんだから」

「2人とも、言い過ぎよ!」

窘めても2人はニヤニヤと笑ったまま。なんだかイヤな奴だ。

ハーマイオニーはふん、と鼻を鳴らしそっぽを向いて行ってしまった。咄嗟に後を追おうとしたがハリーに腕を掴まれて、ハーマイオニーは曲がり角の向こうに消えてしまった。

「僕らより、知ったかぶりの彼女の方に行くのかい?」

ロンが言った。

箒や今夜のクイディッチの練習、ハーマイオニーのこと、それぞれに授業に集中できないまま、1日は飛ぶように過ぎ去って、気が付けば時計の針はもう夕方の6時を指していた。

談話室で宿題をやる手を止め、ハリーに目配せしてから女子寮の部屋に急いで戻り、ベッドの下に隠したままだったニンバス2000を手に、もう一度談話室へと戻った。

「わお、もしかしてそれが」

「噂のニンバス20000かい?」

談話室には、いつの間にか帰って来ていたらしい双子が何やら頭を付きあわせて議論していた。彼らは私の手に取まっているそれを見ると目を輝かせた。

「ええ、今からハリーとクイディッチの説明を聞いて、少し練習するの」

「へえ!そりやいいね!」

双子がシンクロして見せ、それが引き金になって他のグリフィンドール生たちがニンバス20000に気が付きわらわらと集まって来る。

「俺たちも行きたいとこだけど生憎今からは予定があるんだ」

ジョージが悔しそうに言った。練習に参加したかったらしい。

「仕方ないさ。今日は諦めて来週からの練習、楽しみにするしかない。じゃ、僕らもう行くよ、また後でな!——おい、道を開けるよ、我らが姫が練習に行けないじゃないか」
道を開けてくれながらも2人はふざけるのを忘れなかった。

「あ、ジーナ!待って!僕も一緒に行くよ!」

背後、男子寮の方からハリーの声があった。ハリーもニンバス20000だと知ると、グリフィンドール塔は更にざわめき、彼に道を開けた。

フレッドが指笛を吹き、ジョージが冷やかした。

「もう、止めてよ2人も、そんなじゃないわ」

笑いながら軽くないなし、ハリーと共に談話室を出た。

「——なんだか、まるで英雄みたいだね、僕ら」

はにかみながらハリーは言った。

「そうね、期待の新星だもの。頑張らなきゃね」

その言葉でハリーは緊張からか、少し気分が下がってしまったようだ。

「うん、そうだね——ねえ、ジーナはクイディッチのこと、何か知ってる？」

ハリーは余程不安らしい。箒を大切に抱えつつも、憂鬱そうな浮かぬ顔をしていた。

皆もうそれぞれの寮に戻っているのか、城の中ははしんとしていた。決闘の夜を彷彿とさせるほどだ。

「ええ、もちろん。ルールなら周りの人から少し聞いてるわ」

「うわー…僕きつと、覚えることがいっぱいだよ、覚えられなかったらどうしよう」

ハリーは思いつき弱気になっていた。

「大丈夫よ、すぐ覚えられるわ。簡単なもの」

夕暮れの薄明かりの中、ハリーと私は城を出てクイディッチ競技場へと急いだ。スタジアムに入るのは、2人とも初めてだった。柔らかな芝生が少し風に揺れていた。

競技場の周りには、それぞれの寮の応援席が高々とせり上げられていて、観客が高い

ところから観戦できるようになっている。

ハリーは応援席やゴールを見上げ、感嘆の声を漏らした。

「すごい…」

「なんだか、思ってたよりずっと壮大ね。…ねえ、ウッドが来るまでに肩慣らししてかない？折角同じ箒で性能も同じなんだし、鬼ごっこでもしましよようよ」

そう言つて、有無も言わず駆け出しながら箒に飛び乗った。やはり、この箒は凄い。ほんの少し動かすだけで私の思い通りに動いた。ハリーは明るく頷き、笑顔で私に続く。

「じゃあ私が鬼ね！範囲は競技場内!!行くわよ、よーい…スタートー!」

ハリーはビュンつと飛び出し、競技場の端つこに向つて行く。その様子を見ながら心の中で10秒数え、その背を追った。

彼は本当に自由に動き回った。まるで自分の身体の一部のように箒を操るのだ。右へ左へ、急降下してみたり反対に急上昇してみたり。しかし同じ箒。私も負けてはいなかった。開始2分ほどで私の手はハリーの背を捉えた。

「タッチ！交代ね！10秒数えたらよ!」

「うわ！もう捕まっちゃった!」

ハリーの悔しそうな声を聞きながら、私は空高く舞い上がった。地面が遥か下に揺ら

めいている。

10秒後、ハリーは私目掛けて飛んできた。

もうすぐ手が届く——その刹那、私はぐらりと傾いて、まるで落ちるように急降下を始めた。ハリーも後に続く。

地面が迫る。風が唸りマントがバタバタと音を立てた。

衝突の寸前で全身全霊の力を込めて箒の柄を引き上げる。爪先がグラウンドの芝を掠った。

後ろから悲鳴やうめき声は聞こえない。ハリーは早々に離脱したのかと後ろを振り返って見ればなんと、彼は完璧にくっついて来ていた。

「あら、やっぱりハリーってすごいわね！」

地上20mほどまで上昇して体勢を立て直し、ハリーと向い合って微笑んだ。互いがジリジリと牽制し合っていた。

「ジーナもだろ？ほんとに落ちたかと思ったよ！」

ハリーは興奮していて、目を輝かせて言った。

「おーい！ポッター！ブラック！降りて来い！」

遙か眼下、グラウンドの真ん中辺りでウッドがこちらに手を振っていた。彼の隣にはアンジェリーナの姿があった。

「もう終わりみたいね。今回は私の勝ちでいいかしら？」

「いや、引き分けだよ」

ハリーはいつの間にか隣にいて、私の肩をタッチした。

「あら、気付かなかったわ。これじゃ引き分けね」

2人でくすくすと笑いながら、手招きするウツドの前にふわりと降り立った。

「お見事」

ウツドはハリーに負けず劣らず目を輝かせていた。

「マクゴナガル先生の仰っていた意味がわかったよ……君たちにはまさに生まれつきの才能がある。今夜はルールを教えよう。それから週3回のチーム練習に参加だ」

そう言うと彼は足元に置いていた大きな箱を開け、思い出したように言った。

「ところでブラック、君はルールは把握しているのかい？」

「ええ」

「なら話が早い。君は向こうでアンジェリーナと一緒にパス練だ」

ウツドはサッカーボールほどの大きさの赤い革製のボールを取り出し、ハリーに軽く説明してから私にそれを投げて寄越した。

「さて、ポッターは僕とルールの確認だ」

彼は嬉々としてハリーに続きを説明し始めた。彼にとって、クイディッチはそのルー

ルさえも嗜好のものらしい。

「さあ、ブラック、あなたには期待してるのよ」

アンジェリーナにボールを渡すと彼女は微笑み、箒に飛び乗って高く舞い上がった。私もそれに続き、15mほどの高さに来た時、彼女は私に向き直った。

「——じゃあ、軽くパスするところから始めるわ。私が投げるからキャッチして、投げ返してみよ——行くよ」

アンジェリーナの声に頷くと、彼女はふんわりと易しい山なりのパスを寄越した。難しくそれをキャッチし、彼女に投げ返す。

「いいよ。バランスもばっちりみたいね」

そう言いながら彼女は今度は、先程よりほんの少しだけ低く速く投げたがそれも難しくキャッチし、強めに投げ返す。

途端に彼女は笑顔になった。

そのまま褒められたりアドバイスを貰ったり、アンジェリーナとパスを続けていると、何度目かのボールをキャッチした瞬間、突然視界の端に迫る何かが見えた。

「危な——」

ハリーが打ったブラッジャーだ。ボールは真つ直ぐに私のこめかみを狙ってくる。咄嗟に箒を掴んでいる左手を支点にぐるりと回転し、その鉄塊を避けた。

下から歓声が沸いた。ウッドだ。

「それが噂のナマケモノ型グリップロールかい?!」

彼は声を張り上げ、Uターンして戻ってきたブラッジャーを地面に抑え込みながら笑い声を上げた。端から見れば狂気ではない。アンジェリーナは怒鳴った。

「ウッド!! ブラッジャーを出すなら前もって言つて言つたじゃない! この子じゃなかったら確実に当たつてたわよ!!」

ぶち切れ寸前だった。

ブラッジャーを打った本人であるハリーは真つ青だった。本当に当たると思つたらしい。

アンジェリーナはカンカンに怒つてウッドに抗議に行つたので私も地上に降りてハリーの様子を見に行つた。

「ハリー、大丈夫?」

ハリーは茫然として、まだバットを持ったままだ。彼はもしかしたら、箒に乗つていと幾分か気が大きくなるのかもしれない。さつき私が落ちるフリをしたときはこんなにも青くはならなかった。寧ろあまりのことに興奮していた程なのに、だ。

隣ではアンジェリーナがウッドに怒鳴り散らしていた。何も知らないのにバットを持たせるなどか、出す前に一言言えとか、呑気過ぎるだとか、結構色々言っている。

「大丈夫——大丈夫だよ、君こそ大丈夫？ごめんね、咄嗟で……」

「いいのよ、怪我もないんだから。それより、ほんとに大丈夫？真つ青よ？」

思わず生死を疑ってしまいそうなほどに、彼は真つ青だ。自分の咄嗟の判断で私が死にかけてのだから当たり前だろう。

アンジェリーナがウッドを怒鳴るのを止め、戻ってきた。

「ごめんね、ポッター。顔が青いけど、大丈夫？」

ハリーはまだ血の気はないが、こくりと頷いた。

「そう…無理はしないでね。さあ、練習を続けましょう」

「ええ」

クイディッチのボールが入った箱のところでは、怒られたウッドが少ししよぼくれている。

翌週から、毎日たっぷり宿題がある上にクイディッチの練習が週に3回も入りとても

忙しくなった。宿題の方はわからないなんてことはないので問題なかったが、ハリーはそうはいかなかった。

ほぼ毎日遅くまで談話室でロンと共に宿題を進め、私には質問の嵐だった。早くハイマイオニーに来てほしいと思いつつも、おかげで学校生活は充実し、気が付けば入学から2ヶ月が経とうとしていた。

そう、あの日がやってくるのだ。

私にとっては地獄でしかないあの日が。

第14話 ハロウィーン

その日、私はパンプキンパイを焼く、むせ返るような甘い匂いで目を覚ました。寝起きは最悪だった。

朝食も最悪だ。普段通りの朝食のメニューに加え、テーブルには大きなパンプキンパイ、頭上には伝統的な、カブをくり抜いて作られたジャック・オー・ランタンと、如何にもそれらしいかぼちやのそれがぶかぶかと浮かんでいた。

そう、ハロウィーンだ。

人生でこれ以上ないほどに不愉快なイベント。食卓がパンプキンで溢れかえる日だ。私のあまりの不機嫌さに、ロンもハリーも、さらには普段なら「空気？何それオイシイの？」状態のシェーマスでさえ、私にはハロウィーン及び、かぼちやの話題は振らなかつた。

そんな不機嫌な昼食前、午前最後の授業、『妖精の魔法』の授業中にそれは始まった。フリットウィック先生が実習をすると言い出したのだ。否、言い出すだけならよかつた。2人ずつでペアにならせたのだ。

即ち、ハーマイオニーとロンのペアである。

後ろの席に座っていた2人は酷かった。私は早々に羽を飛ばし、グリフィンドールに3点もらった上でネビルに正しい杖の振り方と発音、イメージを教えていたので余計に2人の声が聞こえたのだ。

「ウインガディアム レヴィオサー!!」

色々と間違っているロンが苛々と杖を振り回している。途端にハーマイオニーの尖った声が飛んだ。

「ロン、杖の振り方が乱暴過ぎるわ。こうよ、ヒューンヒョイ。今までの授業でずっとやって来たでしょう?それに、そもそも呪文の発音が間違ってるわ。ウイン・ガー・ディアム レヴィ・オーサよ。『ガー』の音を長く伸ばすのと『オーサ』の発音をはっきりさせなくちゃ」

言っていることはともかく、どうにも、言い方が言い方だ。気が短い上にハーマイオニーと組まれて気が立っているロンならすぐにカチンと来るだろう。

一方で私の指示を聞いて少し自信を付けたネビルが杖を振ると、机の上の白い羽は僅かにぴくりと動いたが、依然机に張り付いたままだった。何か杖の振り方や呪文の発音が間違っているというわけではなかったが、ネビルには自信が足りない。不安過ぎてそれが呪文の効力にも表れていた。

「あとほんの少しね、ネビル。もっと自信を持つて。あなたならできるわ」

にっこりと微笑み彼を励ます間にも、後ろのペアからは怒声が飛んでいた。

「そんなによくご存知なら、君がやってみるよ!」

続いてハーマイオニーの自慢気で自信たっぷりな声が聞こえた。

「ウインガーディアム レヴィオーサー!」

私の位置からは見えないが、恐らく白い羽は宙に浮いたのだろう。みんなの席の前で出来栄えを見ていた先生が拍手をして叫んだ。

「おーッ、よく出来ました! 皆さん、よく見てください! ミス・ブラックに続きミス・グレンジャーもやりました!」

その後、他に誰も羽を浮かせられた者はおらず、それがさらにロンの機嫌を悪化させた。

ネビルは:うん、動くんだけどね。

どうも自信が足りないというか、浮かせてやる! って気が足りない。どうか浮いてくださいお願いしますって感じがしてならないのだ。

昼食後の、次の授業に向かう人で溢れかえった廊下の人混みを掻き分け進みながら、

ロンが酷い悪態を吐いた。

「——だから、ジーナ以外の誰もあいつには我慢できないんだ。まったく悪夢みたいなヤツさ」

「ロンー！」

窘めようと名前を呼んだその瞬間、誰かが私の肩にぶつかり、急いで追い越して行つた。ふわふわの栗色の髪が目映る。ハーマイオニーだ。追い越して行つた横顔には涙が見えた。最近、彼女の泣き顔ばかり見ている気がする。

「今の、聞こえたみたい」

ハリーが言った。

「それがどうした?」

ロンが言った。いい気味だとても思っているのか、その声には嘲りの色が浮かんでいた。あまりの身勝手さについてカチンと来た。

「それがどうした、ですって? 今まであなたたちで解決するべきと思つて見てたけど、もう限界! ロン、あなたつて最低よ! 彼女の気持ちも考えてあげてられないの?」

「そんなの、僕の知つたこっちゃないよ。第一、彼女だつて君以外に誰も友だちがいなことくらい気がついてるだろう?」

原作のときからこの時のロンは嫌なやつだと思つていたが、いざ目の前にするとこ

まで腹が立つとは。

ロンの前に立ちはだかり、睨みつけた。最早怒りを通り越して呆れしかなかった。

「本当、最低な人。呆れたわ。あなたなんて下衆にもなれないわ」

そう吐き捨て、くると踵を返してハーマイオニーを追いかけた。

後ろでロンが何かを呟く声が聞こえた気がしたが振り返らず、彼女の栗色の髪を探した。だが見つからない。こんなに人がいるのだ。見つかる方が奇跡だ。仕方なく廊下の隅に隠れ、授業が始まって人気なくなるのを待った。

チャイムが鳴り皆が教室に収まった頃、またハーマイオニーを探すため廊下を歩き始めた。ロンもハリーも、居なくなっていた。

時折授業中の教室の前を通れば、中からは授業を進める声が聞こえた。

どれだけ探してもハーマイオニーの声も気配も、彼女を見つける手掛かりすらどこにもない。ダメ元で覗いてみた女子トイレにも、彼女はいなかった。

どうしたものか……。

ふと立ち止まり頭を抱えていると、前触れ無く、女子寮が頭に浮かんだ。

今はまだ授業中。授業はまだあと2時間はあるから、少なくとも3時間近くは誰も寮には戻らない。きつとそうだ。彼女は寮に戻ったのだ。

すぐさま寮に戻る階段を駆け上がり、廊下を走り抜けて抜け道を通って肖像画を目指

した。

「豚の鼻！」

「まあ！まだ授業中よ、どうしたの？」

到着するなり息も整えず合言葉を言うと婦人は片眉を吊り上げた。

「どうもしないわ！いいから、豚の鼻！」

婦人は明らかに腑に落ちないようだが渋々、扉を開けてくれた。中に入るなり、またダツシユだ。階段を駆け上がり、女子寮の手前から3番目の扉を乱暴に開け放った。

ハーマイオニーはいた。

自分のベッドで、教科書さえ放り出して彼女は両目を赤く泣き腫らしていた。

「ジ、ジーナ…!？」

彼女は私を見るとシーツを引き寄せて、顔を隠した。痛々しいその痕はくつきりと残っている。

「ま、まだ授業中のはずじゃ……」

「授業なんて知らないわ」

「でも……」

弱々しい声。深く考えずに彼女を抱き締めた。彼女の肩がビクリと揺れる。私は何も言わなかった。何か言うべきなんだろうけど、言葉はどうにも見つからなくて、抱き

締める以外に何も思いつかなかった。

「ごめんね、ハーマイオニー」

こうなるのをわかっていた。私は早くトロールが来て、ハーマイオニーとあの二人が仲良くなればいいと思っていたのだ。だがそれは間違いだ。ここは原作じゃない。私なら3人の仲介役をできたはずだ。私を通して3人のわだかまりを無くすことだって可能だったかも知れない。

でも私はそれを試しさえせずに、後で仲良くなるのを知っていたばかりに3人の仲を放置して、ハーマイオニーを傷付けた。確かに原作でだってハーマイオニーは傷付いた。けどそれは仲介役が居なかったからに過ぎない。仕方のないことだと言えなくもないことだったのだ。

私は彼女に酷いことをした。わかっていながら、未来を変えようとはしなかった。

ハーマイオニーは嗚咽を漏らした。

1人は寂しい。頼るところも頼り方もわからなくて、1人だったのだ。友だちのようだけど、私はきつと、本当の意味ではそうじゃなかった。寄り添うことをしなかった。

私の肩が、温かい何かで濡れた。

もうどれくらいこのままだっただろう。2分か、5分か、それとも10分も経っただろうか。ハーマイオニーはそつと離れた。まだ少し泣いていたけれど、彼女は涙を拭いながら私に礼を言った。

「そんな、私は何もしてないのに——」

「つ…違う、傍に居てくれたわ。授業を放り出してまで、私を探してくれた」

その言葉が、胸に痛かった。

「私はもう大丈夫だから、次の授業はちゃんと、出席してくれない？ほら、私、目が腫れちゃってるから人前には出たくないの」

泣き笑いでそんなことを言いながら、ハーマイオニーは私を押した。

一人にして——暗に言われた気がした。

「…わかったわ。じゃあ、授業が終わったら夕食、もって来るわね」

「ありがとう、ジーナ」

床に散らばっているいくつかの教科書を拾い上げ、部屋を出た途端、授業終了のチャイムが鳴った。

教室に行くと既にハリーとロンはそこにいて、なんとなく席は近くだったものの、互

いに口を利かず、見えない薄い壁を築いたままだった。

結局残り2時間も同じように過ごして、ハーマイオニーのために夕食を取りに厨房に行こうとすると、ふとラベンダーとパーバティの会話が耳に入ってきた。

「ハーマイオニー、授業にいなかったけど、今トイレで泣いてるんだって」
「そうなの？何かあったのかしら」

トイレ?!女子寮にいるはずじゃ…

2人に詳しく尋ねもせず、一番近くのトイレに走り出した。

息を切らせて辿り着いたトイレに、ハーマイオニーの声は聞こえない。誰かがいる気配もなかった。手が震え、気持ちだけが焦っていく。

私がいることで、どう未来が変わっているのかわからないのだ。大して未来に干渉したことはないが、まだわからない。

トロールがいる場所も、来るタイミングもわからない上に、ちゃんとそれを倒せるかどうかもわからないのだ。予見も、第三者のいない今、役には立たない。

冷静になれ、と己を叱咤し深呼吸をした。

何もわからないのなら、今は違う視点で見るとべきだ。原作のトロールは地下に出る。もし今、ハーマイオニーがトイレにいることがこの世界が最低限原作に沿おうとしていることから来ているのなら恐らく、彼女の居場所もそれに準じているはず。

一番近い、地下室近くのトイレは、どこにある？

グリフィンの石像近くのトイレが思い浮かんだ。きつとあそこだ。

すぐさま走り出した。そのトイレは、すぐ近くにあった。その扉にはいつもなら刺さっていないはずの鍵。後でこの鍵を使ってハリーたちがトロールをこのトイレに閉じ込める。

迷わずその鍵を引き抜き、ポケットに入れた。

——もしかしたらこの世界は本当に原作に沿おうとしているのだろうか。だったからこれから私が、将来的にヴォルデモートなり闇の魔法使いなりの犠牲になる人たを救おうとするのも、この世界では無駄な足掻きではないのか——？

一抹の不安が胸を過った。

否、違う。あの時確かに神は『好きにしてくれて構わない』と言った。自由に未来は変えられるということも言ったはずだ。あの状況下で嘘を吐くとも思えない——ああ、もう……今はこんなことを考えても無駄だ。

脳内を黒く埋めようとしていた考えを振り払い、じめじめとあまり清潔とは言えないトイレに耳を澄ませた。奥の個室から、すすり泣くハーマイオニーの声が聞こえる。

「——ハーマイオニー？」

「っ……ジーナ……！」

彼女の泣きそうな鼻声がトイレに響いた。

「ハーマイオニー、どうしてこんなところにいるの？出て来れる？」

鍵の閉まった個室に話しかければ、僅かな沈黙の後、カチャリと軽い音を立てて鍵は開いた。中にいたハーマイオニーはやっぱり泣き腫らした酷い顔をしていた。

次の瞬間、私はハーマイオニーのふわふわの髪の毛に包まれていた。抱きついてきたのだ。清潔なシャンプーの香りが鼻腔を満たす。

「——貴女が行ってしまったから、私、顔を洗おうと思ったの。ロンにも、ちゃんと謝ろうと思って……下りてきたらピープズが廊下において、それで、ひ、酷いことばかり、並べ立てるから……私——」

ガラガラガラ……

重い何かを引き摺る音がした。続いてドスン、ドスンと内臓に響く足音が地面を揺らす。気が付けば酷い臭いがトイレを満たしていた。

「何？この臭い——!？」

臭いの元を見上げ、言葉を失った。既に『それ』は城内に入り込んでいた。

背は4 m。汚い、鈍い灰色の肌に岩石のようにゴツゴツとした巨体、禿げた頭は異様に小さく、短い脚は木の幹ほど太い。腕が異常に長く、手にした巨大な棍棒は床に着き、引き摺って歩いて歩く度にガラガラと音を立てている。

ボタンっ！とトロールの背後の扉が勢い良く閉まった。ハリーとロンだ。だが鍵は私のポケットにある。完全には閉まっていなかった。

トロールはのろのろとした動作で閉まった扉を見、そしてまた私たちに向き直る。卑しい、小さな黒い目が私とハーマイオニーの姿を捉え、トロールは棍棒を振り上げた。その刹那ハーマイオニーは甲高い、引き攣った悲鳴を上げた。

「避けて!!」

棍棒が振り下ろされる。ハーマイオニーを突き飛ばし、杖を抜き去りながら横つ飛びにそれを避けた。先程まで私たちが立っていた床は棍棒で叩き割られ、粉々になったタイルが無惨に散乱している。

ハリーとロンがドアを開け、突入してきた。二人とも青い顔をしている。

トロールはまた棍棒を振り上げた。標的は、壁際で縮み上がっているハーマイオニーだ。その足で洗面台を次々となぎ倒しながら、彼女に近付いて行く。

「こつちに惹きつける!」

ハリーが喚き、近くに落ちていた蛇口を拾って投げつけた。私も杖をトロールに向ける。

「アクアメンデー!グレイシアス!!」

振り抜いた杖の先から飛び出した大量の水は空中で凍てついた。瞬間的にトロール

の注意がこちらに逸れる。

「エクスパルス！オパグノ！」

さらにそれを爆破し氷の刃と変えた。それらは次々にトロールを襲い突き刺さる。

だが皮膚の厚いトロールには全くと言っていいほど効いていない。針でも刺したようにトロールはそれらを見、そして私を見た。

振り上げた棍棒はそのままに、トロールはふらふらとこちらに向かつてくる。どうやら標的はハーマイオニーから私に変わったらしい。

「ジーナ!!」

ハリーとロンが同時に叫び、トロールに瓦礫を投げつけた。今度は彼らの方を向く。

「待ちなさい！インカーセラス！」

トロールの太い脚に向け呪文を放った。飛び出した縄は幾重にも堅くその両脚を縛り上げる。トロールはバランスを失った。棍棒を振り上げたままそれはハリーの方に倒れかかる。

「ハリー！」

杖を取り出したはいいものの、どうしていいかわからずにいたロンはハツとして杖を振り上げた。

「ウインガーダイヤモンド レヴィオーサー！」

ハーマイオニーにアドバイスを貰ったばかりの、覚えてたての呪文。その間にハリーは後退った。

高く掲げられたままの棍棒はトロールの手をすりと抜けたかと思えば、ぐるりと反転して、今にも倒れようとする持ち主の脳天目掛けて落下した。ボクツと鈍い音が響く。トロールは白目を向いてそのまま、ドオンと凄まじい音を立ててうつ伏せに倒れた。

——終わった。

ハリーはトロールを見つめ、ロンも杖を振り上げた格好のまま突っ立って、自分が倒したトロールをボーツと見ていた。

ハーマイオニーがトイレの隅から出てきて、やっと口を利いた。

「これ、死んだの？」

「いや、ノックアウトされただけだと思う」

ハリーは答えながら、トロールに突き刺さっている氷の刃を観察した。

「まったく、ジーナ、君って本当に何でも知ってるよね。どんな魔法を使ったの？」

「アクアメンディで水を出して、グレイシアスで凍らせてエクスパルソで爆破して、オパグノでそれらに襲わせただけよ」

あまりにも唐突なこと考えずにやったため頭の中で順を追いながら言った。ロン

は挙げていた腕を下ろし呆れたように言う。

「それを咄嗟に思いつくことが凄いいよ」

「本当——私なんてただ怯えることしかできなかったのに」

ハーマイオニーがトロールを憎々しげに見つめてそう言った途端、急にまた入り口の方からバタンと音がして、バタバタとたくさんの足音が近付いて来た。

4人は顔を上げた。どんなに大騒動だったか、必死だった4人は気付かなかったが、物が壊れる音やトロールの声、倒れた時の地響きを階下の誰かが聞きつけたに違いない。

マクゴナガル先生が走ってきていた。そのすぐ後にスネイプ、その次はクイレルだ。

クイレルは倒れたトロールを一目見た途端、ひーひーと弱々しい声を上げ胸を押さええて地べたにへたりこんだ。臭い芝居だ。

スネイプはトロールの醜い顔を覗き込み、そして皮膚に浅く突き刺さっている溶けかけの氷を見てすぐさま私を見た。マクゴナガル先生は激怒していた。嘔み締めた唇は蒼白だ。

「一体全体、あなた方はどういうつもりなんですか」

冷静だが、隠し切れない怒りが滲んでいる。

「殺されなかったのは運が良かったのでしよう。しかし寮にいるべきあなた方が、どう

してここにいますか」

スネイプの目が鋭くハリーを睨み、そして私を睨んだ。

視界の端でハーマイオニーが小さく手を挙げた。

「マクゴナガル先生、聞いてください——3人とも、私を探しに来たんです」

「ハーマイオニー／ミス・グレンジャー!!」

私と先生が同時に声を上げた。

「私が、トロールを探しに来たんです。私……私、一人でやつつけられると思いました」

——あの、本で読んでトロールについては色んなことを知っていたので」

苦しい虚言だった。だがロンには響いている。彼は驚きのあまり杖を取り落とし、ト

イレ内にはカラカラという寂しい音が響いた。

「もしこの3人が私を見つけてくれなかったら、私、今頃死んでいました。ハリーはト

ロールの気を惹いてくれ、ジーナは氷の刃でトロールを攻撃し、縄で縛って動きを封じ

てくれ、ロンは棍棒でノックアウトしてくれました。3人とも、誰かを呼びに行く時間

がなかったんです。3人が来てくれたときには、私、もう殺される寸前で……」

ハリーもロンも、その通りです、という顔を装ったので私もそれに従った。現状、最

善策としてハーマイオニーに甘えるしかない自分が不甲斐ない。

「そういうことでしたか……」

マクゴナガル先生は難しい顔で4人をじっと見た。

「ミス・グレンジャー、なんと愚かしいことをしたか、わかっていますね？ たった1人で野生のトロールを捕まえようなんて、どうしてそんなことを考えたんです？」

ハーマイオニーは項垂れた。誰も、何も言わない。ロンはいつになく真剣な眼差しでハーマイオニーを見ていた。

「グレンジャー、グリフィンドールから5点減点です。あなたには失望しました。……怪我がないのならグリフィンドール塔に帰った方が良いでしょう。生徒たちがさつき中断したパーティの続きをやっています」

先生の言葉に従い、ハーマイオニーは名残惜しそうに私たちを見てから去っていった。

マクゴナガル先生は今度は私たちに向き直った。

「先程も言いましたが、あなたたちは運が良かった」

ロンが私を見た。

「しかし大人のトロールと対決できる1年生はそうさらに居ません」

今度はハリーが私を見た。

「1人5点ずつあげましょう。ダンブルドア先生にご報告しておきます。今日は帰ってよろしい」

3人で顔を見合わせ、そして一切笑わないように真面目くさった顔をして揃ってトイレから出ようとしたとき、私だけマクゴナガル先生に呼び止められた。

「……ミス・ブラック、貴女は少し残ってください」

胃がガクン、と1段下がった気がした。ハリーとロンは心配そうに私を見るが、私は彼らに頷いて、大丈夫だと暗に伝えた。

「……クイレル教授、ダンブルドア先生を呼んできていただけますか？」

「は、は、はい！い、今すぐ、よ、呼んで来ます」

吃りのクイレルはへたっていた床から何とか立ち上がり、よたよたと走って行った。

マクゴナガル先生はぐるりと私に向き直る。

「貴女は、今夜ここにトロールが来ることを知っていた、そうですね？」

どうして先生は予見のことを知っているのか。疑問に思ったが少し考えればわかることだった。彼女も不死鳥の騎士団の団員、更には事前にダンブルドアから知らされている可能性が高いメンバーの一人だ。

「……いいえ」

恐らく、クイレルにダンブルドアを呼びに行かせたのはこの為か。彼は団員ではない。
い。

スネイプがふん、と鼻を鳴らした。

「わかっていたはずですよ。でなければ貴女がここに来た理由がありません。貴女は宴の席にはいなかったでしょう」

「…そうですね、すみません」

マクゴナガル先生は溜息を吐いた。

「まったく…わかっていたのなら何故私たちに教えなかったのです？ 貴女は確かに並の11歳ではありえない魔法力と予見の力を持っていますが、まだ経験の浅い子どもなのですよ？」

マクゴナガル先生の後ろでスネイプが意地悪く目を細め、私を見下ろした。

「今回のことをシリウスに伝えることはしませんが、次貴女が何か危険な行為をした場合、遠慮なく報告させていただきます。いいですね？」

「そんな……どうしてですか？ 私はただの一生徒でしょう？」

「そうするよう彼とダンブルドア先生に頼まれたからです。いいですね？」

シリウスに関しては十中八九親バカから来ることだろうが、ダンブルドアは恐らく違う。『半純血の予見者』が絡んでいることは火を見るよりも明らかだ。

「はい…」

「ではブラック、解ったなら貴女も寮に戻りなさい」

「豚の鼻」の合言葉で談話室に入ると、そこは人でごった返していた。

どこから持ってきたのか、たくさんのご馳走の乗った皿が、テーブルやら暖炉の上やら、様々な場所に置かれて、さらには部屋の真ん中の人だかりの中心にはワイーズリーの双子が陣取って何やら芸を披露していた。

そんな騒がしい部屋の中で、グループから離れて3人がご馳走も食べず仲良く談笑していた。ハリー、ロン、そしてハーマイオニーだ。

「あ、ジーナが帰って来たよ」

私に気付いたハリーがそう言うのが聞こえた。

「ただいま」

笑って言った。

3人も「おかえり」と笑い、そして4人で揃って急いで食べ物を取りに行った。3人はパンプキンは1つも入っていない私の皿を笑ったが、私はいつになく上機嫌だった。

今年のハロウィーンは、人生の中でこの上ないほどに幸せなハロウィーンだ。

第15話 クイディッチ

11月。学校を囲む山々は白金色に凍てついて、湖は冷たく鋼のように張りつめた。校庭には毎日霜が降り、朝日が差せば幻想的な朝霧がキラキラと煌めく。何週間にも及ぶクイディッチの練習も終わり、いよいよ、クイディッチ・シーズンの到来だ。

ハリーと私の初試合であり、グリフィンドール対スリザリンの因縁の戦いでもあるそれは、もう次の土曜にまで迫っていた。

当然、ハーマイオニーがハリーたちと和解できたことはハリーとロンだけでなく、私に取っても良いことだった。

追い付かないのだ。

以前は、余るほどとはいかないが2人の宿題をみるくらいの時間ならあったので1人で2人の宿題を同時に監督する、なんてことができたのだが、今ではハリーも私も練習に追われ、ハリー1人見るのでやっとだった。ロンの相手までは手が回らず、彼のことにはハーマイオニーが見てくれていた。

以前より数段優しくなったハーマイオニーはロンとも上手くやっていた。彼らの未来を知っている身としては、早くくっつけというのが本音だが、やはり傍観も楽しいも

ので、何も言わないまま2人を見守ることにしたことは、私だけの秘密だ。

ハリーと私のデビュー戦前日、凍てつくような寒い中庭で4人は、ハーマイオニーが出してくれた鮮やかなブルーの炎をピンに詰め、それを背に、暖まりながら談笑していた。ハリーと私は専らクイディッチのことで、時折、シリウスが以前話してくれたことのある彼の在学時のクイディッチの話をしたりもした。

そんな時だ。高学年が薬草学で使うハウスの方からスネイプが現れた。明らかに右脚を庇うような不自然な歩き方だ。

ハリーはスネイプを見るなり背中を他の3人に合わせぎゅつと引っ付き、他の2人も彼の意図を酌んでぴったりくっ付いた。私も一応くっ付いたが、そんな必要は全くないのに、と不思議に思った。

ホグワーツの校則に校庭で魔法を使ってはいけないという項目はない。炎も同じだ。それを知っている私は平然としていたのだが、どうやらハリーたちはそうではなかったらしい。目敏くそれを見つけたスネイプは私たち目掛けて進路を変更してきた。

彼の、凍てついた湖のように冷たい目が、ハリーの頭越しにハーマイオニーのブルーの炎を捉えた。

「ポッター、その火は何かね？」

一瞬、ハリーはスネイプを見つめたが観念し、背中に隠した炎のピンを差し出した。「校庭での火気の使用は禁止されている。寄越しなさい、グリフィン・ドール5点減点」

「先生」

理不尽な校則のでっち上げに、思わず立ち上がった。スネイプは如何にも気に入らないように眉をひそめた。

「校則にそんな項目はありません。校庭なら魔法の使用も許されています。グリフィン・ドールが減点される理由も、その火を没収される理由もありません」

スネイプもそれをわかってやっていたのか、眉間のシワが更に深く刻まれた。

「今、私が没収するのを見て、校則を確認したのかね？」

何がなんでもハリーに嫌な思いをさせたいらしいスネイプは譲らなかつた。

「いいえ、ですが——」

「なら信憑性は薄い。これは没収だ」

彼はそのままマントを翻して踵を返し、脚を引き摺りながら去って行った。無性に腹が立って、どきりともう一度座り込んだ。

「やっぱり、でっち上げなの？ ジーナ」

ハリーが聞いた。

「ええ。私、校則なら全て確認したものだ。間違いないわ」

暖をなくした背中が冷える。どこかに都合よくピンはないかと探したが見つかるわけもなく、仕方なく杖を取り出して近くの石をガラスピンに変え、耐熱魔法を施してもう一度ハーマイオニーと同じ火を灯した。

「ヤな奴だぜ、スネイプの奴」

「今回のでつち上げは流石に良くないわね」

ハーマイオニーも賛同し、ハリーとロンは少し気分を良くしたようだ。

「あの脚、すごく痛いといいな」

ハリーが呟いた。

夜、クイディッチの話題で持ち切りの談話室は騒がしく、双子が1足早いお祭り騒ぎをしていた。

「2人がいれば百人力だぜ！なんてったって天才だ！」

「あのウッドが褒めまくるんだからな！それに2人ともニンバス2000だ!!」

ジョージとフレッドは厨房から持ってきたらしいお菓子を金のトレイに乗せ、それをふわふわ浮かせながら言った。お菓子の中にはニンバス2000を象った可愛らしいクッキーが見えた。

「そんな、僕は……」

「ハリー！明日は頑張つて!!」

謙遜しようとするハリーを遮つてネビルが言った。

「ハリーとニンバス2000のことは確かにそうだけど、私はそんなじゃないわよ」

笑いながら、ゆつくりと飛んできたトレイからクッキーをつまんだ。さくさくと軽い食感とほんのりとした甘さが口の中に広がった。

相変わらず、屋敷妖精たちのお菓子は美味しい。今度お邪魔してみようか。

「(ぎ)冗談を!!」

2人が素つ頓狂な声を上げる。

「君もハリーも天才じゃないか！」

双子に続きロンが言った。

「練習試合で70点も決めたのは君だろう！」

「それはアンジェリーナやケイティが上手いからよ、私だけの力じゃないわ」

「あなたが上手いから私たちも安心してパスを回せるのよ、ジーナ」

アンジェリーナは後ろから私の肩に手を乗せた。

「そうよ、上手いんだから、ジーナはもつと胸を張らなきゃ」

ケイティがひよつこりと現れた。手にはニンバス2000のクッキー。

「ジョージ！このクッキー美味しいわね、この試合に勝ったらまたお願いね！」

「お安い御用さ！」

夜が明けると晴れ渡った、高く青い空が窓から見えた。大して風もなく、絶好のクイ
ディッチ日和のその日、大広間のテーブルはこんがり焼けたソーセージとトースト、
様々な箒型のクッキー、それから生徒たちの期待の眼差しと落ち着きのないざわめきで
満たされている。

「朝食、しつかり食べないと」

私がかんがり焼けたトーストにマーガリンを塗っている向かい側で、ハリーは何も
乗っていない皿を前に項垂れていた。

「何も食べたくないよ」

「そんなこと言わないで、トーストをちよつとだけでも」

トーストを取りながらハーマイオニーが優しく言うが、見るからに彼には食欲がなかった。

「お腹空いてないんだよ。ジーナはどうしてそんなに食べられるの？」

ハーマイオニーのトーストを撥ね付けながらハリーは私の手元の皿を見た。ソーセージにトマト、サラダ、スクランブルエッグが乗っている。さらに皿の横にはヨーグルト。

あり得ないよ、とでも言いたげな視線だ。

「お腹が空いてるもの。ちゃんと糖分を摂らないと脳が正常に働かないわ」

11時、選手は皆競技用の真紅のローブに着替えて更衣室に整列していた。観客のざわめきが低い唸りのように聞こえる。

ウツドは咳払いをして、選手たちを見回した。

「いいか、野郎ども」

「あら、女性もいるのよ」

アンジェリーナが付け加え、私に微笑んだ。

「そして女性諸君」

ウッドは訂正し、続けた。

「いよいよだ」

「大試合だぞ」

フレッドがウッドの言葉を継ぎ、声を張り上げた。

「待ち望んでいた試合だ」

今度はジョージ。ウッドは彼らを睨み付けた。

ジョージの向こうでフレッドがハリーに何か言っているのが見えたが、スリザリンの観客席からの声援で掻き消された。どうやら外ではスリザリンが入場し始めたらしい。

「黙れよ、その2人」

ウッドはハリーを見、私を見ながら演説の続きを始める。

「今年は、ここ何年かぶりかの最高のチームだ。この試合は間違いなくいただきだ」

そして彼は、負けるなんて言語道断だとも言おうように全員を睨み付けた。

「よし、さあ時間だ。全員、頑張れよ」

その声を合図に選手たちはぞろぞろと更衣室を後にした。邪魔にならないよう髪を後ろの高い位置で一つに纏めれば、不安などどこにもない、清々しい何かが胸に広がった。自然と笑みが零れた。

「余裕ね、ジーナ。安心したわ」

前を歩いていたケイティが振り返り微笑んだ。

「ええ、すごく——楽しみだわ」

青々とした芝生に露が光る、グラウンド。破れんばかりの大歓声に迎えられた。ふと、観客席の上にはためく旗が目に入った。『ポッターを大統領に』という文字と共に吠える獅子が描かれている。しかしそれは次の瞬間には違う文字になった。

『ブラックは我らがプリンセス』

絶対にフレッドとジョージだ。すぐ後ろにいる彼らを見れば、イイ笑顔で親指を立てていた。あとで2人の部屋に二フラーでも離してやろうかと思ったが、それではルームメートにまで被害が及ぶので思い直し、後で何か他の策を考えようと心に決めた。

競技場の真ん中にはマダム・フーチと、既に入場して整列しているスリザリンの選手が箒を手に立っていた。

「さあ皆さん、正々堂々戦いましょう」

明らかに彼女は、スリザリンのキャプテンであるマーカス・フリントに向かって言っていた。きつと前科があるのだろう。

「さあ、箒に乗って——」

選手たちが箒に跨り、高く蒼い空を見上げた刹那、マダム・フーチの銀の笛が高らかに

に鳴り響いた。開幕だ。

15本の箒が空へ舞い上がる。高く、さらに高く。

赤いクアツフル、一対の黒いブラッジャー、そして金のスニッチが空に放たれた。すかさずアンジェリーナがクアツフルを取った。

「さあ！クアツフルはたちまちグリフィンドールのアンジェリーナ・ジョンソンが取りました——なんて素晴らしい選手でしょう！そのうえかなり魅力的でもあります！」

スリザリンのゴツい選手——名前はさつぱりだ——が彼女に突進しようとする屈める。

「ジョーダン！」

対して私の方は1年のヒヨツ子だからか、ガラガラだ。

「失礼しました」

さつとアンジェリーナの左に出た。彼女は目の端で私を確認しクアツフルを投げた。それは一直線に私に飛んだ。

「レジーナ・ブラックに鋭いパスが飛ぶ——取りました！オリバー・ウッドは良い選手を見つけたものです！1年生です——」

前はガラ空き、周りを見渡せばスリザリンの選手たちはアンジェリーナやケイティの

方にいる。さらには揃って顔をしかめていた。何人かは私より下を飛んでいたので恐らくクアツフルを取り落とすとしても思ったのだろう。

箒の柄にぴったりと伏せ、スピードを上げた。目指すは真ん中のゴールポスト。風が唸る。辛うじて視界の端にいた緑のローブを纏った選手も、すぐに消えた。全てを引き離し、疾走する。

「ブラツク選手、突っ走る！ 一体どこまで行ってしまうのか——おつと?！」

ビュツと風を切る音。練習で散々聞きなれた、ブラツジャーの足音だ。

いつもと同じ動きでそれを避ける。箒にぶら下がった瞬間、黒い弾丸は私の頭があつた辺りを通りすぎて行つた。

「素晴らしい動きです！ ナマケモノ型グリップロールでしょうか——ブラツク選手、まだ突っ走ります！ 他の選手もやはりニンバス2000には敵わない！」

体勢を戻すと、ゴールはすぐそこだ。右に逸れた——相手のキーパーも右に付いてくる——

「———今だ、ジーナ！」

ジョージが遙か後方で叫ぶのが聞こえた。赤いボールは真ん中のゴールを貫いた。

「ゴオオオオオオオオ!! グリフィンボール先取点！」

選手と同じ真紅の応援席から大歓声が上がった。スリザリン側からは野次が飛ぶ。

私より遥かに高い所で、ハリリーが2、3度宙返りをするのが見えた。

だがすぐに彼から目を逸らし、ゴールから離れた。スリザリンのゴールキーパーからグリフィン・ドール側に向かって高くクアツフルが投げられる——キャッチしたのはフリントだ。

すぐにクアツフルを追いかける。

「今度はスリザリンの攻撃です！ マーカス・フリントはブラッジャーを躲し、双子のウィーズリーを躲し——この2人は人間ブラッジャーとも呼ばれています——アングエリーナを——アイタ！ ジョー……いや、フレッド・ウィーズリーがフリント選手の後頭部にブラッジャーを叩き込みました！ イイ笑顔です！」

フレッドはバットを担ぎ私にグッドサインを送りながら清々しいほどの笑みを浮かべていた。

その間にケイティがフリントが取り落としたクアツフルを取り、ゴールポストに飛んだ。

先取点を入れたことにより私はすでに嚴重警戒されている。

ゴール前、ケイティからアングエリーナにパスが渡る。

「ベル選手からジョンソン選手！ ゴールも近い——ノーマークだ！ 行け！ アングエリーナ！」

キーパーがクアツフルに飛びついた。

「あああああ！残念！ブレッチリーが止めました!!」

クアツフルを得意気に掲げ、彼は大きく振りかぶった。それとほぼ同時に急上昇を始める——クアツフルは高く投げられた。当然私はその軌道上にいる。難なくキャッチし、ゴールに投げ返した。それはまたも真ん中のゴールポストを射抜いた。キーパーは動くことさえできていない。

「う——嘘だろう!? ブラック選手、完全に動きを読んでいたようです! グリフィンドールの得点です!!」

「流石は我らがプリンセスだな!」

近くでブラッジャーのように飛び回っていたジョージが言った。

「じゃあそのプリンセスから後で直々にイタズラしてあげる」

いたずらっぽく笑ってそう言い、すぐさまその場を離れた。後にはジョージだけが残った。

「グリフィンドール連続で得点していますがどちらもブラック選手です! 1年生とは思えない動きです! さて、試合は続行、スリザリンの攻撃です! 次もブラック選手の読みは当たるのか——」

ジョーダンの実況はギリギリアウトで中立ではない気がした。

ブレッツチリーがまた振りかぶる。今度は私を警戒してか、高くは投げなかった。当然私も二度は同じことはしない。

低く箒に伏せ、クアツフルを追う。

「クアツフルはエイドリアン・ピュシーに渡ります——これもブラツクの読み通りでしょうか、上には飛びませんでした——」ピュシーはブラツクジャーを2つ躲し、ケイティ・ベルも躲して……おっと、ブラツク選手迫ります！流石はニンバス2000……ちよつと待つてください——あれはスニツチか？」

ピュシーは耳元を掠めた金色の閃光に気を取られ、クアツフルを取り落とした。さすがそれを拾う。

観客がスニツチにざわつき、ハリーと相手のシーカーが急降下を始めた。チェイサーたちはほとんど、自分の役目を忘れてしまったように2人の攻防を見守った。

だがその中でただ1人——プリントだけが動いていた。

彼はチェイサーの1団から少し離れたところにいた。故に、誰も彼がシーカーの近くに行くまで彼の動きには気が付かなかった。

グワーン！とグリフィンドールから怒りのブーイングが飛んだ。ハリーはスニツチを追っていた軌道から弾き飛ばされ、スリザリンのシーカーもその妨害によりスニツチを見失ったようだ。

「反則だ！」

グリフィンドール生が口々に叫ぶ。マダム・フーチはフリントに嚴重注意を与え、グリフィンドールにフリーシユートを与えた。

「えー、誰が見ても胸糞が悪くなるようなインチキの後——」

「ジヨードン！」

彼ももう、中立を保つことが出来なくなっていた。マクゴナガル先生が凄みをきかせ、彼にあくまでも中立でいるように言った。

「えーっと、大つびらで不快なフアールの後——」

「ジヨードン、いい加減にしないと——」

「はい、はい、了解です。フリントはグリフィンドールのシーカーを殺しそうになりました。誰にでもあり得るようなミスですね、きつと。そこでグリフィンドールのペナルティシユートです！」

持っていたクアツフルをアンジェリーナに渡そうとすると、何故か拒否された。

「貴女が投げて。代々、フリーシユートはその試合で一番調子のいい選手が投げることになつてるのよ」

「そんな」

結局彼女に背中を押され、ゴールポスト前に進み出た。深く息を吐き出し、その輪を見据える。

「おっと、投げるのはブラックです」

ジョーダンの声小さくなり、ぶーんと耳が鳴った。狙いを定め、振りかぶる。

「ブラック、投げました——決まった!! さあゲーム続行です! クアツフルは依然、グリフィンボールが持ったままです! ジョンソン選手が飛びます!」

アンジェリーナがスリザリンの間を縫うようにジグザグに走り、その近くをケイティと2人で固める。ブラックジャーが前から飛んで来るが身を捻って躲すがそれは耳を掠り、シュツと熱が走った。

ゴールは目の前——その時だ。

ちょうど斜め上、ギリギリ見えるところにハリーがいた。だが様子がおかしい。1人でジグザグに動いたり、上下したり……まるで箒がハリーを振り落とそうとしているかのような動きだ。

「アンジェリーナ! ハリーがおかしい——少し抜けるわ!」

彼女の返事も聞かず離脱し、ハリーの元に向かう。

「ジョンソン選手が……おっと、ブラック選手は離脱して……ハリー! ポッターの方に向

かう模様——「おや？ポッター選手、様子がおかしい。コントロールを失ったのか？」
「タイム！タイム!!」

グラウンドの向こう側でウッドが叫んだ。だがジョーダンや、今はスリザリン側のゴールポストの辺りを飛んでいるマダム・フーチには聞こえていない。皆おかしな動きをするハリーを見ていた。

「ポッター選手どうしたのでしょうか……まだ治まらないようです」

彼のニンバスは休みなく暴れ続けた。

ハーマイオニーは——グリフィンドールの観客席を見れば、彼女の髪が階段下に消えるところだった。まだ時間がかかる。

「ハリー、落ち着いて。無理なら手を離しても構わないから——」

ローブに忍ばせていた杖を取り出しながら彼に声をかけた。だが聞こえていないのか、ハリーは必死に箒にしがみつき、奥歯を噛み締めていた。

まだか、ハーマイオニーは。

ハリーの遥か下ではフレッドとジョージがぐるぐると円を描くように飛んでいた。落ちてきたらキャッチするつもりらしい。

観客席から悲鳴が上がった。スネイプのマントが燃えていたのか、ぷすぷすと白い煙を上げていたが炎は見えない。

「ハリー！大丈夫——」

声をかけたその刹那、ハリーはしつかり箒に跨り直すと突然急降下を始めた。その先には金の尾を引くスニッチの影。

地面に向かって落ちていく、紅のローブ。またも観客席から悲鳴が上がる。地面に激突する——その瞬間、ハリーは箒の柄を引き上げ、そして地面に転がり落ちた。パチンと口を押さえるのを見た。今にも吐きそうな顔だ。

ハリーの何度目かの嗚咽のあと、ポンつと、それは彼の手のひらに落ちた。

「ハリーがスニッチを取った!!」

ハリーがそれを高く掲げるのを見、眼下でジョージが叫んだ。彼の手の中で、スニッチは太陽の光を受けて金色に輝いた。

突然の試合終了。大混乱ではあっても、結果は変わらない。

例えマークス・フリントが20分以上も「あいつは取ったんじゃない！飲み込んだんだ！」と喚き続けたとしても。

その間リー・ジョーダンが叫び続けていた。

「グリフィンドール、260対0!!完全勝利です!!!」

第15.5話 大勝利のその後で

「勝った！グリフィンドールが勝った！あのスリザリンに！！完全試合だ！！ポッター！！ブラック！！」

歓声に湧く競技場。ウツドは地面に降り立つなりハリーを抱き締め（ハリーは危うく窒息しそうだった）次に私に、そのキツイ抱擁をお見舞いしそうだったがそこはアンジェリーナが横取りするようにハグして助けてくれた。

「素晴らしいゴールだったわ、ジーナ！」

アンジェリーナは私の頭をこねくり回りながら満面の笑みを浮かべた。一方でウツドはまだハリーの側で双子と共に狂ったように叫んでいる。

「完全試合だ！！ポッター！！！」

競技場の真ん中でそのまま、パーテイでも始めてしまいそうなほど浮かれた空気を察知してか、すぐにマクゴナガル先生が駆け付けた。

「素晴らしい試合でした！ですがパーテイは談話室でするように！ミスター・ウィーズリー、2人で厨房へでも行ってご馳走を貰って来なさい」

「了解です！」

2人は見事な敬礼を決めるとすぐさま更衣室に走って行った。

マクゴナガル先生はもしかしたら双子のあれやこれやを認めているのかも知れないと思つたが口にはしなかつた。

先生は残つた選手たちに向き直つた。メガネの奥で目がキラキラと輝いている。

「何度も言うようですが、素晴らしい試合でした。ブラック、特に貴女には目を見張るものがあります。そのバランスもそうですが常に冷静な判断ができるのも貴女の強みです。次の試合も是非、お願いしますよ。次にポッター——」

マクゴナガル先生による選手の講評は続き、最後に長々と試合全体の講評が終わる頃には時計の針は2時を指していた。

ユニフォームに着替える前に食べたはずのトーストやサラダはもうないらしく、私の胃はしきりに空腹を訴えていた。ハリーも同じなようで、互いにお腹が鳴る度に顔を見合わせクスクスと笑い合つた。

「——本当に素晴らしい試合でした。この調子では非、優勝トロフィーを腕に抱きたいものです。……あらまあ、もうこんな時間ですか。皆さん、すぐに寮にお戻りなさい、双子のウィーズリーがご馳走を用意しているでしょう。くれぐれも、廊下でお祭り騒ぎはしないように」

更衣室に戻りユニフォームを脱いで制服に着替える。その間も、アンジェリーナとケイティはそわそわして、黙って騒がないようにしていてもやはり嬉しきは各所に滲んでいた。

先生に言われた通り、それぞれに嬉しさを押し殺し静かに寮に向かった（ウッドはそれがかなり難しかったらしく、半息を止めながらの移動だった）。

ウッドがうきうきと合言葉を言えば太った婦人は微笑んで、寮への扉を開けた。その瞬間、どかん、と歓声が廊下へ溢れ出た。入学してすぐのハリーの組み分けのときを彷彿とさせるほどの大音量に思わず怯み、驚いていると寮の中から何本もの手が伸びてきて、呆然としている選手たちの腕を掴んでその中へと引き込んだ。

「主役たちの凱旋だ!!」

談話室は文字通りのお祭り騒ぎだった。誰もがクイディツチの話で盛り上がり、やつと入場したヒーローたちを見ると拍手喝采を浴びせた。パンツ! パパンツ! とどこからクラツッカーが鳴り、小さなニンバス2000やら、コメットやらクリーンスリーブなんか飛び出してみんなの頭上を飛び回る。

「ジーナ! ほんとに素晴らしかったわ! ハリーも! あのダイビングはすごかったわ!」

ハーマイオニーが満面の笑みで言う。その手には小さなクラツッカー。

「おつかれさん、お姫様! どうだい? 俺たち特製のクラツッカーは、よく出来てるだろう

？」

次はジョージ。フレッドと共にハーマイオニーのと同じクラッカーを手に持っていた。答えようと口を開くと今度はネビルが話しかけてきた。

「ジーナ！凄かったよ！やつぱり君ってなんでもできるんだね」

彼は興奮に頬を上気させ、目を輝かせている。ありがとうと微笑むと、彼の向こうにはハリリーの横顔が見えた。皆に褒められ、彼らの興奮した感想を聞き、嬉しそうに笑っている。

「パーティーだ!!」

誰かの声を合図に、そこからはもう一々覚えてすらいられないほどに忙しいパーティーが始まった。

色々な、普段なら話しさえしないような上級生に話しかけられ好評を貰い、ご馳走を勧められフレッドとジョージ、それから今回の実況解説を務めたり・ジョーダンによるどんちゃん騒ぎをみんなと笑いながら鑑賞し、時に参加し、気が付けば時計の針は消灯時間を過ぎて、パーシーがみんなを寝かせようと奮闘したが誰も相手にせず、結局パーティーが終わるまで彼も起きていたことにまた笑い、そうしてくたくたになってベッドに潜り込む頃にはもう日付は変わってしまった。

いつもなら夜ふかしなんて大嫌いだ、今日はとても楽しかったと、またハーマイオ

ニーやラベンダー、パーティーと笑って眠りについた。

第16話 ニコラス・フラメル

翌朝、目が覚めると窓の外は一段と冷え込んで薄っすらと雪の積もった白い景色が広がり、屋根からはもう小さな銀の氷柱がほそぼそとぶら下がっている。枕元の時計の短針は10時を指そうとしているところだった。

部屋には誰の気配もなく、綺麗にベッドメイキングされもぬけの殻になったベッドが3つあるだけだ。

ルームメイトたちはきつと気を遣ってくれたのだろう。

彼女らの優しさに一人胸を温かくしながら、すっかり人肌に暖まっている心地良いベッドから這い出せば、すーすーとした冷たさが露出している首や手を包み、そこからさらに服の中へと侵入してくる。思わず身震いをした。

昨日の今日で急に冷え込んだせいで予め用意していた服では恐らく寒いだろう。トランクからカーディガンを取り出しながら白い息を吐いた。

シリウスのように『温度調節魔法』が使えれば良いのだが、残念ながら私はその呪文や理屈を知らないので使えない。彼は毎回無言で呪文をかけるのだ。家に帰ったら一度聞いてみようかと心に決めた。

とんとんと階段を降りて行くところには昨日の騒ぎの痕跡すらなく閑静な、いつも通りの談話室があるばかりだった。そもそも、人が殆どいない。というよりハリーとロン、ハーマイオニーと、名前も知らない上級生が2人して奥のソファで居眠りをしていくくらいだ。たぶん、上級生の2人組は昨日のどんちゃん騒ぎの余波でよく眠れなかったんだろう。暖炉の火が爆ぜる合間を縫って、穏やかなゆったりとした寝息が聞こえた。

一方、ハリーたちは揃いも揃って難しい表情だ。彼らの脇のテーブルには分厚い本がいくつか積み上げられていることから、何かについてかなり調べたらしい。

「あら、おはよう、ジーナ。よく眠れた？」

私に気付いたハーマイオニーが微笑むと、他の2人も（多少眠そうではあったが）おはよう、と笑顔を見せた。

「おはよう。ええ、よく眠れたわ。ありがとう。ところで、何の話？」

大体目星は付いているけれど、とりあえずそう尋ねた。途端に3人の顔が暗くなる。

「この間のフラッフィー……あ、3頭犬のことだよ。フラッフィーって言うらしいんだ。昨日、試合の後にあの犬が守ってるものがちよつとだけわかったらしいんだけど

……」

ハリーが代表して口を開いたが、文脈や彼らの様子からどうやら完全に行き詰まっていることが見て取れた。

『ニコラス・フラメル』って人とダンブルドアが関わってるっていうのはわかったんだけどさ。それ以上がなんにもわからないんだ」

ロンがその後を継ぎ、肩を竦めて言った。ハーマイオニーも頷いている。

「ニコラス・フラメルとダンブルドア先生……？ だったら『賢者の石』じゃない？」

3人の反応はそれぞれだった。

ハリーはなんだか納得したように「ああ……」と声を出して怠そうに俯き、ロンは目を見開いて「始めっから君に聞けば良かったんだ！」と頭を抱え、ハーマイオニーは驚いて息を呑み、そして凄く落ち込んで頷垂れた。

彼女曰く、賢者の石についてのことが彼の名前と共に、今読んでいる本のかなり後ろの方に載っているのを索引で見ることがあったらしい。そんなのが咄嗟に思い出せないのは当然だと思うのだが、彼女はそうは思わなかったらしい。

一方でハリーはニコラス・フラメルをどこかで聞いた気がしていたらしいが、それは当たり前だろう。彼が一番初めに引き当てた蛙チョコのカードに載っていて、ここにいる誰もが一度は読んだことのある名前なのだから。

「はああああ……僕ら、こんなに本を読まなくなっちゃってジーナに聞けば良かったんだよ……」

ロンは脇に積み重ねたいくつかの本を忌々しそうに眺めながら、また深く溜息を吐いた。

「そうね、それにこの本、『現代の著名な魔法使い』や『魔法界における最近の進歩に関する研究』に彼は紹介されていないわ。彼自身、賢者の石から精製される『命の水』を飲んでるからすごく長生きしてるのよ。正確なところはよく覚えていないけど、確か600歳くらいだったと思うわ」

「600歳?!」

「そんな歳なら厳密には『最近』とは言えないね…」

ハリーはテンション駄々下がりで言った。宛のない『ニコラス・フラメル探し』は結構堪えたらしい。

「もう・私はなんてバカだったのかしら!一度見たことがあったのに!」

少しの間項垂れていたはずのハーマイオニーは急にスイッチを切り替えてヒステリックにそう言うのと、栗色の髪を大きく振って荒々しく寮の方に走って行った。

本を取りに行ったらしい。折角取ってきてくれるのだから、石の説明は彼女に任せただ方がいいだろう。

「そんなの、僕らだって1回は見たことあるのにね」

ハリーが言った。

少しして、ハーマイオニーが脱兎のごとく戻ってくると、ハリーとロンは彼女が脇に抱えている大きな分厚い本に目を丸くした。

「軽い読み物にと思って随分前に借りてたの」

「軽い!?!」

ロンがそう口走るとハーマイオニーは「少し黙ってて」と一蹴した。ハリーは完全に置いてけぼりを食らっている。

2人の反応は恐らく一般的だろうけど、毎晩のことと慣れている私は特にリアクションはせず、彼女が手際よく索引を引いてページを捲るのを見ていた。

「あつたわ!これよ!」

ハーマイオニーは1000ページはあろうかという分厚い本はかなり後ろのページを開き、タイトルを指差した。

『錬金術による賢者の石の創造』と書かれている。

「ニコラス・フラメルは我々の知る限り、賢者の石の創造に成功した唯一の者!」

ハーマイオニーはドラマチックに読み上げ、私を見た。

私は頷いたが、あとの2人はよくわかっていないようだ。2人して理解し難いおかし

な顔で、ハーマイオニーが抱える本の表紙を見つめている。

ついにロンが口を開いた。

「ニコラス・フラメルが賢者の石を創ったってのはわかったけど、僕ら、その石がどんな物が知らないよ」

「まったくもう！2人とも本を読まないの？ジーナは知ってたのに！」

ハーマイオニーは呆れたようにぐるりと目を回し、ハリーに本を押し付けた。ハリーは本を受け取ると開いているページをなくさないように気をつけながらロンと額を突き合わせて読み始めた。

錬金術とは、『賢者の石』といわれる恐るべき力を持つ伝説の物質を創造することに関わる古代の学問であった。この『賢者の石』は、いかなる金属をも黄金に変える力があり、また、飲めば不老不死になる『命の水』の源でもある。

『賢者の石』については何世紀にも渡って多くの報告がなされて来たが、現存する唯一の石は著名な錬金術師であり、オペラ愛好家であるニコラス・フラメル氏が所有している。フラメル氏は昨年665歳の誕生日を迎え、デボン州でペレネレ夫人（658歳）と静かに暮らしている。

ハリーとロンは読み終え顔を上げるとハーマイオニーが言った。

「ね？ジーナが言った通りでしょう？フラッツフィーはフラメルの石を守ってるの。きつと彼がダンブルドアに石を保管してくれって頼んだのよ。だって2人は友だちだし、フラメルは誰かが狙っていることをどこかで知ったのね。だからグリーンゴッツから石を移して欲しかったんだわ！ホグワーツはあそこよりずっと安全なもの！」

「金を作る石、決して死なないようにする石！スネイプが狙うのも無理ないね。誰だつて欲しがらよ」

2人は興奮して言った。スネイプが犯人かというところは修正したかったが正直どちらでも結果は変わらない（それどころかスネイプに対して敵対心を抱いているハリーは、クイレルよりスネイプの方がやる気が出る）と思うので真実は言わないことにした。

「665歳なんて本当に、全然『最近』じゃないね」

ロンが続けた。

それからしばらく特に何かがあったと言うこともなく、私の知るホグワーツでは珍し

く、平和に時間が過ぎた（双子のウィーズリーは『パッドフツドの娘』と名乗る人物から幾度にも及ぶ軽いイタズラを受け、あまり平和とは言えなかったらしいが。え？私？違うよ、きつと）。

もうすぐクリスマス。リア充のきせつ……じゃなかった。白い雪に覆われた神秘的な城はクリスマス仕様仕様に飾り付けされつつある。そして12月中頃のある朝、城はさらに深い雪に覆われ、黒い湖はカチカチに凍りついていた。

はしゃいだフレッドとジョージは雪球にいくつか魔法をかけてクイレルのターバンの後ろでポンポン飛び跳ねるようにしたことを受けていた（ついでに言うとも私もそれに一枚噛んで、黒い湖の冷たい水をクイレルの頭頂部と背中の中の服の中に直接転送させ水浸しにしたが何故か私は捕まらなかった。双子の罪はいつもよりかなり重かったそうだ）。

一方で、夜中の猛吹雪を耐え抜いて Hogwartz に辿り着くことができた数羽のふくろうたちは元氣を取り戻して再び飛べるようになるまで、Hagrid の世話を受けることになった。

生徒の誰もがクリスマス休暇を待ち望んでいた。家に帰る者、Hogwartz に残る者はそれぞれだが、皆浮足立っているのに代わりはなかった。

先週、談話室に居残る生徒用のリストが貼り出された時、ハリーは真つ先に1番上に

名前を書いていた。私はどうしようか悩み、結局「今年は初年度なのでホグワーツに残りたい」とシリウスに手紙を書いた。何気に久しぶりの手紙だったので彼が拗ねていないか心配だったが、今朝、やっと返信が届いた。

それは居残ることを承諾する内容のものだったが、各所に寂しさや「来年は家で過ごす」など、彼の意見が散りばめられていた。そして下の方に、リーマスが来ているよ、とせめてもの足掻きが見られた。

しかし気持ちは変わらず私はリストの一番下に名前を書いた。帰ったら目一杯甘えさせてもらおうと思います。ほんと、シリウスの機嫌って結構重要。

「ほんとに何なの、この寒さ……」

魔法薬学の授業のため、地下の教室に向かう廊下でハーマイオニーが呟いた。

その通りだった。談話室や大広間では暖炉で轟々と火が燃えていたからまだ良かったが1歩廊下に出ると、もうそこは八寒地獄だった。身を切るようなすきま風が遠慮無く吹き込み、既に寒い廊下を更に氷点下まで冷やし詰めて教室の窓をガタガタと揺らした。

しかし、やつとのことですり着いた地下教室は廊下なんて比にならないほどに最悪だった。吐いた息は白い霧となって立ち昇り、生徒は火のくべられた大釜にできるだけ

近付いて暖を取った。

「可哀想に」

同じ教室の少し離れたところにいたドラコ・マルフォイが唐突に言った。最近では（特にクイディッチでグリフィンドールが勝つてからは）よくあることなので誰も反応しなかった。

「家に帰って来るなど言われて、クリスマスなのにホグワーツに居残る生徒が居るんだね」

私はあの手紙で何気なく、且つ執拗に帰って来いアピールをされたけどね。

ドラコはハリーの様子を伺い、クラブとゴイルがまるで女子のようにクスクスと笑った。そのあまりの気持ち悪さに鳥肌が立った。

対してハリーはカサゴの脊椎の粉末を量りながら3人を無視した。下手に反論して彼らを良い気にさせるよりいい判断だろう。

あのクイディッチ以来、彼らの嫌らしさはますます磨きがかかっていた。スリザリンが負けたことを根に持つてハリーを笑い者にしようとするのだが、皆はハリーが暴れ箒にしがみついていることに感心しているので誰も笑うことはなかった。妬ましいやら腹立たしいやら、どうしてもハリーと陥れたいドラコは古い手法に切り替えた。

ハリーにきちんとした家族がないことを持ちだしたのだ。

そのことに關しては流石にカチンときたので、とりあえずその辺の土がついた汚い雪で小さな雪だるま（足と腕が生えて自立歩行するキモいやつ）と蛇を作つて彼を襲わせたら、その日の夕方にフレッドとジョージがフィルチに連れて行かれるのを目撃した。2人とも、もし私のせいだったらゴメンね☆

というか、私は早くハリーに後見人のことやら何やら、色々とかミングアウトしたいんだけどな…。でもシリウスは……いつその事もう私が勝手にカミングアウトしちゃダメかな…？

そんなことを考えながら適当に調査を終わらせ（きつちり満点をもらつて）教室を出て廊下を曲がると、行く手を巨大なモミの木が塞いでいた。その木から2本の太く大きな脚がニヨキニヨキと生えているのですぐにそれがハグリッドだとわかった。

「やあ、ハグリッド、手伝おうか？」

ロンが枝の隙間に首を突っ込んで言った。

「私も手伝うわよ」

私も杖を出し木に向けながら言えば、枝の隙間からハグリッドの顔が出てきた。

「いんや、大丈夫だ。ありがとうよ、ロン、ジーナ」

「すみませんが、そこを退いてもらえますかね？」

後ろからドラコの気取った声が聞こえた。彼はゴリラを2頭引き連れて、ふんぞり返って教室の出入り口を塞いでいた。

彼らの向こうで他のスリザリン生やグリフィンドール生が何だ何だどこちらを覗こうと背伸びをしている。しかしそれは2頭のゴリラによって阻まれていた。

「ウィーズリー、小遣い稼ぎかい？君も Hogwartz を出たら森の番人になりたいんだろ？ハグリッドの小屋だってもしかしたら、君たちの家に比べたら——」

それ以上はもう聞こえなかった。何故かって？私が彼の口に粘着呪文を掛けたからだ。

彼の顔に向けた杖を下ろしながら意地悪く微笑んでやれば、彼はくっ付いた上唇と下唇を指で触り、そして口を閉じたまま悲鳴を上げた。もう一度彼に杖を向けた。

「シレンシオ」

ドラコの叫びが途絶えた。しかし彼はまだ叫んでいる。それが中々面白く、ロンがゲタゲタと笑い出した。

「全く、みつともないわね。これ以上呪いを掛けられなくなったら減らず口は叩かないことよ」

にやりと笑って杖を振り、彼の貼り付いた唇を元に戻した。

「ヒツ………！」

短い悲鳴の後、彼は一目散に走って逃げた。ドスンドスンとゴリラたちも後を追いかける。隣でハリーとロンが身体をくの字に折り曲げて大爆笑していた。

しかしそれも、背後から唐突に降って来た、スネイプのねっとりした声によつてしずめられた。

「一体何の騒ぎかね」

ギギギギギ、と軋む音が聞こえそうなほど、ハリーはぎこちない動きで振り返ってそこに佇む巨大なコウモリのような彼を見上げた。

「それ、は……」

「ドラコが、自分のことは柵に上げて他人の家族を侮辱したので、少し」

ハリーが返答に窮したので代わりに笑顔で答え、スネイプの目を見つめた。

「自分のことは柵に上げて？」

「ええ。彼があのような人間になったのはご両親の素敵（笑）な教育の賜物と、私は思っていますから」

周りにクスクスと忍び笑いが伝達していくのを感じた。

スネイプは如何にも気に食わないようだったが面倒だったのか反論がなかったのか、廊下での魔法の使用は禁止だとグリフィンボールから5点減点したあと、早く談話室に戻り給え、と言葉を吐くと、くるりと踵を返した。

そのコウモリのような後ろ姿が見えなくなると思わず、ハリーと顔を見合わせてクスクスと笑いあつた。ロンもハーマイオニーも、それどころか、私が言ったことを理解できた数人のグリフィンドール生までもが笑いを押し殺していた。

「楽しそうなのはええが、今のは良くねえんじやねえか？ ジーナ」

しばらくして、やけに心配そうにハグリッドが言った。

「いいのよ、私だつて聖人君子じゃないもの。好き嫌いくらいあるわ。たまたまドラコが地雷を踏んだつてだけよ」

ハリーが激しく同意した。

「そうだよ」

「それならまあ、まだええが……」

いいのか。

「——ああ、お前さんら、俺はこれからこれを大広間に飾りに行くんだ。見にこねえか？」

モミの木を担いだハグリッドのあとについて大広間に向かうと、そこは圧巻の眺めだった。柵や宿木が綱のように編まれて壁に飾り付けられ、12本ものクリスマスツ

リーがそれぞれに違う飾り付けを施され林立している。何本もの小さな氷柱で銀色にきらきらと輝くものもあれば、何百という蠟燭で輝いているものもあった。

ロンはフリットウィック先生が何か、金色の泡状のものを出してツリーを飾り付けるのにぼんやりと見惚れている。

「休みまであと何日だ？」

ハグリッドが尋ねた。

「あと一日よ」

ハーマイオニーが答え、一番近くのクリスマスツリーからぶら下がっている氷柱の先に触れた。それは熱に溶けることなく、ただ煌めいていた。

第17話 クリスマス 前編

初めてのクリスマス休暇に入るとグリフィン・ドール塔内は人が極端に減り、残っているのはハリーとウィーズリー兄弟、それから私だけだった。ハーマイオニーは酷く名残惜しそうに一人、ホグワーツ特急に乗り込んだ。

「ああ、寂しいわ。プレゼントはふくろう便で送るからね」

やたらと強いハグのあと、彼女は何度も振り返りながらホグズミード駅を後にした。

永遠の別れでもないのに、なんて興奮する言葉は飲み込んで列車が見えなくなるまで手を振ったのはつい先日のはずなのに、いざ休暇に入ってみると、彼女との別れはもう何ヶ月も前のことのような気がする。

他に誰もいない談話室で、暖炉の目の前の特等席に居座ってマシユマロやパン、他にもおよそ火で炙って食べられるものを色々と串に刺して炙りながら、私は読書したりハリーとロンのチェスの対局を見守ったり、気ままに過ごした。

たまにハリーの代わりにロンと対局したりもしてみたが、中々、互角の戦いだった。一方でハリーはロンに教えてもらっていたが今のところ全戦全敗だ。

ぱちぱちと火が爆ぜる音に、ハリーの「ああっ……」という残念そうな声が混じる。ハ

リーのクイーンがロンのナイトによって、粉々に蹴散らされたところだった。

毎回のことながら、彼を全く信用していないナイトやルークは、ハリーが少しでも進めようとする度に勝手なことを喚いていた。

「私をそこに進めないで。あそこに敵のナイトがいるのが見えないの？あの駒を進めて頂戴。あれなら取られても構わないから」

クリスマス・イブの夜、明日の朝にほんの少しの心配と期待を寄せながらベッドに潜り込んだ。

シリウスが一体どんなプレゼントと送ってくるのか。今年はリーマスがいるからまだ多少なりともまともかも知れないが、去年は明らかに玄人向けの頑固なチェスセット（今でも極たまにだが言うことを聞いてくれないことがある）と私が少しでも興味を示した本（12冊）、イタズラ用のなんちゃって透明マント（2枚）だった。嬉しいと言えば嬉しいのだが、多いのと一部マニアックなので、正直言ってお金の無駄遣いだ。

プレゼントの内容が決められないのなら聞けばいいのに聞かないのは彼の性分のせいだが流石に、今年もあんなテンションだと困ってしまう。

今年こそ厳選してくれればいいのだが、と憂鬱にすらなりながら、だった。

翌朝、すつきりと晴れた冬の高い空にはふくろうが忙しく飛び交っていた。

私しかいない寝室はしん、とした静けさに包まれていた。吐息が白く凍り、窓は結露に朝日を受けてキラキラと煌めいている。寂しいが、落ち着いたクリスマス。

ネグリジエから白いセーターに着替えながら去年までの騒がしいクリスマスを思い出して苦笑した。

こうしてみれば、こんなクリスマスは初めてだ。毎年、シリウスがオジーやクリーチヤーと共に大騒ぎしていたからこんなのもまた新鮮で不思議な気持ちだ。

「うわあああ!!」

突然、階下から悲鳴が響く。咄嗟に枕元の杖に手を伸ばした。全身が冷えるのを気にする間もなく階段を転がるように、半分飛び下りながら談話室に走る。

そうして駆け付けた談話室には、見事なクリスマスツリー。それから尻餅をついた口ン、唾然としたハリー、そして頭にピンクのリボンを結んだ見覚えしかない屋敷妖精――

「オジー!?!」

「お嬢様! お久しぶりでございます」

「何!?!」

「屋敷妖精?!」

全員が同時に喋り、オジーは嬉々として深々と頭を下げた。次に男子寮の方からバタバタと足音が響いた。

「今の情けない悲鳴はロニー坊やかい？」

挨拶をする間もなくジョージが言った。フレッドと2人して、慌てて出てきたせいで頭はボサボサ、パジャマは乱れたままだ。

「わお、なんてこった！そいつ——妖精か？」
「妖精ってどういうこと？」

ハリーはほとんど理解していないようだったがそれだけは聞き取れたようだった。

「はい、歴史ある旧家にお仕えする、屋敷妖精でございます。ハリー・ポッター様。しかしオジーめはレジーナお嬢様にお仕え——」

「ちよつと、ちよつと待って、説明は後にして——オジー、どうして貴女がここに？」
2人と、何か言葉を発しようとしたロンも遮ってオジーに尋ねた。彼女は嬉しそうに微笑み、自慢気に胸を張ってキーキー言った。

「始まりは1ヶ月前のことでございます。旦那様はお嬢様へのプレゼントのことでお悩みにいられているようでした。そこで旦那様はこのオジーめにお嬢様へのクリスマスプレゼントは何が良いかとお尋ねになられたのです。私めはいくつか例を挙げさせて頂きました。それからです！お優しい旦那様はオジーめにもプレゼントは何がいいか

とお尋ねになられたのです！」

私の知る原作ではあり得ない言葉だ。そのことが本当に嬉しかったのか、オジーは目を光らせて言った。

「オジーめはこう言いました。『お嬢様のお側でお仕えしたい』と！旦那様はその時は何も仰りませんでした。深く頷いておられました。その4日後です！旦那様はお仕事からお帰りになるとオジーめにこう仰ったのです。『クリスマス朝にホグワーツに行くの良い』と。私めへのプレゼントだと仰りました！ダンブルドア校長先生様のお許しも頂いております。私めはこれからここでお仕えさせていただきますのでございます！」

なるほど、リボンはそれで…自分が（？）プレゼントだと。間違っているような、いないような。

「……もう質問してもいいかい？」

ロンが尋ねた。いつの間にか彼は疲れたようにソファに座っていた。

「その——オジー？は君の屋敷妖精なの？」

彼はオジーを顎でしゃくりながら言った。対してオジーは礼儀正しく微笑みながら彼にお辞儀を返した。

「ええ。家にはこの子も合わせて2人いるから、母から受け継いだの」

「2人だって!？」

双子は髪の毛を直しながら素っ頓狂な声をあげた。

「1家につき1人じゃないのかい?！」

「あー、そうね、そうだね。この子は——元はホグワーツの妖精だったのだけれど——私の両親が結婚するときに、2人と仲が良かったものだから、是非お仕えしたいってダンブルドア先生に直談判したそうなの」

「ウワー……いいなあ、僕らも仲良くなれば1人くらいもらえるかな?！」

ロンは羨ましそうにオジーを見るが、オジー自身、ドビー並の変わった妖精だということ忘れてはならない。普通、屋敷妖精とは自分から転職を言い出したりはせず、言い渡された仕事だけをただ黙々とこなす、虚しく忠実な生き物なのだ。

「そうね、でも、いくらホグワーツには屋敷妖精が沢山いるからと言っても、オジーみたいな子は少ないでしょうね」

苦笑いでそう答えればロンは残念そうに目を伏せた。すると、ずっと立ちっぱなしで話を聞いていたハリーが手を挙げた。

「——とところで、屋敷妖精って何なの?！」

ハリーに屋敷妖精について基本的なことを説明する間に、オジーは人数分、つまり5

人分の少し豪華めの朝食とモーニングティーを用意してくれ、そうこうするうちにパーシーも起きてきて、朝食を追加してオジーを紹介、説明すると談話室の柱時計の針は、もう8時を指そうとしていた。

「これで一応、基本的なことは全部かしら。わかった？」

ハリーは「んー」と考え込むと、ゆっくりとぎこちなく頷いた。

「簡単に言えば、自由じゃないけど奴隷じゃなくて、働くのがすごく好きなんだよね」
間違いではない。でもまあ、この短時間なら及第点だろう。

「あと、それから僕らとは違った魔法が使えるんだ」

ロンはフレンチトーストをもちやもちやと咀嚼しながら口を挟んだ。

「ええ、そうよ。でもロン、食べながら喋るのは良くないわ」

「ああ——ごめん」

暖炉には火が燃え盛る暖かな談話室から一步も外に出ることなく、一同は朝食を食べ終えると食後のお茶を楽しみながらまつたりと過ごし、そしてプレゼントの開封に取り掛かった。一人ずつプレゼントの山が築かれている。

それぞれの宛名を確認し、一番小さな山に自分の宛名を見つけたハリーが呟くのが聞

こえた。

「うわあ……見て、これ、プレゼントがある」

どれだけ酷いクリスマススを過ごしてきたんだと聞きたくなるような彼の声に、ロンはジョークを交えて返ししながら、ハリーのよりかなり高い自分のプレゼントの山を開け始めた。

ちなみに私へのプレゼントはオジーを含め、7人からだった。

1番上はシリウスからの『高級箒磨きセット』だ。次の包みには杖のメンテナンセット。これもシリウスだった。

次に手をかけた包みは然程大きくはなかったがやけに重く、中身はいくつかの本だった。それらはリーマスからで、面白そうなタイトルが並んでいた。

ハーマイオニーからは淡いピンクのバレッタと手紙（『ついこの間お店で見つけたの！とつても可愛いから、貴方に似合うと思つて。もし使い方がわからなかったら、また今度教えるわ。是非着けて見せてね』）。

次はとても小さな軽い包み。開けて見ると、中には何も書かれていない羊皮紙が1枚とメモが1枚入っていた。メモにはシリウスの筆跡で『誰もいないところで紙を杖で2回叩きながら「我、ここに誓う。我、良からぬことを企む者なり」と心の中で唱えてみなさい』と書かれていた。

十中八九忍びの地図の派生だろうから羊皮紙だけをポケットに突っ込み、何もなかったかのように次の包みに手をかけた。今度も小さな、掌ほどの四角い箱だった。封筒が貼りつけられている。

ふと、隣で小さな山を崩していたハリーの手が止まり、その指の隙間からすると銀色の液体のような滑らかな布が床に滑り落ち、きらきらと折り重なった。銀でも溶かしたような、滑らかな光沢だ。

ロンがはつと息を飲んだ。

「僕、これが何なのか聞いたことあるよ」

声を潜めて言った。向こうで、ウィーズリー夫人お手製のセーターを着たパーシーをイジるのに忙しい双子はこちらの様子には気付いていないようだった。

「もし僕が考えてるものだとしたら——すごく珍しくて、貴重なものだよ」

「そうなの……? ジーナは? どう思う?」

ハリーは床から布を拾い上げ、私に見せた。

「…私もたぶん、ロンと同じ考えね」

「そんなに貴重なものなの?」

布を確かめるように触りながら、ハリーは信じられないとも言おうようにそれを眺めた。

「当たり前だろう？ たぶん、透明マントだよ、それ。偽物でも十分珍しいけど本物は、世界に一つしかないって言われている」

ロンはそう言い切ると、ハリーに腕だけでも被せて見て、と促した。

「わお……」

そのマントはハリーの腕を完全に隠して見せた。彼の肘から先が消え、代わりにその向こうのロンのプレゼントの山がはつきりと見えた。

「うわあ、ほんとに消えた……」

ハリーは呟くと、さっとその布を腕から取り払い、自分の腕を触って確かめた。

「……『透明マント』って言うの？」

「ええ、そうよ。全てを隠せて、マントを直接掴みでもしない限り魔法では取り除けないわ。いいものを貰ったわね」

ハリーは微笑み、ふと、足元に落ちた手紙を拾って裏返した。そこには、エメラルド色の縦に伸びたような細い字が並んでいた。

『君のお父さんが亡くなる前にこれを私に預けた。君に返す時が来たようだ。上手に使いなさい。メリークリスマス』だって。誰からだろう？ 凄く、見たことがある字なんだけど……」

ホグワーツ特急で見たもんね、なんてことは言わずに私は肩を竦めて見せた。ロンは

手紙に興味を示すことなく、恍惚とマントに見惚れている。

「このマントを手に入れるためだったら僕、なんだってあげるよ。ほんとに『なんでも』だよ。…どうしたんだい?」

「ううん、なんでもないよ」

ハリーが深く考え込む前に、ツリーのところでパーシーをイジっていたはずの双子がやって来た。私は、ハリーが咄嗟に、且つさりげなくマントをゴミの山に隠すのを見た。「屋敷妖精の騒ぎで挨拶がまだだったよな、メリークリスマス!」

2人は律儀にそう言いながら、ハリーの脇にいくつか積んである小さなプレゼントの山の一番上に乗っている、エメラルドグリーンの子猫のセーターに目をつけた。2人は揃ってブルーの子猫のセーターに身を包んでいた。ただ、黄色で大きく編まれて、見分けを付けられるようにするはずのインシヤルが逆だ。フレッドが『G』、ジョージが『F』を着ていた。

「おい、見ろよ——ハリーもウィーズリー家のセーターを持つてるぜ!」

「ああ、でも、ハリーのほうが上等だな」

フレッドがハリーのセーターを拾い上げて言った。

「ママは身内じゃないとますます力が入るんだよ」

今度はジョージが、ロンに目をつけた。にやりと笑った。

「なあ、ロン、どうして着ないんだい?とつても暖かいじゃないか」

「僕、栗色は嫌いなんだ」

気乗りしない様子で彼はセーターを頭から被りながらもごもごと言った。

「あら、似合ってるわよ。素敵な色ね」

そう追い討ちを掛けるとロンは首から耳までサツと赤らめ、またもごもごと何かを言った。フレッドとジョージは良くやったと言わんばかりに私にウィンクをして、にやにやと笑った。

「真つ赤だぞ、ロン——ん？イニシャルは付いてないのか？」

ジョージが気づいた。

「ママはお前なら自分の名前を忘れないと思っただろう。でも僕たちだってバカじゃないさ——自分の名前くらい覚えてるよ。フレッドとフォージさ」

「フレッド、ジョージ！ちゃんと自分のを着ると何度も——」

パーシーが乱入して来た。腕には、ロンのより少し赤っぽい茶色のセーターをかけている。

「パーシーこそ、ちゃんと着ろよ。少なくとも僕たちは着ているだろう？折角ママが編んでくれたんだから」

双子はパーシーからセーターを奪い取ると頭から無理矢理被せ、押さえつけるようにしてジタバタ暴れる彼を、男子寮に強制連行して行った。

「——いつも思うけど、2人は嵐みたいな人だよね」

ハリーの声にロンと2人で、全くだと頷いて、プレゼントの続きに手をかけた。

第18話 クリスマス 中編

その日の夕食、寮の判別さえ満足にできないほど適当に並べられたいくつかのテーブルは様々なご馳走で埋め尽くされた。ハリーはまんまるの七面鳥のローストが乗った金の皿の列を見た途端、目を輝かせて私を振り返った。

「七面鳥だよ！僕、こんなの初めてだ！」

他にも山盛りのフライドポテト、ゆでポテト、大皿いっぱいの子ポラータ・ソーセージ、豆のバター煮。そしてテーブルのあちこちには、魔法がかけられたクラッカーが山積みになっていた。

マグルのものなんて比較にならないそのクラッカーは、ハリーとフレッドが向かい合って一緒に紐を引っ張ると大砲のような轟音を響かせ青色の煙をモクモクと吐いた。耳が痛いほどの音響に思わず耳を塞いだが、ジョージはゲラゲラ笑い、ロンは笑いながらも早速飛び出した中身を確認し始めた。海軍将校の帽子と生きた二十日鼠が数匹だったようだ。

紐を引いた当人たちは、青い煙に巻かれてすぐにはその姿を確認できなかった。慣れているフレッドは笑っていたが、そんなことを予想すらしていなかったハリーは驚いて

少しきよんとしていた。

上座のテーブルではダンブルドア先生が自分の三角帽子と婦人用の花飾りのついた女優帽を交換して被り、クラツカーから出てきたジョークの紙をフリットウィック先生が読み上げるのを可笑しそうにクスクス笑って聞いていた。

七面鳥がそろそろ無くなり皆の手が止まり始めた頃、皿は元のぴかぴかの状態に戻った。ロンは名残惜しそうに空の皿を見つめていたが、次に出てきたプディングを見た瞬間、その顔は喜びにきらきらと輝いた。本当にロンは食べるのが好きらしい。

ジョージやフレッドと抜け道や秘密の通路、イタズラのことなど他愛もない会話を進めていると、彼らの向こう側でパーシーがプディングに入っていたシツクル銀貨に気付かず歯を折りそうになっていた。

宴が終わり、皆で大広間を後にする頃にはハリーとロンはクラツカーから出てきたお土産を両腕いっぱい抱えていた。

「色々出てきたのね」

ハリーがぼろぼろと落とすそれらに魔法をかけて集めながら声をかけた。

「うん！ ああ、ありがとう。ねえ、ほら見て、僕のチェスセットだよ。これならちゃんと僕の言う事を聞いてくれると思うんだ」

彼は嬉しそうに言つてクリスマスカラーのパッケージに入ったセットを見せた。

新品なら初心者者のハリーの命令でも言う事を聞くかもしれないというハリーの読みは当たっているだろう。それに、見る限りこの駒たちは初心者用の素直な駒だ。

「そうだと思うわ。また、明日にでも対局しましょうか」

「それ、いいね！あ、でもちよつとは手加減してね。君とロンの対局を観てると戦争みたいに思えてくるよ」

確かに、ロンとの対局はかなりと接戦で激しい攻防が続くことが多い。恐らく彼と私は同列くらいだろう。だからこそあれだけ気持よくやり切れるのであつて、ハリーと対局するときに加減できるか、と聞かれると快くは領けない。

「善処するわ」

寮に戻ると、オジーが深々と頭を下げて出迎えてくれた。暖炉は彼女が管理してくれていたらしく、まだ火が燃えて寮は心地いい暖かさを保っている。

完全に彼女の存在を忘れていたウィーズリーたちは驚いて穴からずり落ちそうになつていた。

「お帰りなさいませ。ハリー・ポッター様、ロナルド・ウィーズリー様、お荷物をお持ち

致します」

両手に溢れんばかりの（ハリーは既に溢れている）クラツカーのおまけを抱えている2人にオジーはそう言ったが、ハリーは戸惑いながら首を横に振った。

「いいよ、悪いから……僕らにはそんな風にしなくても——」

「でも、ハリー。こいつらはこういう種族なんだって、昨日言つたろ？ 気にしないほうがいいぜ」

ロンが言った。如何にも純魔法族らしい言葉だ。ハリーのような意見に慣れているのか、オジーはにこにここと微笑んでいた。

「そうだけど……」

「俺たちもそう思うな、やりたくてやってるんだからさ。でも、いきなりこれは戸惑うよな、流石に」

ジョージが参戦し、ハリーは落とされたような、半分助けられたような変な顔をしていた。

「確かにそうね。私もここで家と同じようにするのは少し慣れないわ——オジー」
「何でございましょう、お嬢様」

何を言いつけられるのだろうかと目をキラキラさせながら彼女は私を見上げた。

「折角来てもらったのに、ごめんなさいね、私、ここでは皆と同じようにしたいの。」

だから良かったらまた厨房で働いてくれないかしら。何かあったときに本当に貴女が必要になったら名前を呼ぶわ。その時はすぐに来てね。それでいい？」

この提案を聞き進むうちに、オジーの耳はどんどん垂れ下がっていった。終いには彼女は涙目で、泣くまいと唇を噛み締めて息を詰めた。

「はい、承知致しました、お嬢様」

バチン、という独特な音と共に彼女は姿をくらました。何か悪いことでもしたような胸糞の悪い思いが残る。

「ごめんね、気分を損ねるようなことになっちゃって」

事を見守っていたウイーズリーたちにそう言う。

「いや、構わないさ、親が来てるようなもんだからな……にしても、君、『ブラック』だからかなりの良家だとは思ってたけど、やっぱりそうだったんだな」

「俺たちとは格が違うぜ」

フレッドとジョージが気を利かせて話題を逸らしてくれたおかげもあってそれから家の話題になり、最後には暖炉前の特等席に皆で集まって、各家庭（とは言っても6人中4人がウイーズリー家なのだが）のクリスマスステフォについて話に花を咲かせた。

パーシーは勉強を言うとってそそくさと寮室に退散しようとしたのだが、フレッドとジョージが両腕をがっちり固めてソファに座らせることでパーシーを話の輪の中に

残留させることに成功した。

「へえ、君のお父さんって結構ユーモアがあるじゃないか」

7歳のクリスマスの朝にシリウス（とりーマス）によつて仕掛けられた『寝起きドッキリ with my friend』という題の惨劇を話すと、フレッドが感心したように言った。

「お堅そうなイメージだったけどなあ」

ジョージだ。

「お堅いなんて、父さんには一番似合わない言葉ね。昔はハリーのお父様や他の友人と一緒にやってやんちゃしてたそうよ」

「僕のお父さんど？」

ハリーが身を乗り出した。

「ええ、イタズラ仕掛け人なんて名乗っていたら面白いわ」

「なんだって!？」

今度はフレッドとジョージが身を乗り出し、二人分の音量に、心地よく居眠りをしていたロンが肘掛け椅子からずり落ちた。パーシーは唐突のことで腕を離されたことに

も気付かず、思考も追いついていなかった。

「君とハリーが初代イタズラ仕掛け人たちの子供なのかい!？」

「そうね」

さらりと答えると2人の口は滑稽なOの字を描き、顔を見合わせた。

「じゃあ『パッドフットの娘』って……」

少し思考が追いついてきたジョージが言いかけるが、そんなことを簡単に教えるわけもなく。

「さあ、どうかしら?」

いたずらっぽく笑ってそう言った。一方で、あまりに一度に飛び出したキーワードと突飛な話についていけないハリーと、居眠りで話がすつ飛んで解らないロンが大量のクエスチョンマークを頭上に掲げていた。

「ちよつ…ちよつと待つて、初代イタズラ仕掛け人つて?パッドフットつて?」

「何?何の話?」

第19話 クリスマス 後編

話がすつ飛んだロンとついて来れなかったハリーに細かく説明すること数分。十分理解を得る頃には2人は啞然としていた。

「——とまあ、そういうことなの」
「そういうことって……」

話し終わるとハリーは少し困ったように眉根を下げた。所謂シヨボン顔だ。

「まさか、君たちの両親が、初代イタズラ仕掛け人、だとは思わなかったな」

「流石に俺たちでもビックリだぜ。でも、たまに女の人が現れてたのは納得だな」

2人は揃って肩を竦め、そろそろと退場しようとするパーシーの腕を引っ掴んでソファに引き戻す。

恐らく、女の人というのは、忍びの地図、か他の彼らのイタズラの遺品のどれかにオリヴィエが参戦していたのだろう。

「どすん、と尻餅をつくように無理矢理ソファに戻らされたパーシーの両脇を再度固め、彼らはにこにここと微笑んだ。

「クリスマスは家族と過すものだろ、パーシー」

その後、またしてもと言うべきか、幸いにもと言うべきか、空気を読まなかったロンによって親の話題から離れ5人はチェスをすることになった。

勉強を諦めたパーシーは専ら観戦及びアドバイス（役立たずだが）にまわり、ハリリーの思考を攪乱した。

「そのルークはEの5の方が良くないかい？ああ！ジョージ、手加減くらいしてあげないか！」

そのゲームはやはりハリリーの惨敗に終わった。さらには駒を取つてと言わんばかりの指示しか出さないパーシーに惑わされるハリリーの駒はいつもの倍速で破壊され、最速新記録を樹立した。

「パーシー、ハリリーが困つちやつてるわ。彼はまだ初心者なんだし、自分で考えてみる方が面白いわよ」

彼の余計な口出しを止めるべくオブラートに包みに包んだ（私的にはかなり包んだつもりだ）言葉を掛けると、ハリリーは救世主でも見るように私を見た。パーシーの背後で双子が馬鹿笑いし過ぎて椅子からずり落ちていた。

「ああ、そうだね。確かに、その方がハリリーのためになるかも知れないね」

床に落ちて尚笑い続ける双子を睨みながら、パーシーは言った。双子の腹筋が崩壊する音が聞こえた気がした。

「ねえ、ジーナ、今度はジーナが相手をしてよ」

止まらない笑いと腹筋の痛みに悶え苦しむ赤毛の2人を放置して私とハリーのチェスの対局は進んで結局は私の圧勝で終わったのだが、双子やロン、私との対戦をこなしていくうちに気付けばハリーはそれなりに次の手が読めるようになり、ジョージやフレッドとなら互角の戦いを見せるようになっていた。

「1勝2敗、2引き分け。すごいじゃない、ハリーー！」

ジョージとの5連戦は良い結果とはいかないが、この短時間でこれだけの進歩は素晴らしいことだ。手放しで喜べば、ハリーは満更でもないようで照れ照れと微笑んだ。

「そ、そうかな?」

獅子を模した装飾が施された立派な柱時計が、ぼーん、ぼーんとくぐもった音で10時を告げる。

「…もう10時? 道理で眠いわね…私、もう寝るわ」

つい、と杖を振って自分のチェスの駒を片して席を立った。ロンが不思議そうに声を上げる。

「え? もう寝るのかい?」

「ロン、夜更しはお肌の敵なのよ」

魔法で詰められた駒の袋を手に、とんとんと頬を突いて微笑んだ。

「それに、私は夜更しは苦手なの。じゃあ、おやすみなさい。いい夢を」

「ジーナこそ。おやすみ」

「おやすみ、お姫様！」

……余計な一言が聞こえた気がしたが聞かなかったことにしよう。

女子寮に続く階段を重い足取りで上り、手前から3つめのドアノブを掴み中へ入る。誰もいない部屋はしんとして、窓の外の縁に積もった白い雪が月を光を反射してきらきらと煌めいていた。ドアを後ろ手に閉めて杖を振って部屋に明かりを灯し、すつと息を吸った。

「…オジー」

バチン！といつも通りに派手な音を響かせて彼女が姿を現した。

「どうかなさいましたか？」

深くお辞儀をして彼女はキーキー声でそう尋ねる。

「今どうかしたわけじゃないけど、お願いがあるの。少し危険かも知れないけど、聞いてくれる？」

「承知致しました。では、おやすみなさいませ、お嬢様」

バチン！と彼女の消えた辺りをしばらく見つめて、それから、ベッドに移動して枕元の本に手を伸ばした。

寝るのは、まだだ。まだ確認しておきたいことがある。その為には階下のハリーたちが寝るのを待たないといけない。

手の中の、今までに何度も読み返した『幻の生物とその生息地』の背表紙はよれて、柔らかくなっていた。

そういえば前世、これを読んだことがあったのだが、あれは流石に『マグル用』と称されているだけあって何とも薄っぺらかった。だが今手元にあるのはある意味本物。AからZまで全ての生物が記されて、その厚さは図鑑ほどであった。挿絵などほとんどなしにも関わらず、だ。

お気に入りのドラゴンのページを開いてぱらぱらと読み、1通り読み終わると適当なページを開いて読み漁る。また読み終われば違うページを、と幾度となく繰り返し、ふと柱時計に目をやると、短針は既に午前0時を指していた。

もうハリーたちも寝ている頃だろう。

杖先で軽く自分の頭を叩き、目くらまし術を掛ける。どろりとした生暖かい何か脳天から垂れてくるような感覚に耐え、去年シリウスがくれたなんちやつて透明マントをトランクから取り出して頭からすっぽり被ってポケットを探り、今朝そこに突っ込んだ羊皮紙を取り出した。

何も書かれていない羊皮紙を杖で2回叩き、合言葉を思い浮かべた。

我、ここに誓う。我、良からぬことを企む者なり。

言わなくても言い分、これはかなり使い易い。そんなことを思いながら、溢したインクが広がるようにじわじわとなぞられていく城の地図の完成を待った。

真ん中の白紙の部分にシリウスの忠告が浮かびあがった。

「これは私が過去に友人たちと作ったものの模造品だ。君がこれを使うとき、もしイタズラのために使うなら気をつけなさい。私たちはかつて、これからの後輩たちのためにその地図をホグワーツに残した。もしかしたらそれを持つ者が居るかもしれない。それから、夜中に歩き回るのは君だけではないことを覚えておきなさい。」

知ってます。現にハリーも今頃は出歩いてるはずだもの。

読み終わると文字は消え、代わりに「忍びの地図」と飾り文字が浮かび上がった。その下には「ムーニー　パッドフット」そして「提供　ワームテール　プロングズ」の文字。

リーマスも一緒になって作ったのか、とクスリと笑い、その下のワームテールの名を忌々しく思った。

シリウスは、まだその名を誇るべきとして見ているのだろう。裏切り、尚も生きている穢らわしいその名前。今すぐにでもとっ捕まえてやりたいが、ヴォルデモートがいる今はダメだ。余計な混乱が生じてしまう。

溜息混じりの息を吐いて、地図を開いた。あまりの精巧さと広さから、全体像を掴むには少し時間を要した。

やっと見つけたグリフィン・ドール塔男子寮に、やはりハリーの名前はなかった。

次に城の中にいるはずのハリーの点を探した。それはすぐに見つかった。何せ、この時間帯に動いているのはほとんど、ハリーともう3つの点だけだったからだ。

1つはフィルチ。廊下にいた。もう1つはスネイプ。フィルチと向かい合っていた。ハリーを探しているのだろう。2つの点はやがてハリーが移動していく方とは逆方向に動き始めた。

そして3つ目。ハリーの少し後ろをゆったりと移動するその点の上には、"アルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア"の文字。長い名前は3段にもなつて書かれていた。

本当に、おかしな人だ。何を根拠にこの人は、今晚ハリーがベッドを抜け出すと確信

したのだろう。彼が父親の透明マントを手に入れた、ただそれだけなのに。今日である根拠はなかったはずだ。明日でも、明々後日でも、クリスマスの忙しさがなくなっただけでも良かったはずなのにハリーは今晩抜け出して、ダンブルドア先生はそれを見抜いていた。レジリメンスかと思ってしまうほどだ。

地図上のその2点から目を離さないようしながら、私は部屋を出て階段を下りて、談話室を出る。今日は月が明るく、杖に明かりを付けなくとも地図くらいなら見える明るさだ。

背後で太った婦人は誰かいるのかと不審がっていたが、2度目だからか、そんなに騒ぐこともなくまた目を閉じた。

地図上のハリーは、数ある教室の1つの真ん中で、動かなくなっていた。

第20話 みぞの鏡

地図を頼りにハリーのいるその教室に辿り着いたとき、彼は部屋の真ん中に置かれた鏡の前でマントを脱いで、両手をつけて食い入るように鏡を見つめていた。

白い月の光が生む影も相まって、その横顔はまるで泣いているようにも見える。

地図上で教室の入り口を塞ぐようにして立っているダンブルドアの文字を見、彼に見つからないように私は教室の外からその様子を見ていた。

ハリーはずっとそうしていた。大きな鏡の端から端まで深く見つめ、フィルチの近付いてくる物音を聞いて時間の感覚を取り戻す頃にはもう半時も経っていた。

床に折り重なっていた銀色のマントを拾い上げ、ハリーはもう一度鏡を見ると「また来るからね」と呟き、音を立てないようにそつと教室を出ていった。

だが、いつまで経ってもフィルチは現れない。

不思議に思い地図を見れば、フィルチは遠い廊下を歩いていた。ダンブルドアがハリーを帰らせるためにやったのだろうか。遠退いていくハリーの点とは対照的に、その点はまだそこにある。彼はこちらを向いていた。

ハリーが曲がり角を曲がって見えなくなったとき、唐突に、私の被っている透明マン

トがふわりと浮いた。

「こんな夜更けにベッドを抜け出すとは、感心せんもう」

朗らかな声と共にマントはするすると飛んで、ちょうどダンブルドアがいる辺りの空中で静止した。彼は自身に掛けていた目くらまし術を解き、姿を現した。真つ直ぐに私を見つめている。

はじめからバレていたんだらう。諦めて地図をポケットに突っ込み、私も彼に倣って術を解いた。さあ、と血の気が引くような感覚が脳天から垂れていく。

「こんばんは、先生」

そうして、まるで街で偶然出会っただけのような挨拶をした。彼も同じように微笑んで挨拶を返した。

「こんばんは、レジーナ」

彼は手にしたマントの織り目を確かめるように手を動かしながら続けた。

「1年生らしからぬ素晴らしい目くらまし術じゃ。お父上からかの？」

明るいブルーの瞳がきらりと光る。

「いえ、独学です。父の古い教科書や資料本を参考にしました」

彼はほう、と感心したように声をあげ、その動きに合わせて長い髭を束ねている紐の先についたビーズが月明かりに輝いた。

「なんと、独学と。君はお母上の方によく似たようじゃ。しかし…夜中にベッドを抜け出すところは、もしかしたら、お父上に似てしまったのかも知れんのか」

特に責める様子もなく世間話をするような調子でそんなことを言い、彼はただ微笑むままだ。

「すみません、ハリーが出ていくのが見えたもので。今年は何かと物騒ですし、彼を一人にするのは危ないと思いました」

肩を竦めて言えば、彼は優しく首を横に振った。

「それは君もじゃよ、レジーナ。君も彼と同じ、1年生じゃ。いくら目くらまし術を上手く使えようとも、それは変わらぬ」

諭すような口調だが、目だけは好奇心の旺盛な子どものようにメガネの奥でキラキラと輝いている。

「…すみません、少し図に乗っていたのかも知れませんが」

そう言うと、ダンブルドア先生は朗らかに笑った。何故今、笑ったのか。この人と話しているとなんだか調子が狂う。

「そうは言っておらんよ。少々図に乗ることは良いことじゃ。そうすることで可能性が見えてくるものもある。じゃが今は、危険なものには危険なのじゃよ。君の思っている通り、今年は少々物騒じゃ。それはハリーだけでなく、君にも振りかかるかも知れんのか」

じゃよ」

今、彼が心配しているのは私か、それとも私の能力か。

そんなことが脳裏を過った。

あの予見に登場しているくらいなのだから（それにあの神様のことだ）私のこれこれなりに重要な役目を負っているのだらう。ならば、闇の帝王の死を信じていない彼にとって私の能力はハリーと同じくらい、否、もしかするとそれ以上に欠かすことのできないものであるはずだ。

大切にされたいとか、そういうことではない。悲観的になっっているわけでもなく、ただ、自嘲的にそう思ったのだ。

「…気を付けます」

「そうしてくれるとありがたいのう。ではレジーナ、これは君に返そう」

彼は手にしていた透明マントを差し出した。月の光に鈍く乱反射するそれは、ハリーのものとは明らかに違う。

「いいのですか？ 没収は…」

「いいのじゃよ。君のお父上が悩みに悩んで選ばれた折角のクリスマスプレゼントじゃ」

何故それを知っているのか疑問に思ったが、この人のことだ。シリウスから、ハグ

リッドから、リーマスから、なんて数多くの情報網があるのだからそれくらい知っていても不思議はない。

「ありがとうございます」

ここにこと微笑む彼からマントを受け取れば、彼はハリーが帰って行った方を指し示した。

「さあ、もう夜も更けておる。早くベッドに戻りなさい」

第21話 大事件

翌朝、昨晚の興奮を引き摺ったままのハリーは朝食の席でロンに「不思議な鏡」の話をした。

その話をする間も終わってから、ハリーは一口も朝食を食べようともせずにはーつと宙を眺めていた。何かに憑かれたようなうっとりとした表情だ。何となく、それが恐ろしくなった。原作でも確かに彼は鏡に取り憑かれたような表記はあったけれど、それは少し違うような気がしてならなかった。もしかしたら、いつの間にか未来を変えてしまったのではないかと。

「…ハリー、もうその鏡は見ない方がいいわ」

つい口を挟むとハリーはムツとした顔をした。

「どうして?」

「どうしてって…危険だからよ」

持っていたスプーンを置いて、ハリーに向き直る。彼のお皿は見事なまでに真っさらだった。

「危険なんかじゃないよ。あの鏡は僕に顔も知らなかった家族を見せてくれたんだ」

彼は恍惚と言った。その様子は明らかに普通ではない。

「だから危険なのよ、ハリー。もう行かないで、お願い」

「いやだ！僕は君たちとは違つて一度も両親に会つたことがなかつたんだ！君に指図される筋合いはないよ！」

ハリーの言い分はわかる。けれど、その様子はあまりにもおかしかった。

「確かにそうだわ。でもハリー、今のあなたは変よ」

「どこも変じゃない！」

ハリーは怒鳴り、テーブルに手を叩きつけた。手元のゴブレットが倒れてテーブルにかぼちや色のシミを広げていく。かぼちやのにおいが辺りに立ち込め、上座で食事をしていた数人の先生方が驚いてガチャン、と耳障りな金属音を立てた。

「私たちがからすれば変なのよ。あなたらしくない」

「どこが僕らしくないって言うのさ！」

最早広間は静まり返り、ハリーの怒声だけが反響した。広間にいる数少ない人間の目が全てこちらに集中している。しかし怒っているハリーはそのことにさえ気付かず、声を荒げた。

「そうやって怒るところよ。お願いだから落ち着いて、ハリー」

大事になる前にか落ち着かせようと優しく声をかけるがどうにもならず、つい

に上座の先生の一人——マクゴナガルが立ち上がった。

「落ち着いてるさー！」

彼女はツカツカと真つ直ぐに、大股でこちらに向かつてくる。好奇の目は依然、私たちに向けられたままだった。

「落ち着いていないわ。家族に会いたい願いが強すぎて鏡に依存してるのよ」

「依存なんてしてない！」

ハリーが一際強く怒鳴ったとき、マクゴナガルは私と彼の間に割って入った。

「何を言い争っているのですか！」

「何も!!」

「ハリーはついに先生にまで怒鳴った。もう冷静など微塵も持ちあわせていない。驚いた彼女は状況を完全に把握できずにぐつと黙りこんだ。

「ハリー！聞いてちょうだい。話を聞く限り、あなたが言っているのは『みぞの鏡』よ」
「そんな鏡なんて知らない！」

「昨日見た鏡のことよ！その前に立った人の心の一番強い望みを映す鏡。一番強い望みっていうのはその人の一番の弱みでもあるの。あの鏡は忌むべきものだわ。だからお願い、もうあそこには行かないで。行つてはダメなの」

訴えても、ハリーは幼子のようにブンブンと首を横に振るばかりだ。

「忌むべきかどうかは僕が決める！君はヴォルデモートに家族を殺されてないからそう言えるんだ！」

名前を聞いた瞬間ロンやマクゴナガル、広間にいる他の人間は怯み何人かが椅子から滑り落ちたが、ハリーもレジーナもさして気に留めもしなかった。

「殺されたわよ」

ハリーは想像もしていなかった答えに、きよとんとしていた。

「え……？」

「ミス・ブラック！」

たしなめる声も無視して続けた。

「私の母は彼の呪いを受けて、そのせいで私を産んで死んだわ。あなたのご両親のように直接的ではなくても、殺されたも同然よ」

「ブラック！」

さつきよりも鋭い声が飛ぶ。

「今のは……今のは良くありません。来なさい」

マクゴナガルはわなわなと震えていた。怒りと動揺、悲しみが混沌と存在している。

「でも、先生——」

「来るのです」

ハリーは、と言おうとして、すつぱりと遮られた。その目は鋭く、私を見つめていた。
「——は、」

マクゴナガルに先導されるまま押し黙ってひたすら冷えた廊下を歩き、行き着いたのは彼女の執務室だった。所々に猫グズが見られる以外、厳格な彼女らしい整った部屋だ。

「座りなさい」

指されたのは、応接用の深緑色のソファ。言われるままそこに腰掛け、彼女の次の言葉を待った。

きつと怒られるのだろう。自分のことではあったが、デリカシーのない発言だった。いくらハリーにつられて多少冷静ではなかったとは言え、聞かれてもいない自分の母親の死を、よりにもよって彼に話すなんて…。

ここまで歩いてくるうちに頭は冷め、どうしてハリーを怒らせて煽るような真似をしたのか、と今更後悔して溜息混じりの息を吐いた。

「どうしてあんなことをしたのです。貴女はもつと冷静だと思っていましたよ。よりに

もよってミスター・ポッターにあの話を……それ以前に、他に生徒がいる中で「あの人の話など……」

マクゴナガルは湯気の立つ紅茶を差し出しながら疲れたように言った。

「すみません、頭に血が上っていて……冷静ではありませんでした」

スツと通るような独特の匂いを放つ紅い色を見下ろしながら呟くように言った。マクゴナガルの大きな溜息が耳朶を打つ。

「冷静ではなかったとしても、あれは良くありません。ただただ論破するだけなら小さな子どもでもできます。彼の気持ちも酌んでおやりなさい」

「はい……」

項垂れ、膝の上で拳を握りしめた。

ハリーには酷いことを言ってしまった。いくら彼が鏡に依存していたとはいえ、原作では問題なく「鏡離れ」できていたのだ。私が口出しする必要性などどこにもなかったはずだ。

ふと、目の前にクツキーの入った缶が差し出された。

「さあ、お上がりなさい」

「え……」

戸惑っていると、マクゴナガルは更にそれをずい、と私に差し出した。

「ジンジャークッキーです。次の話題に移る前に、少し肩の力を抜きなさい」
「次の……？」

「鏡と、あなたの能力のことについてです。さあ」

少し強引ではあったが悪気はないらしいので恐る恐る、彼女の持つクッキーの缶に手を伸ばした。

「えっと……いただきます」

ようやく彼女の部屋から開放されたとき、連れて来られたときには8時前だった時計ももう今や短針は9時すぎを指していた。1時間以上彼女の部屋にはりつけにされていたことになる。

さして嫌なことや特段答え辛いようなことを聞かれたわけでもなく（何故鏡の場所を知っているような口振りだったのか、最近嫌な予見はないか、くらいだ）、むしろ協力的な姿勢を示してくれたので、その1時間は大して嫌な時間ではなかった。さらには色々気にかけていてくれたらしいことが、会話の節々に浮かんでいた。

太った婦人の前に辿り着いたとき、婦人は私を見るなり口を開いた。

「あなた、友だちと喧嘩したんですって？ 広間のコンスタンスから聞いたわよ」

コンスタンスというのは広間に飾られている絵画の住民の名前らしい。

ムツとしてリアクションなど返さずに合言葉を口にした。

「クリスマスの次の日に喧嘩なんて、災難ね」

婦人は隠し扉を開けようともせず、私を見下ろしていた。

イライラともう一度、今度は少し大きめに合言葉を言うが彼女は譲らない。むしろ腹を立てたように、眉間にシワを寄せた。

「失礼な子ね」

彼女は「動かないわよ」とでも言いたげに腕を組むと、ふんすと鼻息を吐いた。しかしそこで唐突に内側から扉が開き、ドラゴンでも暴れているような激しい物音が漏れた。時折「アイタツ」という声も混ざっている。

中から出てきたのはウィーズリーの双子だった。2人は婦人のように私を見るなり「ゲツ」と声を漏らし、穴から飛び降りて普段なら魔法で閉まる扉をわざわざ手で押して閉めた。

「今は入らない方がいいぜ」

ジョージが言った。

「ご立腹さ。手当り次第暴れてる。今はロンとパーシーでなんとか抑えてるけど、すぐにハリーのことだと察しがついた。」

「私のせいよ。私が行かなきゃ」

「ダメだ」

2人の間を縫って行こうとすると同時に両手で止められた。ぐい、と元の位置に戻る。

「どうして？私がハリーを怒らせたんだから、責任はちゃんと——」

「君は女の子だ。危ないよ」

フレッドが言った。

「そうだけ。ハリーのやつ、結構マジで手当り次第だからな」

ジョージは肩を竦めて談話室の方を見やりながら言った。そう言うには、本当なのだろう。それにあの音だ。ただ事ではない。

「だから、さあ、ほら、落ち着くまでどこか他のところに居たほうがいいぜ。校庭なんてどうだ？今なら雪が——」

「女の子って言ったのはお前だろ、フレッド。図書室は？あそこなら静かだし、ずっと暖かいだろ？」

競うようにそう言って、2人は私の背を押して回れ右させた。2人なりの優しさだ。

これが普通の、ハリーと一緒にのときの出来事なら、胸が温かくなって嬉しくて、笑ってしまうだろう。けれど今は、ただただ苦しいだけだった。

「……ハグリッドのところ、行ってくるわ」

呟いて、逃げるように走り出した。

「あつーちよつ…待てよ、ジーナ！」

どちらともつかない声を無視して適当な曲がり角に飛び込んで、自分自身に目くらまし術をかけた。すぐに双子は追いついてきたけれど、2人に私の姿は見えていない。

ごめんなさい、と心の中で謝りながら音を立てないように2人の横をすり抜けた。向かうのは、どこでもない何処か。ハグリッドのところへなど行けるわけがなかった。

2人からある程度離れてから目くらましを解いて、右へ左へ、階段を上って誰もいない廊下を渡って。

気付けば、みぞの鏡が置かれている部屋の前の廊下に立っていた。

「こんにちは、レジーナ」

当然のように、まるで事前に待ち合わせていたかのように彼はそこにいた。

第22話 サブタイが迷子（思い浮かばない）

「こんにちは、レジーナ」

彼は朗らかに挨拶をして、自身の長い髭を撫でた。

「先生……」

ダンブルドアは人の気を知ってか知らずか、にこにこ微笑んでいる。半月メガネの奥で淡いブルーの瞳がキラキラと輝いた。

「広間の騒ぎは既に聞き及んでおる。そのことについてマクゴナガル先生に呼び出されたことも、そこで何を話したのか知っておる」

つまり、隠し事はするな。暗にそう言ったように聞こえた。彼はふと、踵を返し部屋の中に足を向けた。

「オトゴゴコロというのは存外難しいものじゃ。……特に、ハリーのように多くを失くした者は、のう。全てを悲観しがちになる。他と比べて何が足りないか、何を持っていないのかを確認したがるのじゃよ。そして、何かに固執する」

彼は鏡の近くにまで行くとそっとそれに手をかけ、私を見た。

「…私は、ハリーに注意を促したことは、間違っていますか？」

「間違つてはおらん。むしろ注意すべき点を的確に指摘しておつたと聞いておる。ただ、そのタイムミングじゃ。ハリーの気持ちの波がちやうど高くなつたときに君が、彼の気に障ることを言つてしまうただけなのじゃよ」

君は間違つておらん。

彼は繰り返した。その言葉は簡単だが、ひどく安心できた。それを酌みとつたか否か、ダンブルドアは微笑み教室の出入り口をゆつたりと示した。

「さあ、レジーナ。そろそろ寮に戻るべきじやろう。課題は終わったかの？」

「ええ、はい。…ありがとうございます」

彼に会釈して、背を向けた。帰つたら、謝ろう。ハリーにも、ロンにもパーシーにもフレッドにもジョージにも。皆に謝らなくちゃいけない。

ふと、足を止めた。彼に振り返る。

「…先生は、その鏡に何が見えますか？」

今なら答えてくれる気がした。靴下でも何でもなく、何か、他のもつともらしいことを教えてくれそうだった。

「わしか？ わしには…お菓子を沢山持つておる自分の姿が見える。もちろん、ハツカ入りキャンデーやレモンキャンデーの大袋もじゃよ」

「先生らしいですね」

微笑んだが、やっぱり本当のことは教えてくれなかった。彼の望みはやはり、アリアナなのだろうか。また軽く会釈をして、今度こそ部屋を出た。

寮に帰る途中、動く階段の前の廊下でフレッドとジョージと鉢合わせた。2人は気温が0度を下回っているにも関わらず、汗だくで息を切らしていた。

「ジーナ……一体どこに行つてたんだ!? ハグリッドのところにもふくろう小屋にもいないし……俺たちずつと探してたんだぜ！」

ジョージはそう捲くしたて、ひどく脱力して壁に手をついた。フレッドも両膝に手をついて肩で息をしていた。

ふくろう小屋にまで私を探しに行つてくれていたのか。罪悪感が更に重くのしかかってくるのを感じ、思わず俯いた。

「ごめんなさい、誰もいないところで頭を冷やしたかったの」

「だとしても——僕らに嘘吐くことないじゃないか……心配したんだぜ」
フレッドが喘ぎ喘ぎ言った。

「本当、ごめんなさい。散々迷惑掛けておいてから嘘まで吐いて逃げたりして……許してくれないわよね」

「許さないわけないだろう? けど、もう二度としないでくれよ、俺たちの肺と心臓が擦り

切れちまう。かなりハードだったぜ、本当」

この寒い中走り回ったんだ。喉も肺も心臓も、冷気にやられて相当痛むだろう。そう思った途端、フレッドが口を挟んだ。

「おいジョージ、それジョークのつもりか？心臓ハート以前に脳味噌に血が巡ってないじゃないか。ほら見ろよ、サムすぎて鳥肌が立ってきやがった」

フレッドは自分のセーターの袖を捲って鳥肌立った腕を見せつけた。

なるほど、心臓ハートとハード、か。ちよつとわかりにくい。

「お前のそれは寒いからだろ。ほらもう仕舞えよ、我らが姫の目に毒じゃないか」
「確かに」

納得するのか。

フレッドがあまりに大人しく袖を伸ばして腕を仕舞うので逆に可笑しくなった。

「ふふっ…ありがとう、2人とも」

胸が温かくて、自然と口角が上がって笑顔になる。2人は少し驚いたように私を見たが、すぐに笑顔になった。

「どういたしまして！」

3人揃って太った婦人の前に着いた時、彼女は私を見ると溜息を漏らした。

「どこに行つてたの？あの子、やっと落ち着いたそうよ」

そして合言葉を聞くと今度こそ、扉を開けてくれた。

中は先の騒ぎなどなかったかのように静まり返っていた。暖炉の火が爆ぜる音と2人分の呼吸音だけ。

ロンとパーシーは疲れ果て、暖炉の前の肘掛け椅子で溶けていた。実際に溶けていたわけではないが、2人の脱力具合と伸び様から、その様子はまさに『溶けていた』が1番しつくり来る。

「おい、2人とも、見つけたぜ。起きろよ」

フレッドが溶けている2人を起こしにかかり、先に目を覚ましたロンが飛び上がった。

「ジーナ！おかえり、どこ行つてたんだい？フレッドから君が行方不明だつて聞いて心配したよ！」

パーシーはどうやら消耗し切つてしまつたらしく、起きたはいいがいつもの威厳やテキパキした動きはどこへやら、疲れ果てた様子でソファに座り直していた。

「談話室に入れて貰えなかつたから、ちよつと一人になりたくて。迷惑かけてごめんなさい」

4人に深く頭を下げた。

彼らにはひどく迷惑をかけた。私がハリーに突っかかりさえしなければ、この4人は今日を幸せに過ごしていたはずなのに。大袈裟かも知れないが、それはあまりに心苦しかった。

「そんなに頭を下げなくておくれよ、僕は監督生として当たり前のことをしたまでだ」

パーシーが言った。

「そうだけ、僕らも友だちとして当たり前のことをしただけだからな」

フレッドの言葉にロンとジョージも頷いた。

「…ありがとう、みんな」

温かくて、けれど寂しくて。

「ねえ、ハリーはどこ？彼にも謝りたいの」

第23話 事件解決

「ハリーはどこ？彼にも謝りたいの」

言うど、ロンはなんとも微妙な顔をした。

「あー、うん。部屋にいるよ、でも……」

ロンはそこで言葉を切った。代わりにパーシーが後を継いだ。

「誰にも会いたくないそうだ。僕たちも拒絶されてしまった」

「まさか」

フレッドが言った。

「喧嘩してるジーナにならともかく、それはお門違いだろう？」

ハリーを非難するような声上がる。

「僕もそう思ったけど……ハリーも色々あるだろ？ほら……」

親のこと、とか。

ひどく言い難そうにロンは口籠る。実際、言い難いことだ。ロンは愛してくれる親も温かな家族も持っていて、ハリーはそのどちらも持っていない。その原因に直接関係はないにしても、後ろめたい気持ちはできてしまう。

「そんなこと、気にしてなんていられないわ」

レジーナの言葉にロンは「え？」と聞き返した。

「そんな言い方はないだろう、ジーナ」

咎めるようにパーシーが言う。

「言い方はどうかと思うけど、ジーナの言う通りだぜ？今のハリーはちよつと——感情的すぎる」

ジヨージが言った。

「いくらハリーが拒絶しているとしても今行かなきゃ、結局後で気まづくなつてきつとお互いにもつと謝り辛くなるわ」

そう言つてレジーナが男子寮の方へ向おうとすると「ちよつと、」とロンが手を伸ばしかける。

「大丈夫、ちゃんと謝るわ」

レジーナはにっこりと笑つて階段に足をかける。

階段を登つて、渡り廊下のすぐ向かい側のドアにハリー・ポッターの名前が金文字で掲げられている。扉の向こうからは何の音も聞こえない。じつとしているだけなのか、それとも眠つてしまったのか。レジーナはそつと扉の前に立ち、小さく2回、ノックした。

「…放つといってくれって言っただろ」
ぶすくれた声でした。

「ハリー、私よ」

少しの沈黙の後、ハリーは「君の話なら聞かないよ」と言った。

「そう、なら聞き流してね」

レジーナはそう言つて扉を背に座りこんだ。

「私、予見の力があるつて前に言つたわよね。それでね、貴方がちゃんと”鏡離れ”でき
るつて知つてたのよ。でもあなたが鏡に心を奪われてる姿を見て少し、怖くなったの」
「過去の文献でたくさんの人があの鏡に心を奪われて廃人になったのを知つてたから
……もちろんあなたのことを信じてなかったわけじゃない。でも私の予見は河の水が
水底の小石に当たつて跳ね上がるように、ほんの少しのことで、水底の小さな小石程度
のもので、簡単に未来が変わつてしまう」

半分は嘘で、もう半分は本当だ。

相変わらず返事はなく、レジーナはぎゅつと自分の膝を抱きしめた。

「……私ね、母が死んだつて言つたでしょ。あいつの呪いを受けて……。母はとても勇
敢な人だったそうよ。それに私と同じ予見者。私の力は母譲りなの。母はレイブンク
ローの出身で、学生時代は父やあなたのお父様たちと一緒にイタズラの知恵を絞つたそ

うよ。当時は『ポッターとブラックもだけど、そこにローレンスが一緒になるとろくなことにならない』ってマクゴナガル先生に言われて3人揃って問題児だったそうよ」

「ほんとに?」

少し驚いたような彼の声が聞こえた。

「ええ、もしよかったら今度、私の父に会ってあげてくれないかしら。きつと喜んで昔話を聞かせてくれるわ……もしかしたら、卒業アルバムの写真を譲ってくれるかも」

謝ろうと思つて来たのに、私は一体何を話しているんだろう。

レジーナは小さく溜息を吐いた。

「……ごめんなさいハリー。私きつと上手に仲直りできないわ。ねえハリー、こんなときはどうすればいいの?」

「そんなの……僕だつてわからないよ。僕じゃダドリーと喧嘩にすらならないもの。一度だつて喧嘩になつてなつたことないよ」

ハリーは少し困つたように言うので、レジーナはクスリと笑つた。

「お互い様ね。……こうしない?一斉の声でドアを開けて、同時に謝るの。これで今までのことはナシ。どう?」

「ごうよ」

すぐにハリーは返事をしてくれた。

「オーケー。3. 2. 1の合図で開けてね」

「うん」

レジーナは立ち上がり、スカートの裾をはたいて扉の方に向かい合った。

「それじゃあ……3. 2. 1」

ゆつくりとカウントするとロックを外す音がして、そつと扉が開かれた。ハリーと目があった瞬間、レジーナは深く頭を下げた。彼もほぼ同時に頭を下げるのを感じた。

「あなたも辛いのに、何も考えずに否定してごめんさい」

「心配してくれてたのに怒ったりしてごめんね」

レジーナは顔をあげ、にっこり笑って言った。

「じゃあ、仲直りのハグね」

ハリーもにっこりした。

「仲直りだね」

「なーんか、拍子抜けだよな」

談話室の暖炉を囲み、双子が持つてきた屋敷妖精特製ケーキやクッキーをつまみながらジョージが拗ねたように言った。部屋の中には先の大乱闘の影がまだちらほらと見える。

「どうして?」

「だってさ、僕らがあんなに手こずったのにレジーナが行ったらすーぐ降りて来たんだぜ? ハリーのやつ」

フレッドまで少し納得行かないように言うのでレジーナはクスクスと笑う。

「ふふ、愛の力かしら?」

「まさか!」

「ちよつと!」

2人だけでなくハリーも揃って言った途端、「うるさいぞ!」とパーシーの声が飛んだ。ロンはゲラゲラと笑っている。

「君たち、仲が良いのは良いことだが自習はしているのか? フレッドとジョージは課題も終わっていないだろう! それにロンも!」

男子寮方から出てきたパーシーが怒鳴る。フレッドはパーシーから見えないようにこちらを向いて舌を出して「うげえ」という顔をしてみせた。ロンはヒーヒー言いながらフレッドと同じようにハリーと顔を見合わせて「うげえ」と言っていた。

「いいだろ、パーシー！まだ休みならあるんだから放つといてくれよ」
ジョージはクツキーに手を伸ばしながら言った。

「ダメだ！そう言つて去年も結局僕がお前たちの課題を見なくちやならなかつたんだ！
今年からはもう御免だぞ！」

「そう言つて優しいお兄さまは毎年見てくれるんだよな」

「なッ……」

レジーナはくすくすと笑つた。

「仲が良いのね」

「ゴ冗談を!!」

「滅多なことを言わないでくれ、レジーナ！第一仲が良ければこんな不毛な言い争いは
しないでらう！」

シンクロする双子に、そっくりな顔で驚いたように声を上げるパーシー。仲が良い以
外に何と言えばいいのだ。

「喧嘩するほどなんとやら、よ」
